2017年度

ボランティア センター 活動報告書

Aoyama Gakuin since 1874

2017 年度活動ダイジェスト

2016 年 10 月 1 日開設

2017 年 4 月　青学くまもとウィーク＆ボランティアセンター開設記念シンポジウム

募金活動
地震発生直後の4/20～4/29、5/13～5/28の日程で募金活動を行う。ボランティア・ステーション(現Roote)や体育会学生本部など延べ670人が参加1,552,406円を集めた。
2016年
夏の活動
8/14～9/4の3週間、西原村にて仮設住宅支援や聞き取り調査、清掃、開始のボランティアセンターの運営などの活動を行う。
2017年
春の活動
3/6～3/18の2週間、南阿蘇村にて農業支援、復旧支援を行う。東海大阿蘇キャンパスの学生によるスタディツアーなどを通して交流した。
同窓祭
熊本産のトマトやナスなどの野菜を販売。青学OBで南阿蘇村在住の写真家、長野賀市氏の写真集「ヶゼロの阿蘇」にたくさんの人が興味を持っていた。
青学
くまもとウィーク
Rooteの災害支援部は
○○した
Twitter : @aga_roote

A.G.U.

2017年5月　渋谷区「せせらぎまつり」出展

2017年6月　全国NGOスタディツアーフェスタ2017・海外ボランティア合同説明会

2017年9月　岡山県総社市英語特区ボランティア

2017年11月　青山祭

ボランティアセンター開設１周年記念シンポジウム

2017 年 12 月　飯館村写真展（ボラサポ第一期実施サポートプロジェクト）

asics

目次

巻頭ダイジェスト …… 1
1. 刊行によせて …… 10
2. ボランティアセンターについて …… 15
3. ボランティアセンター事業・活動報告
3.1 ボランティアセンター主催事業
青学くまもとウィーク＆開設記念シンポジウム …… 18
1 周年記念シンポジウム …… 20
総社市英語特区ボランティア …… 21
仙北市交流事業活動ボランティア …… 22
危機管理・安全管理セミナー …… 23
防災・減災セミナー …… 24
災害ボランティア入門セミナー …… 25
サービス・ラーニングパイロット …… 26
3.2 青山学院内連携事業
Roote 熊本プログラム＆青山学院大学短期大学合同プログラム …… 27
フィットネスセンター主催　仙北市雪かきボランティア …… 27
3.3 共催・協力事業
渋谷区せせらぎ祭り出展 …… 28
「夏体験ボランティアキャンペーン 2017」説明会 …… 29
全国 NGO スタディツアーフェスタ 2017・海外ボランティア合同説明会 …… 30
渋谷駅周辺・バリアフリーまち歩き点検 …… 31
福島県楢葉町スタディツアー …… 32
English Camp　笹塚中＆関東国際高校 …… 32
人権問題：学生限定ワークショップ …… 32
外国人おもてなし語学ボランティア養成講座 …… 33
福島県楢葉町スタディツアー第 2 弾 …… 33
渋谷区こどもテーブル …… 34
東北学院大学シンポジウム …… 35
3.4 ボランティアサポート制度
【第 1 期】
・大船渡三陸港まつり開催支援：「ペットボトル灯篭」の作成を通じた地域住民の参加機会の創出 …… 37
・体育会レスリング部　大島クリーンプロジェクト …… 38
・Samaritans Place 支援プログラム …… 39
・韓国スタディツアー …… 40
〈実施サポート〉
・飯館村写真展とギャラリートーク …… 41
・相模原キャンパス周辺地区での清掃活動 ＋ α …… 41

【第 2 期】

・大船渡地域活性化観光プロジェクト…… 42
・猪苗代スタディツアー…… 43
・Table For Two 寄付金付きドライフルーツ販売 …… 44

4. 学生ボランティアプログラム

4.1 Roote について …… 46

4.2 活動プログラム

・塩竈プログラム…… 50
・陸前高田プログラム…… 67
・熊本プログラム…… 79
・福祉プログラム…… 85
・地域清掃プログラム…… 87
・食品ロスプログラム…… 89
・ネパールプログラム…… 91
・インドネシアプログラム…… 95
・フィリピンプログラム…… 97
・M4R …… 99
・学内活動…… 101

4.3 卒業生報告 …… 103

5. 資料

5.1 ボランティアセンター利用状況 …… 107

5.2 ボランティアセンター規定 …… 115

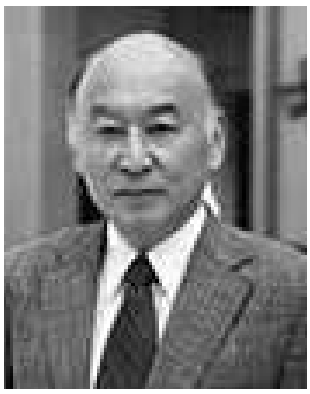
5.3 ボランティアセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ …… 121

5.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆さま

提携・協力団体 …… 124
寄付・助成をいただいた皆様 …… 125
そのほかお世話になった皆さま …… 125

1. 刊行によせて

ボランティアセンターの１年



ボランティアセンター長　鈴木　眞理
（教育人間科学部　教授）

組織としての青山学院大学ボランティアセンターは、2016 年 10 月設置だから、1 年半が経過したことになる。ただ、実質的には 2017 年度になっての活動だから、ちょうど 1 年経過して、制度的な整備がなされてきたという段階だ。

センター長のあり方は多様かと思うが、第一線に出て、というのは高橋副センター長に任せ、私にはもっぱら「センター長であるだけ」という風な立ち位置が身についてきた。いいのか悪いのか分からないが、任期中はこのままでいようと思う。

＜前身＞の「ボランティア・ステーション」時代の行動様式が残っていて、その遺産の継承がセンターの基礎になっている。海外での活動も特徴的なことだ。結構なことなのだが、それだけでは広がりが期待できない。そんなに自覚的ではない「一般学生」にどうアピールするかが課題だろう。構造上の問題か、センターは何か、入りにくい。

この間、センターではさまざまな活動支援のための文書の書式が整えられてきたが、官僚制の特徴の繁文縟礼の弊害はないだろうか。NPO の活動と、ボランティア活動はどう違うのかも、意識的に考えられなければならないのだろう。福祉や日常的な生活のさまざまな場面でのボランティア活動を、もっと視野に入れることが求められ、多くの学生・関係者にボランティア活動についての理解・構えを身につけてもらうようになるといい。そんなこともじっくり考えなければならないのだろう。

1 周年記念の阿部志郎先生の講演を、どう活かしていくか。立ち止まって深く考える時間が必要なのかもしれない。制度的な整備が、ダイナミックな活動、豊かな発想の活動をしっかりと支援できるようにしたいものだ。

ボランティアコーディネーター　佐藤　亜希

「青山学院大学でボランティアセンターを立ち上げるんだけど、興味ない？」そんな一本の電話がきっかけでした。ボランティアセンター開設初日のことは今でも昨日のことのように覚えています。青学らしく綺麗でおしゃれな調度品が整えられた 1 号館 1 階の角地にあるボランティアセンター。真新しい匂いが漂い、これからこの場所でいろいろなドラマが繰り広げられていくのだろうな、という微かな期待にも似た予感と緊張が混じり合う気持ちでいっぱいでした。震災直後から活動してきた学生スタッフの Roote とは、自分たちは何のためにボランティア活動をしているのか、活動先にどんな影響を及ぼしているのか、はたまたどんな未来のビジョンを描きたいのかについて夜遅くまで話し合うことも少なくありませんでした。

あれから 1 年半、「青学らしさ」「青学ならでは」を念頭に、学生と向き合いながら、時には学内外の関係者や活動先の支援者との対話を介して、考え続ける日々は変わっていません。それでも多くの方々に支えられながらこのように活動報告書を発行するまでに活動を積み上げてくることが出来ました。

今でもボランティアセンターは「新しい匂い」がするそうです。もっと学生たちの斬新かつ魅力的なアイデアがセンター内で交差し化学反応を起こす、そんな場所になってほしいと願っています。

ボランティアコーディネーター　澤村　隆太

ボランティアセンターが 2016 年 10 月に開室してから初めての活動報告書を刊行できますこと大変うれしく思います。この場を借りて本センターの活動をご支援いただきました皆様にお礼申し上げます。

私は 2017 年より青山学院大学ボランティアセンターのコーディネーターとして着任し、これまでの経験を活かし様々な活動を推進してまいりました。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の時大学 4 年生だった私はすぐに災害支援の現場に飛び込みその後これまで災害支援やボランティアの世界で仕事をしてきました。

時が経つにつれ災害支援から復興支援、地域支援と活動の主が移り変わっていく過程を通し学生や社会の関心も変容してきていると日々感じています。

特に学生の変容は激しく、私が学生だったころとはボランティア関わる目的もかかわり方も大きく変わっていると日々学生と接している中で感じます。

その中で課外活動として行うボランティア活動にどのような価値を見出すことができるのか、大学の部署としてボランティアセンターを設置する意義はどこにあるのか、そして学生に何を残してあげられるのか日々自問自答するところであります。

今回、この活動を報告書を多くの方に手に取っていただき、今後のセンターの発展への忌憚のないご意見を頂戴できれば幸甚に思います。

学生生活部 学生生活課　中尾　匠吾

ボランティアセンターが開設して 2018 年 4 月で 1 年半が経過しました。前身のボランティア・ステーション時代から見守り続け、ボランティアセンター開設～今日に至るまであっという間に時間が経過したような気がします。2017 年度にはサービス・ラーニングへの接続を見据えたプロジェクトの始動、2018 年 4 月には相模原キャンパスでも分室を開設するなど、（本学にしては）かなりのスピード感を持った展開です。しかしながら、足元ではボランティア学生団体の巻き込みや潜在的に関心を持つ学生へのアプローチ、外部団体との連携などまだまだ課題が山積している状況と言えます。

青山学院の事業計画の一端を担っているという使命感を持ちつつも、皆様に必要とされるボランティアセンターづくりをするべく、学生・地域社会の目線を大切にし、一職員として微力ながら貢献していければと考えております。皆様方におかれましては、今後ともご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

学生生活部 学生生活課　斉藤　恭子

センターとして年度の報告書を刊行するのは初めてのことになります。2016 年 10 月の開設より、大きな事件･事故なく運営することができ､このようにして本学の活動をご報告できることに感謝します。

ボランティアセンター設置後､本学が包括連携協定を結んでいる市区町村での活動や､ボランティア･プロジェクト・サポート（助成金制度）など、ファーストステップの支援や初心者層に向けた仕組みを作り、様々な形で支援してまいりましたが、学生の企画書を読み込み、活動を共にする過程で私自身も学生からたくさんのことを学ばせてもらいました。学生がどのような思いで活動しているのか、どんなところが足りていないのか、活動を客観視する多くの機会に恵まれました。

普段は学生生活課にて課外活動の支援を行っておりますが、ボランティアセンターが設立したことにより、学生のボランティア活動は課外活動の範疇を超え、事前・事後の学習を通じてどう新しい発見ができるか、また、それをどのようにして学生自身の糧にするかといった教育的側面をセンターが担うことが重要になってくると感じております。

開設から 1 年半、学生の活動をいかにして支援するか、まだまだ大学としての仕組みを検討する余地がありますが、本学の学生が「地の塩、世の光」となり社会で活躍できるよう、今後も後方支援に尽力していきたいと思います。引き続きご指導よろしくお願いします。

学生生活部 学生生活課　森下　博幸

この一年を通して、学生のボランティアへの想いや、それをサポートする職員やコーディネーターの尽力など様々な方が関わることでボランティア活動が成り立っているということを知ることができました。現在、ボランティアセンターは相模原キャンパスにも設置され、活動がますます活発になっています。それに伴い、これからも多くの方に関わっていただくことが重要だと感じています。私が一職員として更なるサポートができるよう尽力するのはもちろんですが、皆様にもボランティアセンターに関わっていただけたらと考えておりますので、どうか今後とも温かいご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

2017 年度学生スタッフ代表挨拶

国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科 4 年　岡林　真琴

「あなたにとってボランティアとは何ですか？」と聞かれる度に私は「ボランティアは種まきのようなもの」と答えています。私たちが企画したボランティアプログラムに参加した青学生が、これからの可能性を広げることができるような種をまくこと、その蒔いた種が一人ひとりの日々の学びや、友達との何気ない会話から成長し、いつか花を咲かせると願っているからです。これはもちろん活動を企画する私たちスタッフにも当てはまることで、１年生から４年生までの全員が Roote で過ごした時間が大きな花を咲かせることのできる種であったと思える、そんな団体でありたい、その想いが私を突き動かしていたように思います。

実際のところ、この１年間はスタッフ全員にとって「挑戦」と「失敗」を繰り返すものとなりました。ボランティア・ステーションから Roote への組織改編に伴い、企画スケジューリングや書類、その他諸々の変更点が多く手探りの状態が続き、私自身もスタッフを支える立場として Roote と大学、大学と現地、そしてスタッフ一人ひとりを繋ぐことの想像以上の困難に直面しました。中でもこの激動の１年間で私の記憶に残っているのは、慣れ親しんだ「ボラステ」の名称を変えるために何度も重ねたミーティングです。「ボランティアデザイナーズ」、「Root AGU」、「マークス」など様々な案がありましたが、最終的に物事の原点を表す Root と道筋を意味する Route を掛け合わせて「Roote」という名前に決まりました。「被害を受けた方達のために自分たちにできることをしたい」という 2011 年の東日本大震災を契機に設立された前身のボランティア・ステーションの原点を忘れず、青学生が大切な誰かを想って主体的に行動できるための道筋になれるようにという想いが込められているのです。そして、常に私の原動力は「Roote」でした。

私が唯一自信を持って言えるのは「誰よりも Roote が好きである」ということです。4 年間で私は先輩、同期、後輩のたくさんの魅力に触れましたが、その中でも私は特に、誰かの感動したことや幸せを自分のことのように喜べるスタッフの姿が最大の魅力だと感じています。私はこのようなスタッフが誰よりも誇りですし、そんな素敵な仲間と一緒だからこそ失敗や苦しさをやりがいや楽しさに変えることができたのだと思っています。

そしてスタッフだけでなく、私たちを温かく見守ってくださったボランティアセンターのコーディネーターさん、大学職員の皆さま、そして活動に関わってくださる皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。皆様のお力添えで Roote は、2017 年度青山学院大学学生表彰を受賞することができました。Roote としてはまだまだこれからが踏ん張り時ですが、日頃よりご理解、ご協力してくださる全ての方々への感謝を忘れず日々精進して参りますので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2. ボランティアセンターについて

2. ボランティアセンターについて

青山学院大学ボランティアセンターは青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」を体現する人物、サーバント・リーダーの育成に向けて、実践するボランティア活動を促進させる目的で設立しました。また、2018 年 4 月には相模原キャンパスにもセンターを開設し、両キャンパスでのボランティア活動支援の基盤が整いました。

2011 年 3 月の東日本大震災以降、青学生が主体的に活動展開してきたボランティア・ステーションを改組する形で学生へのボランティア活動情報･機会の提供や大学としての社会貢献活動の一端を担います。

■設　立　2016 年 10 月 1 日設立

■所在地　青山学院大学青山キャンパス 1 号館 1 階
＊ 2018 年 4 月には相模原キャンパスＢ棟 1 階に開設

■センターミッション

①学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
②大学の持つ専門性や強みを活用してボランティア活動の社会的効果を向上すること
③社会貢献活動への参加にともなう教育的効果を向上させること

■事業内容

A. 活動支援分野（直接的支援）
（1）ボランティアへの参画機会の提供
（2）ボランティア活動の実施促進
（3）ボランティア活動に参加する学生・団体の能力強化

B. 環境整備分野（間接的支援）
（1）ボランティア活動に関する学内外の専門家・関連団体との連携の促進
（2）ボランティア活動の社会的・教育的効果の評価と勧告
（3）ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信

■設立までのあゆみ

2011 年 3 月　東日本大震災発生後に、被災地に対して緊急支援等を行う目的で、学長を委員長とする緊急支援対策委員会が発足
2011 年 5 月　ボランティア企画・活動団体として「青山学院大学ボランティア・ステーション」が設立される
2011 年 7 月　被災地各地で、学生・教職員がボランティア活動に参加。その後、アジアでの国際協力やキャンパス近辺での地域協力へ活動を拡大
2015 年 3 月　緊急支援対策委員会にて「ボランティアセンター」開設に向けたワーキンググループを設置
2015 年 11 月　ワーキンググループが「ボランティア活動支援の方向性」を提案し承認される

2016 年 4 月　「AOYAMA VISION」における事業計画として位置付けられ、ボランティアセンターの開設準備を開始する

ボランティアフォーラムを開催して学生ボランティア団体との意見交換を行い、意見の取りまとめを行う

2016 年 3 月～ 7 月　ボランティアセンター設置準備委員会とボランティアセンター設置準備実務委員会による協議

2016 年 10 月　ボランティアセンター設立

3. ボランティアセンター事業・活動報告

3. ボランティアセンター事業・活動報告

3.1 ボランティアセンター主催事業

2018 年度は AOYAMA VISION 推進事業としてボランティアセンターとして 2 回のシンポジウムを開催した。

青学くまもとウィーク＆ボランティアセンター開設記念シンポジウム

熊本県を中心に九州地方を襲った大地震発災後 1 年を迎える 2017 年 4 月に、学生スタッフ熊本プログラムメンバーが中心となり、「青学くまもとウィーク」を企画・実施した。期間中は熊本県内で映像記録を撮り続け、本学卒業生でもある写真家長野良市氏の写真展を青山キャンパス内で開催。ボランティアセンター内には等身大のくまモンパネルを設置し、一緒に写真を撮り SNS に投稿するキャンペーンを展開したり、熊本地震の被災地で使用されたブルーシートを加工したブルーシードバックの販売を行った。また、青山・相模原キャンパスの学食では熊本県産ヒノデ米を使用した特別メニューを提供し、地震被害の悲惨さだけでなく、熊本の魅力も十二分に五感で味わってもらえるイベントとした。

イベント最終日の 4 月 15 日（土）には、ボランティアセンターの開設記念シンポジウムを開催した。本シンポジウムは学生スタッフが企画する熊本応援イベントの一つとして位置づけ、熊本地震のみならず大学のボランティアセンターや学生ボランティアとして関わることのできる災害対応・復興について包括的に考える機会を提供することを目的とした。

シンポジウムはボランティアセンター長の挨拶で開幕した後、2016 年 4 月の熊本地震以降、学内募金活動や熊本県内の被災地域で行っている学生が活動報告を行った。続いて、首都圏で熊本を応援する活動を行っているクマコネプロジェクトの岸田氏をゲスト演者として招き、「東京から眺めて見えてくる熊本、～ Aogaku viewpoints ～」をテーマに熊本を多角的に捉え、学問探求のフィールドとなる可能性を示唆いただいた。

後半は災害支援における学生ボランティアの役割について、パネルディスカッションを行った。パネリストには 2011 年の東日本大震災後発足した大学直属の学生ボランティア団体「ボランティア・ステーション」の副代表を務めた本学卒業生、大規模災害後の経験がある東北学院大学や熊本大学の教職員や災害時のマップ作り専門家である本学教員を交え、ボランティアセンター副センター長の高橋良輔教授がモデレーターを務めた。

事前の広報不足から当日の参加者数は伸び悩んだが、参加いただいたからからは非常に高い評価を得た。具体的な学生たちの活動、活動と現場、コーディネーションなど多角的な視点で今後、大学ボランティアセンターが災害時に果たす役割について伝えることができた。

1 周年記念シンポジウム

ボランティアセンター開設 1 周年記念シンポジウム
「“経験” × “ 繋（つな）がり” で更（さら）なる『発展』を！」

ボランティアセンターが 2016 年 10 月 1 日に設立してから一年、東日本大震災をきっかけに立ち上がった学生ボランティア団体の活動サポートを主軸に、より多くの青学生・教職員にボランティア機会を提供するためのサポート制度を充実させてきた。1 年間の成果を学内外に伝えるために 2018 年 11 月 18 日（土）に 1 周年記念シンポジウムを開催した。

基調講演には日本の社会福祉の第一人者であり、本学名誉博士である阿部志郎先生を招き、大学生にとって主体性を持ったボランティア活動の意義について語っていただいた。その後、ボランティア学生の活動発表やパネルディスカッションを行った。

キリスト者でもある阿部先生は欧米と日本における社会保障の違いを隣人愛の例えを用いて語った上で、人が築いた制度やシステムのひずみからボランティアの活動の原点であるエネルギーが生まれると熱弁された。

続いての学生活動発表ではボランティアセンター学生スタッフ Roote の他、「ボランティア・プロジェクト・サポート制度（以下、ボラサポ）」第 1 期に採択された「三陸港まつり開催支援プロジェクト」と「体育会レスリング部　大島クリーンプロジェクト」、「Samaritans Place 支援プログラム」の 3 つのプロジェクトの活動報告があった。

シンポジウムの最後は学生生活の中で様々な“ボランティア経験”を培った本学学生 2 名と本学教職員に加えて東京ボランティア・市民活動センターの小野明子様を迎え、それぞれの“繋がり”を“発展”させるためのパネルティスカッションを行った。

総社市英語特区ボランティア

事業名	岡山県総社市《英語特区》ボランティア
目的	英語教育もしくは教職課程にある学生に英語特区での英語教育の現場を知ってもらう。また、包括協定を締結している総社市の魅力そのものに触れてもらう。
日程	2017 年 9 月 11 日（月）～ 9 月 15 日（金）
場所	岡山県総社市
告知方法	学生ポータル：一次募集（教育、英米、国政経）：6/10 二次募集（全学部）：7/4
参加者数	青学生 7 名
内容	2014 年に包括連携協定を締結した岡山県総社市における、学習支援を目的としたボランティアプログラム。今年で 2 回目の開催となる。主に英語教育に関心のある学生を対象に募集をかけ、総社市昭和地区の幼稚園、小学校、中学校で英語教育のサポートを行う。
成果	参加学生の事後レポートから、現地の子どもたちと交流し、英語特区ならでは英語教育の現場を学ぶことで様々な気づきがあったことが伺える。ボランティア活動だけでなく、地元の人々との交流や市長を交えた懇親会などで総社市の魅力そのものにも触れる体験も得られた。 なお、今年は本学卒業生である片岡聡一総社市長の本学訪問に合わせ、学長室で活動報告会も開催した。ボランティア後も個人単位で総社市との交流は続いている。
共催	岡山県総社市 青山学院大学ボランティアセンター

仙北市交流事業活動ボランティア

事業名	秋田県仙北市交流事業活動ボランティア
目的	包括協定を締結している秋田県仙北市との交流促進を目的に本学生に対しボランティア活動の機会を提供し地域分野や歴史理解、および雪国における生活様式を体験してもらう。
日程	2018 年 2 月 4 日（日）～ 2 月 7 日（水）
場所	秋田県仙北市
告知方法	学生ポータル：一次発信 12/22 二次発信 1/11
参加者数	青学生 10 名（他、教職員引率 2 名）
内容	2 度目の実施となる本プログラムは（1）田沢湖周辺地域及び角館地域の伝統的文化や地域の歴史について学ぶ交流（2）地元の児童館、小学校、中学校における英語授業のサポートや授業見学等の教育サポート（3）単身の高齢者世帯の雪下ろし作業の 3 本柱で行った。
成果	参加者は全員が初の秋田県訪問であり、これまで体験したことがないほどの積雪量に驚きつつも豪雪地域の過酷な生活環境を知り、地域文化を理解した。参加者の中には留学生も含まれていたが、留学生活中の印象深い思い出となったようだ。 今後の自分のキャリアに役立てたいと考えている学生もおり、物事を捉える視野や価値観を広げる良い機会を提供することが出来た。 また、運営面では 2 年度目ということもあり、仙北市側も大学側もスムーズにプログラムの企画から実施運営まで担うことが出来た。
共催	秋田県仙北市 青山学院大学ボランティアセンター

危機管理・安全管理セミナー

事業名	第１回　危機管理・安全管理セミナー テーマ「海外渡航時の予防接種と現地での健康管理」
目的	ボランティア活動という課外活動を行う学生の身の安全を確保するために、海外渡航時のリスクについて学び、出発前後から対応できるようにする。
日程	2017 年 6 月 14 日（水）15：00 ～ 16：30
場所	青山キャンパス　17506 教室
告知方法	学生ポータル：5/23 配信　414 件、6/10 配信　228 件 Facebook イベント、VC ウェブサイト、LINE@、チラシ掲示、 授業内告知（地球　高橋先生の授業）
参加者数	11 名（学生 6、教職員 5）
内容	日本旅行医学会の篠塚規先生に「海外ボランティアの旅行医学」と題し、主にインドネシア、ネパールの事例を用いて、現地の医療事情か予防と対処について講演いただいた。冒頭にクイズを行い、答え合わせをしながら参加者に正しい知識を提供。先生自身の体験談を元に、現地に持参すると良い医薬品や備品、医療情報の入手方法など具体的な情報が盛り込まれ非常に実践的な内容であった。参考資料や書籍、医薬品などの現物を持参されていたので、直接手に取る機会がもてた。
成果	参加者は少数であったが、実際に海外でボランティア活動している学生や保健管理センターの教職員に有益な情報を提供することが出来た。 日本旅行医学会が実施したアンケート（回収数 7 枚）結果の大半は非常に分かりやすく、役立つというものだった。主な感想は次の通り、 「感染症リスクについてこれまで考えたことがなかった」「どれだけ自分が知識を持ってなかったかを知った」「予防接種の必要性を実感した」「貴重な機会であり今後に役立てたい」「これまで危機管理について軽く考えていたが考えが改まった」
主催	青山学院大学ボランティアセンター
協力	保険管理センター 国際交流センター

防災・減災セミナー

事業名	2017 年度　防災・減災セミナー テーマ「災害について正しく知って備えよう」
目的	災害大国である日本に暮らす我々が災害に対して正しい知識を持ち、備えることにより災害発生時の対応スキルを上げ、自身の被害軽減を目指す。また、知識の習得することにより伝承する意欲を高め、自らが積極的に同年代の学生及び地域住民に向けて情報を発信する学生を育成することを目的とする。
日時	2018 年 1 月 16 日（火）18：30 ～ 20：00
場所	青山学院大学ボランティアセンター
参加者数	3 名（学生 1 、職員 2）
内容	災害に関する一般知識の提供及び災害発生時の行動事例などを提供する。また、災害に備えた対策としての事例を提供し、簡単なワークショップを実施。 ・災害とは ・災害発生から避難までの流れ ・災害発生から避難完了までの注意点 ・備えておくとよいものについて ・防災クイズ スライドを用いた講義形式で実施。災害の種類の紹介。災害発生の原因の説明。災害発生時の身の守り方、避難所等への移動の際の注意点。避難所等での生活をする際の配慮点や、生活環境を良くするための工夫などを説明した。最後に簡単な○×クイズを実施。また、防災教育に使われているツールの紹介も行った。
講師	青山学院大学ボランティアセンター コーディネーター　澤村　隆太
所感	3 人という人数での実施ではあったが、真剣に受講しているようであった。初めて知った内容・知識もあったようで受講中、頷いたりメモを取る人もいた。
今後の展望	実施時期の再検討が必要。新年度 5 月ごろなど比較的学生に余裕がある時期での実施が望ましいのではないかと考える。また、防災・減災活動をより身近に感じてもらうために体験型のセミナーの実施も検討したい。
主催	青山学院大学ボランティアセンター

災害ボランティア入門セミナー

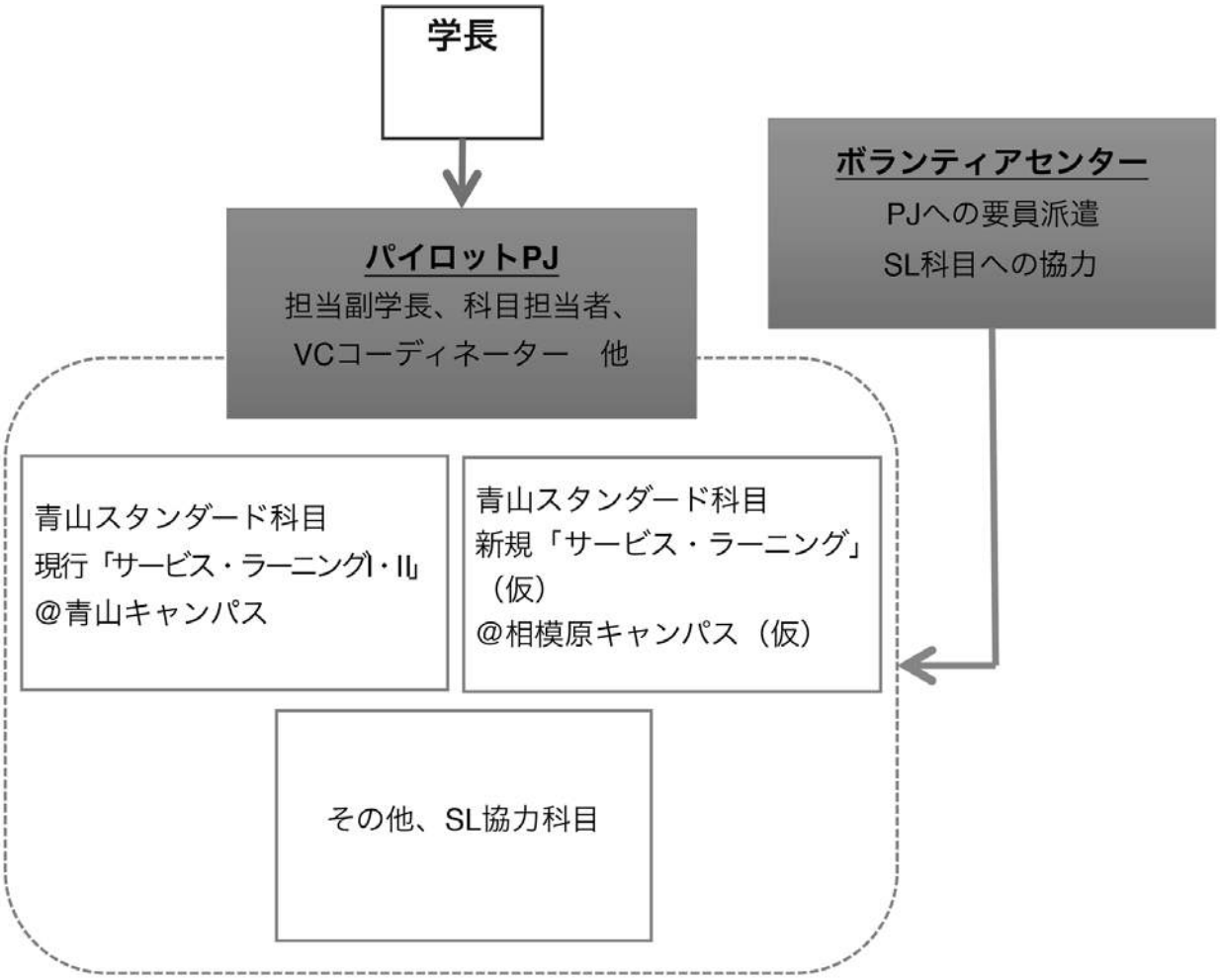
事業名	2017 年度　災害ボランティア入門セミナー テーマ「災害ボランティアについて正しく知ろう・考えよう」
目的	大規模な災害が発生すると被災地に多くの支援が必要とされることが多い。とりわけ学生をはじめとする若者のニーズや役割は大きく様々な支援において機動的に活動されることを期待されている。 事実、東日本大震災や熊本地震においては災害発生直後の初動対応の大きな役割を学生がにあったことも報告されている。 一方で、災害発生時に必要な支援やボランティア活動での注意点を正しく知らず、現地に行くことに躊躇してしまう、実際に現地活動を行おうとしても支援の妨げになってしまうという事例も発生している。 今回のセミナーでは災害支援にはどのような種類があるのか、実際に現地で活動するときにはどのような注意が必要なのかを事例をもとに学び、実際に現地活動において発生したアクシデントを基にケーススタディを行う。 これらにより、来る災害に備え、災害発生時に率先支援者となることが出来る知識を得ることを目的とする。
日時	2018 年 1 月 18 日（木）18：30 ～ 20：00
場所	青山学院大学ボランティアセンター
参加者数	3 名（学生 1 、職員 1 、教員 1 ）
内容	災害発生時における支援活動の種類や内容に関する知識の提供及び支援時期に違いによる活動の注意点に関して知識を提供する。また、災害発生時に現地において発生したトラブルを基に作成したケースを用いたケーススタディを実施。 ・災害支援の種類及び注意点 ・過去の災害支援において発生したトラブル スライドを用いた講義形式で実施。災害ボランティアとしての支援内容の紹介。支援活動における注意点。活動現場で起こりうる事象（けがなど）の紹介。支援活動を終了した後行うことが出来る後方支援の内容の紹介など。
講師	青山学院大学ボランティアセンター コーディネーター　澤村　隆太
所感	全員、災害支援活動の経験者だったが、自分が支援活動を行ったもの以外に関しては初めて知ることも多かったようで、おおむね満足してもらえたと考える。また、セミナー終了後に参加者からの質問に答える時間を設けたが、とても盛り上がり有意義な時間とすることが出来たと感じる。
今後の展望	実施時期に関しては上記防災・減災セミナー同様再考の必要あり。 また、災害支援の分野は多岐にわたるので、複数回のテーマ別セミナーの開催も可能性として考えられる。
主催	青山学院大学ボランティアセンター

サービス・ラーニングパイロットプロジェクト

AOYAMA VISION における大学 Action の一環として“ボランティアセンター（以下、VC）を通じた正課としてのサービス・ラーニング（以下、SL）の展開”が進められている。その主体となるのが、前身の SL 検討委員会にて設置を提案された本プロジェクトであり、準備期間を経て 2018 年 10 月に外岡副学長をリーダーとして正式に発足した。

VC からは、高橋（副センター長）、中尾、澤村の 3 名をプロジェクトメンバーとして派遣し、パイロット科目の設置検討、既存の協力科目の次年度授業の構想・準備段階における VC 連携先機関の情報提供や学内類似取組の紹介、受け入れ可能性の調査等を実施した。プロジェクト全体としてはサーバント・リーダー育成に向けた教育成果指標の策定のためのヒアリング調査を行い、その結果を元にした SL とサーバント・リーダー”の概念整理や指標プロトタイプの作成等を実施した。

2018 年度には協力科目の実施サポートやサーバント・リーダーモデルとなり得る学生へのインタビュー調査、パイロット科目の授業準備、それらを通じた指標プロトタイプの試運用と改善等を進めていく予定である。



3.2 青山学院内連携事業

事業名	Roote 熊本プログラム＆青山学院女子短期大学合同プログラム
日時	2017 年 8 月 13 日（土）～ 8 月 19 日（日）
内容	熊本県南阿蘇村
参加者数	計 10 名（学生のみ） 青山学院女子短期大学生 5 名 ボランティアセンター学生スタッフ 5 名 女子短期大学教員 1 名、ボランティアコーディネーター 1 名
内容	青山学院全体としてボランティア活動を推進していくためのきっかけを提供するため学生スタッフが企画するプログラムに女子短大生が参加。 活動初日には熊本県南阿蘇村にて東海大学の学生による熊本地震の被害状況を学ぶためのツアーに参加し、農業従事者の方の活動支援（ハウスの設営補助や収穫補助）を行った。
成果	地震被害の現状を学生が理解し、その支援に携わることによって被災地域への想いを寄せること、地元住民との交流を通して地方における課題や魅力などを知ることができた。
共催	青山学院大学ボランティアセンター 青山学院女子短期大学

事業名	フィットネスセンター主催　仙北市雪かきボランティア
日時	2018 年 2 月 15 日（木）～ 2 月 18 日（日）
内容	秋田県仙北市
参加者数	15 名
内容	課外教育プログラムの一環として年 2 回、フィットネスセンターが主催している「野外フィットネスプログラム」の開催場所として 2016 年より地域包括協定を締結している秋田県仙北市での開催を行った。すでに実績のあるボランティアプログラムを主軸に企画作りに協力。フィットネス要素とボランティア要素を組み合わせることでより濃厚なプログラムへ発展させることが出来た。
成果	学内の部署との連携を推進することができた。同じ課外活動をサポートしている部署と今後のさらなる相互発展が期待できる。
主催	青山学院大学フィットネスセンター
協力	青山学院大学ボランティアセンター

3.3 共催・協力事業

事業名	「第 18 回　せせらぎまつり」出展
日時	2017 年 5 月 14 日（日）10 時～ 15 時 30 分
内容	渋谷区総合ケアコミュニティ・せせらぎ　2 階広場
参加者数	ボランティアセンター学生スタッフ Roote　地域連携部　4 名
内容	渋谷区が毎年実施している地域イベントに学生スタッフ Roote が出展。 幡ヶ谷 GAYA やえびす青年教室で行っている福祉活動の紹介を行った。
主催	渋谷区せせらぎまつり実行委員会（渋谷区社会福祉協議会）

事業名	「夏体験ボランティア説明会
日時	2017 年 5 月 30 日（火）　19 時～ 20 時 30 分
場所	青山キャンパス　17 号館　17606 教室
内容	東京ボランティア・市民活動センター（TVAC）が毎夏実施している「夏体験ボランティア」の大学キャンパス内ガイダンス。ターゲットは青学生、他大学生、社会人
参加者のコメント	・夏休みに「何かしたい」と思っていたら今回の事業を知り参加してみた。説明も丁寧でよかった。 ・子供の支援に興味があるので参加してみようかと思う。 ・実際の受け入れ団体の方の話を聞くことできて活動内容がイメージしやすかった。スケジュールなども詳しく聞けたので参考にしたい。
成果	本学のボランティア活動を行いたいと考えている学生の潜在的ニーズがあることが分かった。 主催である東京ボランティア・市民活動センターとの連携を深めることができ、今後の活動の幅を広げていける可能性を見いだせた。 1 名での参加者が多く、活動の機会を探していると思われる学生が多く見受けられた。
次回へ向けての提案	潜在的なニーズがあることが分かったため複数日開催も視野に入れてはどうか。 アンケート等の実施を行いどのような活動に興味があるのか、どのような点が活動のネックになるのかを把握する必要がある。 学生への情報提供等を行う機会を設けるようにフォローしていければよいと思う。（ML 配信やボランティア紹介会など） ボランティア活動を始めるにあたり注意点や配慮すべき点を学べる講座などの開催も行うとよい。
主催	東京都社会福祉協議会　東京ボランティア・市民活動センター
協力	青山学院大学ボランティアセンター しぶやボランティアセンター

事業名	全国 NGO スタディツアーフェスタ 2017・海外ボランティア合同説明会
目的	NGO が主催するスタディツアーの内容を紹介・情報提供し、過去のツアー参加者から体験談を語ってもらうことにより、大学生の海外ボランティア、スタディツアーへの参加を促進する。
日程	2017 年 6 月 7 日（水）15：00 ～ 18：00
場所	青山キャンパス　イチナナ食堂
参加者数	60 名程度　（アンケート回答数 33）
内容	スタディツアー、海外ボランティアを企画・運営している国際協力 NGO、旅行会社合同の説明会。今年は 15 団体（NGO11 団体、旅行会社 3 社 +Roote）の参加があった。冒頭に旅行会社によるツアーの選び方に関するプレゼンを行い、その後 3 名のツアー参加者から体験談が語られた。その後はイベントの終了時間までブースでの個別相談とした。今年は CFF ジャパン、スタディツアー研究会、当センターの 3 団体の共催とし、運営事務局は CFF ジャパン。 昨年と同じ場所であったが、開催日が平日午後ということもあり、食堂自体は土曜日よりも活気があった（昨年参加者談）。また、昨年の反省を踏まえて会場レイアウトを工夫し、気軽に入れる雰囲気作りに務めた。来場の目的や情報収集ルートを測るためのアンケートを各ブースにて実施し、33 件回収（別添参照：合同説明会来場者アンケート集計）。来場者の多くは青学生であったが、ネット検索や NGO のウェブ経由で来場した青学以外の参加者も 9 名程度いた。
成果 （ボランティ センターとして）	・Roote の国際協力部として参加。ブースには 5-6 名ほど立ち寄り、募集中のインドネシアプログラムや Roote の活動について紹介する機会となった。また、学生スタッフも積極的に NGO ブースに赴き、プロジェクトサイトでの現地コーディネート方法など、情報を収集することが出来た。 ・参加 NGO が団体登録をしてくれるなど、センターで扱うボランティア情報の増加に繋がった。 ・食堂という不特定多数の人が出入するオープンスペースでのイベント開催について経験を積むことができた。 ・会場設営ボランティアとして相模原キャンパスから学生 5 名（地球）の協力があった。
反省点と 今後に向けての 改善点	・当日、同時刻に大学の大きなイベントが開催されていたので、他のイベントと重複しないように企画段階で調整を図る。 ・昨年よりもブース数は減少したがスペース的には丁度よかったので、仮に次年度も開催する場合、ブース数が増える場合にはスペースも広げる必要がある。
共催	スタディツアー研究会 青山学院大学ボランティアセンター NPO 法人　CFF ジャパン

事業名	渋谷駅周辺・バリアフリーのまち歩き点検
日時	6 月から 10 月にかけて計 17 回学内募集
内容	渋谷区内各施設
参加者数	約 44 名（サークル単位での参加含む）
内容	渋谷区都市整備部からの依頼を受け、駅周辺のバリアフリー基本構想の作成に向けて、具体的なバリアフリーに関する問題点や課題、改善策等を利用者の視点で抽出するため街歩き点検を行った。また、学内での学生募集に先立ち説明会を 2 回開催した。(5 月 19 日、5 月 24 日)
主催	渋谷区都市整備部

事業名	福島県楢葉町スタディーツアー第 1 弾
日時	2017 年 9 月 5 日（火）
内容	福島県楢葉町
参加者数	計 13 名（他大学生含めツアー参加者は 20 名）
内容	一般社団法人ならはみらい主催のスタディツアーの参加者をボランティアセンターが窓口となり参加者を募集した。ツアー内容は郷土料理作り、原子力発電所に関するディスカッション、町民との交流会など。
主催	一般社団法人ならはみらい

事業名	笹塚中学校×関東国際高校×青山学院大学 English Camp
日時	2017 年 10 月 6 日（金）～ 7 日（土）
内容	ブルーベリーヒル、千葉県勝浦市（関東国際高等学校研修施設）
参加者数	１名（大学院生）
内容	渋谷区笹塚中学校が実施する English Camp に関東国際高校生と青山学院大学生が参加。異なる中高大の連携プログラムとしての第一歩となった。
主催	関東国際高校、渋谷区笹塚中学校

事業名	学生限定ワークショップ：よりよい社会をつくるために人権活動家が、今、学生に伝えたいこと
日時	2017 年 10 月 25 日（水）18：30 ～ 20：30
内容	ボランティアセンター
参加者数	15 名程度（内青学生は 2 名）
内容	人権 NGO アムネスティ・インターナショナルの学生組織であるユース・ネットワークの企画をボランティアセンタースリースペースを利用して実施した。 中国の人権活動家、陳光誠さんを招き自身の体験を講談。その後グループディスカッションを通じて陳さんの成功要因を考え、これからの自身の説活にどう役立てられるかを学んだ。
主催	アムネスティ・ユース

事業名	外国人おもてなし語学ボランティア養成講座
日時	2017 年 12 月 20 日（水）15：00 ～ 18：30
内容	青山キャンパス　17 号館　17410 教室
参加者数	39 名受講（事前申込者は 60 名）
内容	東京都が実施している「外国人おもてなし語学ボランティア養成講座」を青山キャンパスで実施。相手の立場に立って一人ひとりが「おもてなしとは何か」を考え、実践し、グループワークを通じて思いやりの心、積極性と協調性の向上を図った。
主催	東京都生活文化局

事業名	福島県楢葉町スタディーツアー第 2 弾
日時	2018 年 2 月 27 日（火）
場所	福島県楢葉町
参加者数	計 11 名、ボランティアコーディネーター 1 名 （他大学生含めツアー参加者は 24 名）
内容	9 月に引き続き、一般社団法人ならはみらい主催のスタディツアーの参加者をボランティアセンターが窓口となり参加者を募集した。リピート参加を想定し、ツアー内容はより町民との交流に比重を置き、まちづくりについて考えてもらう機会とした。
主催	一般社団法人ならはみらい

事業名	渋谷区こどもテーブル
日時	2017 年 12 月から随時
場所	各こどもテーブル活動先
参加者数	13 名（申込者）
内容	渋谷区社会福祉協議会が実施する「こどもテーブル活動助成」を活用した活動先 8 か所に対する学生ボランティア募集の告知協力。 ＜活動紹介先＞ ・なっつの木（学習支援、レクリエーション、おやつタイム） ・代々木こどもテーブル～春の小川～（学習支援補助） ・2020 年東京オリンピックに向けて英語を学ぶ会（学習支援補助） ・原宿こども食堂 あーすりんくきっちん（調理補助、学習支援、子どもと遊ぶ、イベント運営） ・パール子どもテーブル活動（学習声支援、子どもと遊ぶ、一緒に食事） ・恵比寿じもと食堂（こどもと遊ぶ、近隣の畑で収穫手伝い） ・上富ダイニング（宿題の手伝い・子どもと遊ぶ・調理する子どもの見守り） ・リフレッシュ氷川こども食堂（子どもと遊ぶ・簡単な調理補助）
主催	渋谷区社会福祉協議会

渋谷区

こどもテーブル
KODOMO TABLE

東北学院大学シンポジウムでの報告

平成 29 年度大学間連携災害ボランティアシンポジウム
「被災地支援に期待される学生ボランティアを考える」

日時：2017 年 12 月 16 日（土）11 時～ 16 時 30 分
場所：東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館ホール
共催：東北学院大学災害ボランティアステーション
　　復興大学災害ボランティアステーション
　　大学間連携災害ボランティアネットワーク
内容：リレートークならびにパネル展示にボランティアセンター学生スタッフ 3 名が参加。Roote の団体紹介と活動報告を行った。

参加学生の報告：

今まで災害シンポジウムと言われるものには何回か参加したことがあるが、今回のように学生主体で行うものは初めてであった。学生という同じ立場でも現地に対して思うことや行うことはそれぞれであり、自分たちが気付かなかったことや異なる視点からのアプローチをしている団体も多く今一度現地や自分たちが行っている支援について見つめ直す非常に良い機会となった。印象的だったのは日本における災害ボランティアの歴史において、社会の形が変わるにつれて災害も変わり、さらにはボランティアの形も変化しているということだ。こうして考えると日本は震災が絶えない国であり、今後は「減災」が重要なテーマであると思う。私たちも社会のニーズに合わせたボランティアを今後も作り上げたいと強く思った。

（学生スタッフ　渡辺涼真）

今回のシンポジウムの参加を通して、各大学が実際に東北や災害そのものに対してどのような取り組みをしているかを知ることができた。「災害を通して社会の課題が明らかになる。」と言われることがある。今日、人と人の結びつきが少なくなっている。そのような社会の課題を少しでもよい方向に持っていくことが、防災につながり、ひいては地域のつながりの強化につながるということを再認識した。そして、その架け橋をするのが学生であるということも強く感じた。地震大国である日本で、そのような役割を担う学生の力が、ますます重要になっていると感じた 1 日であった。

（学生スタッフ　高力　葵）

僕は今回初めて防災シンポジウムに参加しました。当日までは防災について素人並みの知識しか持たない自分が参加しても良いのだろうかと不安でしたが実際参加してみると同じく参加した各大学に所属するボランティア団体の活動内容やそもそも現在のボランティアの受け入れ態勢が構築されるまでの過程など普段の自分たちの活動の範囲では知り得ない情報を知ることができ参加した甲斐があったと実感しています。自分は災害支援部の熊本プログラムの一員として他の大学の熊本支援に大きな関心を持ちながら活動報告を聞いていました。すると、単に熊本支援と言っても例えば活動地域内で行われるイベントやお祭りの運営の手伝いを行なっている大学や商店街の魅力の発信や活性化のため

の活動を行なっている大学など支援の形が多様にあり、まだまだ自分たちに出来ることは沢山あるな、と感じました。

（学生スタッフ　岡本　育也）

3.4 ボランティアサポート制度

ボランティア・プロジェクト・サポート制度

2018 年度から青山学院大学ボランティアセンターでは、青山学院大学の学生･教職員が主体となって実施するボランティア活動の促進と可視化を目的として、ボランティア・プロジェクト・サポート制度を開設した。前期・後期の年間 2 回の公募期間を設け、2018 年度は計 7 件プロジェクトが採択されたほか、実施サポートとして 2 件のプロジェクトが実施された。

【第 1 期】

募集期間：2017 年 6 月 1 日（木）～6 月 29 日（木）

応募総数：8 件　（採択件数：4 件　／　実施サポート：2 件）

1. 三陸港まつり開催支援：「ペットボトル灯籠」の作成を通した地域住民の参加機会の創出	
実施期間	2017 年 7 月 21 日(金)～9 月 17 日(日) (現地での活動は 8 月 14 ～ 17 日)
実施場所	岩手県大船渡市三陸町越喜来地区及び都内
活動概要	岩手県大船渡市三陸町越喜来地区で毎年開催される“三陸港まつり”において､住民参加型イベント（交流会）として「ペットボトル灯籠」を作成し、おまつり会場に設置。
社会的効果	「みんなで参加する三陸港まつり」をアピールできた点は社会的効果があったと考えられる。三陸港まつり実行委員の方々には、地域コミュニティ強化につながる夏祭りのあり方の理解を得ることができた。また､『岩手日報』や『東海新報』といった地方紙のインタビューも受け､「みんなで参加する三陸港まつり」を広げることができた。ペットボトル灯篭の設置備品等は、三陸港まつり実行委員会が保管することになり、来年度以降「ペットボトル灯篭」の輪が広がることが期待できる。さらに、ペットボトル灯篭の材料を Youth for Ofunato（本活動団体名）や青学卒業生などの協力者から提供を受けた。震災復興によって生まれた縁を維持発展できたことも社会的効果といえよう。 三陸港まつりだけでなく、地域行事の開催にあわせて、ペットボトル灯篭のプロジェクトが実施できるかについても検討していきたい。
今後の展望	今回は、ペットボトル灯篭を地域住民の往来が多い道のり全てに設置できるように準備を進めた。そのため、交流会で作成したペットボトル灯篭だけでは足りず、学生が多数を作成せざるを得ない状況が発生した。地域住民の参加機会の提供という趣旨に立ち返って、ペットボトル灯篭の設置数や規模を慎重に検討する必要性を感じた。
実施者の感想	・地域住民との意見交換や目標設定も重要であるが、活動メンバー間のイメージや目標の共有も同様に重要であると感じた。 ・人口減少地域をつなぐ・守る手段として地域住民の参加機会を広げたい、という自分たちと同様の問題意識を持っている住民の方々がいることを知り、単なる労働力となることではなく、地域住民が一歩を踏み出す後押しをする活動なのだと実感した。

2. 体育会レスリング部　大島クリーンプロジェクト	
実施期間	2017 年 8 月 15 日（火）～ 8 月 16 日（水）
実施場所	東京都大島町
活動概要	2005 年より夏季合宿を実施している東京都大島町において、日頃の感謝を込め、環境美化、地域貢献を目的として活動。海岸清掃等を行い、島民との交流を深める。
社会的効果	普段とは違う場所で活動することや、学生が率先して地域の美化活動を行うことで、地域住民や観光客に対しても環境美化意識を醸成することができた。
今後の展望	ゴミの量が膨大であり、短期間での活動では成果が見えづらいことが課題であり、継続的な活動が必要である。 当初は、「ちびっこレスリング教室」を通して島民との交流も計画していたが、時期の都合上（お盆時期であり）実施できなかったため、事前の告知等も含めて検討課題としている。今後は参加者の規模を拡大しながら、継続して活動したい。
実施者の感想	・普段であれば、練習のみで終了してしまうところだが、このような制度ができたおかげで、プロジェクトを発案し、計画、実施することが出来、非常に有意義な合宿となった。 ・大島町役場の方と調整する中で、ボランティア活動を行うことの大変さやゴミ分別等の地域の細かなルールを知る機会となった。 ・この美化活動が自己満足で終わるのではなく、地域の方々からの感謝の声をいただいたことで、「やってよかった」という充実感とその必要性を改めて感じることが出来た。

3. Samaritans Place 支援プログラム	
実施期間	2017 年 8 月 22 日（火）～ 8 月 26 日（土）
実施場所	Philippines, Samaritans Place
活動概要	2016 年度 青山学院宗教センター主催フィリピン訪問プログラムへの参加をきっかけに、自主的に活動を企画。フィリピンにあるキリスト教信仰に基づいた孤児院 Samaritans Place（以下 SP）でスタッフのお手伝いや設備の補修作業、子供たちへの教育活動や遊び、文化交流を行った。
社会的効果	深い人的交流を図れたこと、SP の需要に応える活動ができたことは、SP に対して社会的効果をもたらせたと考える。 また、フィリピンにおいて深刻な問題の一つである「孤児」に関して、日本の大学生が取り組むという事実は、SP とその近隣地域の人々にも良い刺激を与えられただろう。日本に対するイメージの向上、あるいは日本文化を伝承したことで、日本への興味が深まったと言ってもらえたことは、とても嬉しかった出来事だ。 帰国後、現地活動を報告するのみならず、フィリピンにおける孤児に関する問題に関心を集める機会を持つことで更なる社会的効果を生み出せると期待している。
今後の展望	青山学院大学内の報告会を始めとした公の場を利用して、活動内容を報告、宣伝する。また、現地での活動はもとより、日本からの支援、物資の輸送、メール等で連絡を取り合うなど、SP との関係を継続していきたいと切望している。
実施者の感想	・ボランティア・プロジェクトの計画、実践、報告までを担当するのは初めての経験で、戸惑うことも多々あったが、それ以上のやりがいがあった。 ・自分たちで計画することで、先方の需要と、自分たちがしたいこととを合致させた活動を実施できた。 ・少人数であったことが利点となった。一人一人が当事者意識をもって活動でき、臨機応変な対応が可能となった。何よりも、一人一人が濃く深い「つながり」をもつことができた。

4. 韓国スタディツアー	
実施期間	2017 年 8 月 26 日（土）～ 8 月 30 日（水）
実施場所	韓国・釜山
活動概要	文化交流や日韓問題に関するディスカッションを通し、日本について学ぶ韓国人学生に日本のことを伝える、また、現地の人と会話を交わし、自分の目で日韓関係の現状を捉えることを目的としたスタディーツアーを企画。フィールドワークと新羅大学日本学部の学生らとの文化交流会を目玉企画として実施した。
社会的効果	現地大学生の感想を一部抜粋。 「今までいくつかの日本人団体と交流してきたが、今回が初めて日本文化に触れる機会があるもので、活動前よりワクワクしていた。日本のお祭り文化は、韓国で日本文化を学んでいても触れることができなかったもので、実際に日本を訪れ、本当のお祭りに行ってみたくなった。日本語をもっと学び、使える言語にして日本をより知りたい。このように思えた機会を与えてくれて、ありがとうございました。」
今後の展望	今回の交流会が今回のみのものとならず、互いの後輩たちに受け継ぐために、新羅大学との交流を絶やさないことが課題である。 今後、より多くの日本文化を現地学生に触れてもらうため、メンバー全員が日本についてさらに知識を深め、経験を積むことが、今後の交流会を展開していくうえで必要なことである。
実施者の感想	・メンバー全員も韓国人学生も、互いに言語の壁を感じながら過ごした交流会であったが、終始和やかなムードであった。 ・互いに簡単な単語や身振り手振りでコミュニケーションを図り、同世代同士だからこそ分かり合えることを楽しく共有できた。日本の祭りの再現は互いに楽しみながら、祭り文化を伝えられたと思う。 ・私たちの間で、感謝の気持ちを持ち合うことや“ともだち”という関係性でいられることがこんなにもうれしく、大切にしていきたいものであるのだと実感した。 ・今回の交流会を今回だけのものにするのでなくて、来年、また再来年という風に代々繋がる UNLIMITED（本活動団体名）と新羅大学でありたいと強く思っている。

＜＜実施サポート＞＞

1. 飯館村写真展とギャラリートーク	
実施期間	2017 年 12 月 8 日（金）～ 12 月 12 日（火）、ギャラリートーク：12 月 9 日（土）
実施場所	青山学院大学　青山キャンパス　6 号館 610 教室
活動概要	福島第一原発の事故のため、放射性物質に汚染され、全村避難を余儀なくされた福島県飯舘村の、事故以前の写真を中心に展示（管野千代子氏撮影）。管野氏のギャラリートークも実施。写真展、自らも被災者である管野氏のギャラリートークを通し、3.11 がまだ過去ではないこと、日本全体の問題であることに思い至るきっかけとなった。

2. 相模原キャンパス周辺地区での清掃活動＋α	
実施期間	2018 年 1 月 12 日（金）午前 8:00 ～ 8:45
実施場所	青山学院大学　相模原キャンパス周辺
活動概要	キャンパス周辺の清掃活動を計 9 名で行った。しかしながら、本学学生の長期休暇明け直後ということもあり、想定していたほどのゴミがなく、効果は限定的であったと思われる。また、＋αとして掲げていた『通学途中の本学生への交通マナーの遵守喚起』に関しては、時間帯が早朝だったこともあり、通学者数が少なく、効果は低かったが、今後も教職員でも参加できる活動として継続していく予定である。

【第 2 期】

募集期間：2017 年 10 月 2 日（月）～ 10 月 31 日（木）

応募総数：4 件　（採択件数：3 件）

1．大船渡地域活性化プロジェクト	
実施期間	2018 年 2 月 4 日（日）～ 2 月 7 日（水）
実施場所	岩手県大船渡市三陸町
活動概要	東日本大震災の被災地であり、少子高齢化、過疎化の問題に危機感を抱く岩手県大船渡市三陸町地域において、交流人口を増加させることを目指して活動を実施。地元の方の協力のもと、町の魅力を伝える観光リーフレットの作成に向けて、取材活動を行った。肌で感じ取った三陸町の魅力を、今後リーフレットに反映、配布する。
社会的効果	・「スローライフ」をテーマとしたリーフレットを作成し、学生を対象に配布する予定である。また、住民の方々は取材を通して、地方の過疎問題を私達若者に伝えることが可能である。 ・リーフレットをきっかけに観光客が増加することが期待される。 ・観光をきっかけに三陸町の魅力に触れ、何度も足を運ぶ人が増えることが期待される。 ・最終的には、人口減少・高齢化問題の解決へとつながることが期待される。
今後の展望	・「スローライフ」という言葉の定義と、リーフレットの掲載内容についてメンバー間でさらに考えをすり合わせる必要があると考えている。 ・今後の派遣では、多様な視点を持ち、コミュニケーションを上手く取りながら取材することで、「日常」を面白く切り取れるようにしたい。 ・住民のコメントの意図を正確に汲み取りリーフレットに反映させたい。
実施者の感想	・「田舎体験・スローライフ」のテーマの背景にある、人のあたたかさや自然の豊かさについて再確認することができた。 ・昨年に引き続き 4 度目の派遣であったが、最も地域での日常生活に近い日々を送れたと実感している。 ・リーフレットの完成イメージは参加者各々の頭の中には漠然とあったものの、「こうするためにどのような情報が必要か」をメンバー全員ですり合わせることなく取材に臨んでしまったため、準備の甘さや現場での情報収集力が課題として浮き彫りになった。 ・取材相手の深いところにある意見や情報を引き出すことの難しさを感じた。 ・課題点は多いが、やり甲斐を感じている。 ・何気なく過ごしている日常について尋ねることが難しいことだと感じた。 ・今回の活動を通じて多くの課題が浮き彫りになったが、大船渡の未来のために何ができるかを真剣に考え、私たちが大船渡の住民と一体となって取り組んでいるこのプロセスは大事にしたいと思う。 ・1 対 1 での会話だけでなく、チームのリーダーとして何かを説明したり話をまとめるために、人前で長く話す力を身に付けたいと思った。 ・自分が生まれ育った地がこんなに魅力的で興味深いところだと気づくことができたのは、東京で出会った素晴らしい仲間たちがいたからだと感じた。

2. 猪苗代応援スタディーツアー	
【実施期間】	2018 年 2 月 5 日（月）～ 6 日（火）
【実施場所】	福島県猪苗代町
【活動概要】	東日本大震災から 6 年半たった今も、福島第一原子力発電所の事故をきっかけに風評被害を受け、食物が以前のように売れないという猪苗代町。スタディーツアーで現状を知るとともに、SNS を利用した広報活動を通して大学生の視点から風評被害を考える姿を発信した。また、訪問先のニーズに対して HP の作成案やレストランの新メニューの提案を行うなど、風評被害改善への糸口を見つける活動を行った。
【社会的効果】	・SNS および福島民報の記事を通して、大学生の視点から風評被害について考える姿を多くの人に知ってもらった。 ・中学生との交流を通して、大学での学びについて考えるきっかけを与えることができた。 ・風評被害について理解のある教員育成の一環となった。 ・猪苗代町と青山学院大学との交流のきっかけを生み出すことができた。
【社会的効果】	参加者が 4 年生であるため、来年度への引継ぎ、活動の継続に課題が残る。教職課程を履修している学生たちを中心に次年度も継続できるような方法を模索したい。今後も、企画・提案したことの実現に向けて、結乃村農楽団や各団体と計画を詰めていきたいと考えている。
【実施者の感想】	・実際には完全な復興までまだ道半ばであることを痛感するとともに、状況を改善するために努力をする人々、猪苗代に誇りと愛情を持って生活をする人々の姿を間近で見ることができた。 ・他のどの地域よりも厳しい検査をして安全性を証明しているにも関わらず、風評被害で出荷できない農作物があること、観光客が減少していることを聞き、私たちがどのように行動していくべきかを考えるきっかけになった。 ・中学生との交流やそば打ち体験によって猪苗代の魅力を存分に感じることができ、まさに百聞は一見に如かずだと感じた。 ・猪苗代町立猪苗代中学校の校長先生の講話において、「本当に復興するために必要なことは人づくりである」という言葉があり、本スタディーツアーの参加学生の多くが、この言葉を重く受け止めた。 ・福島、風評被害についてしっかりとした理解、認識を持った教育者としてこれから人づくりに邁進していきたいと感じることができた。

3. Table For Two 寄付金付きドライフルーツ販売	
【実施期間】	2017 年 11 月～ 2018 年 1 月（販売期間は 1 月 24 日、26 日、30 日）
【実施場所】	青山学院大学　1 号館購買会前ロビー
【活動概要】	雹（ひょう）被害で出荷できなくなった福島県産リンゴを使用して作られたドライフルーツを販売。代金の一部は NPO 法人 TABLE FOR TWO を通じて発展途上国の子供たちの給食として届けられ、残りの売上げ金は福島子ども食堂ネットワークへ寄付された。本学学生や教職員に対し、福島県の復興に寄与する取り組みや国際協力への参加機会を提供した。
【社会的効果】	本学の学生及び教職員に向けて、福島県の復興に寄与する取り組みや国際協力に参加する機会を提供した。また、福島の産品を味わってもらうことで、商品を購入した方々に福島の誇れる文化を伝えた。
【今後の展望】	福島県への継続的な支援を実現させるためには、本商品を購入できる場所を学内に常設することが必要だと考えている。今後、学内のコンビニエンスト及びなな café にて導入を検討して頂くよう、交渉を継続する予定である。
【実施者の感想】	・予想もしなかったトラブルの連続で慌ただしく動き回る日もあったが、無事に終えることができ安心している。 ・売れ行きは好調で、販売予定日を 1 日残しての完売となり、とても嬉しかった。 ・企画から実施まで携わったことで、プロジェクトを実施するまでには多くの方々との連携や準備が必要不可欠であることを学んだ。 ・福島県のりんごを使用したドライフルーツの販売に際し、福島県の現状を知るために福島訪問ツアーに参加した。多くの学びと多くの出会いがあり、復興支援への関わり方について考える良いきっかけとなった。

4. 学生ボランティアプログラム

4. 学生ボランティアプログラム

4.1 Rootе について

青山学院大学ボランティアセンターの設立に伴い、前身であるボランティア・ステーションからの組織改変を行い、2017 年度から名称を”Rootе”と改称した。

Rootе のビジョン

社会問題に対して自ら行動できる青学生を増やし、すべての人々が協力し合い助け合える社会を目指します。

Rootе のミッション

社会問題に関心がある青学生と、ニーズを抱える社会をつなぎ、一人ひとりの思いを行動に変えます。

組織について

プロジェクト運営を担う東北部、地域連携部、国際協力部、災害支援部と業務運営を担う総務管理課、広報宣伝課、企画渉外課によって構成されています。

Rootе のあゆみ

2011 年

3月　　東日本大震災

5月	青山学院大学ボランティア・ステーション
7-9月	石巻市ことぶき町商店街通り街路復興支援 (のべ125名の学生・教職員が、商店街のブロック街路（125m）を完全復旧) 多賀城市留守宅児童学級支援 気仙沼市階上中学校教育支援 大船渡市長洞仮設住宅コミュニティ支援
11月	陸前高田写真洗浄ボランティア（-12月）

2012年

1月	石巻スタディツアー
3月	陸前高田写真洗浄救済ボランティア
6月	山元町写真洗浄救済ボランティア
8-9月	石巻スタディツアー 塩竈　教育・浦戸諸島復興支援 陸前高田　写真救済・福祉・教育支援 気仙沼仮設住宅コミュニティ支援 フィリピン異文化交流 青山学院大学同窓祭（東北物産販売）

2013年

4月	キッズウィークエンド（福島子ども保養ツアー）参加
7月	渋谷区清掃ボランティア
8-9月	塩竈　教育・浦戸諸島復興支援 多賀城市立図書館復興支援 フィリピン異文化交流 青山学院大学同窓祭
11月	フィリピン台風災害支援募金活動 浦戸諸島かつらしまかき祭参加 伊豆諸島（台風26号）復旧ボランティア
12月	ネパール支援ボランティア

2014年

1月	塩竈ウィンタースクール
2月	ネパール支援ボランティア フィリピン台風支援募金箱設置

4 月	渋谷区清掃ボランティア 多賀城市立図書館への児童書寄贈（-9 月）
5 月	気仙沼ワークショップ
8-9 月	塩竈　サマースクール・保育・浦戸諸島復興支援・WEB,PR 動画活動 陸前高田　陸前高田思い出の品・教育支援・福祉支援・スタディツアー 伊豆大島　海岸清掃活動・「元町じまん」マップ作成・スタディツアー フィリピン異文化交流 青山学院大学同窓祭
10 月	シティプロモーションサミット

2015 年

2 月	ネパール　衛生教育・クリーンアップキャンペーン 陸前高田　教育・地域支援
3 月	塩竈　　学童保育
5 月	ネパール地震救援募金（-6 月）
6 月	ボランティアフォーラム開催
8 月	塩竈　保育・学童・サマースクール・けやき教室・防災ディスカッション 農業・漁業・PR 動画 陸前高田　教育・地域・福祉支援・スタディツアー
9 月	インドネシア　幼稚園・小学校訪問・衛生教育 フィリピン　異文化交流・教育支援 青山学院大学同窓祭
10 月	M4R（Meal for Refugees）の実施
11 月	かき祭り参加
12 月	渋谷区清掃

2016 年

2 月	ネパール　クリーンアップキャンペーン・NGO 訪問
3 月	陸前高田　地域支援・福祉支援 塩竈　学童保育
4 月	AGU くまもと応援募金（-5 月） ボランティアフォーラム開催
6 月	渋谷区清掃実施

7月　AGU くまもと応援募金報告会

8-9月　塩竈　学童・けやき教室・サマースクール・農業・漁業
陸前高田　教育・地域・お祭り・福祉支援・スタディツアー
熊本　復旧支援・コミュニティ支援
インドネシア　日本語・手洗い・たばこ・防災教育
フィリピン　異文化交流・教育支援
青山学院大学同窓祭（東北・熊本物産販売）

10月　渋谷区清掃実施

11月　M4R 実施
渋谷区清掃実施

12月　渋谷区清掃実施

2017年

1月　メディア交流会　参加

2月　ネパール　クリーンアップキャンペーン・衛生教育

3月　塩竈　学童保育・けやき教室
陸前高田　地域支援・福祉支援・スタディツアー講演会ワークショップ
熊本　農業支援・復旧支援

4月　青学くまもとウィーク実施
（写真展・シンポジウムの開催、学食にて熊本県産ヒノデ米を使用したメニューの販売、instagram キャンペーンなど）

8-9月　塩竈　学童保育・けやき教室、コラソン・浦戸諸島支援・サマースクール・PR 動画・商店調査
陸前高田　コミュニティ活性支援・スタディツアー・教育支援・地域支援・福祉支援
熊本　農業支援・教育支援
インドネシア　防災・衛生教育
食品ロスプロジェクト
青山学院大学同窓祭

10月　M4R・チャリボンプロジェクト（難民支援のための古本回収）

2018年

2月　ネパール　清掃活動・衛生教育
フィリピン　異文化交流・炊き出しボランティア・衛生教育

3月　塩竈　学童保育・けやき教室、コラソン
陸前高田　コミュニティ活性支援・地域支援・福祉支援
熊本　農業支援

※えびす青年教室・GAYA での活動は記載していませんが、8月以外毎月行っています。

学童保育プロジェクト

【活動背景・目的】

東日本大震災を経て共働きの家庭が増加し、塩竈市でも市内の児童クラブへと入る子どもたちが急激した。市内 6 カ所に開設されている児童クラブでは、下校後に保護者が家庭にいない児童の受け入れや生活の援助を行っている。Roote（当時の旧称：青山学院大学ボランティア・ステーション）では、2015 年からこの児童クラブにて学童保育の活動を行ってきた。

児童クラブでは児童数の増加に伴って指導員の方々の人手不足が震災以前にも増して叫ばれている。クラブによっては 60 名の児童をわずか 3 名で対応しているところもあるが、学童保育で 1 名の指導員が見る子供は 10 名が限度と言われている。そこに私たち学生が入ることで指導員さんの負担を軽減するとともに、子どもたちのふれあいの時間を大切にできるよう学生一人一人が目標を持って取り組んだ。2018 年の春期活動からは藤倉児童館が活動場所に加わった。

＜ 2017 年春期活動＞

【活動場所】宮城県塩竈市立第二、第三、玉川、月見ヶ丘、杉の入小学校

【活動期間】2017 年 3 月 1 日（水）～ 3 日（金）

【参加人数】10 名

【活動内容】

活動中は主に子どもたちの勉強を見ることや、休み時間の遊び相手となった。子どもたちは好奇心旺盛で、青学生が来ることに非常に興味を示してくれ、指導員さんが言うには普段は見せないような笑顔をも見せてくれていたようだ。今回はひな祭りの時期ということでひな人形を折り紙で作る工作イベントを実施した。どの学校でも大変好評でほとんどの子どもが参加してくれた。また、幣団体内で集めた 42 冊の絵本を市内児童館へ寄贈した。早速手にして読んでいる子どもたちも多く、長い時間をクラブで過ごす子どもたちにとって新たな本との出会いとなれば幸いだ。

【スタッフの所感】

・平日の放課後に大学生が学童保育に行くことで、新鮮な雰囲気が感じられた。放課後という短い時間であったが、普段の子どもたちの様子を知るとともに指導員の方の普段のお仕事の様子を知ることができ、自分たちの活動を考える上で今後に繋がる経験となった。ひな人形を製作するイベントでは、台紙を階段のように折ったり、冠などの装飾品を作ったり創作意欲溢れる子どもたちに圧倒された。

・自分が学童に行くのは夏の活動以来で約半年ぶりであったが、子どもたちが自分のことを覚えていてくれた。毎日通うことはできないが、こうして何度か足を運ぶこと、継続した活動をすることで子どもたちの大切な記憶の中に私たちの存在が刻まれていくのだと実感した。

【参加学生所感】

「前回参加した時と同じ小学校に行った。子どもたちが自分のことや以前来たが今回は来ていない人のことまでも覚えていることがわかり嬉しかった。そうした反応を通し、子どもたちの中に何かを残すことができたのだと感じた。また、前回よりも子どもたちが心を開くまでの時間が早かったように感じる。学童では職員の方が子供たちに「おかえり」と声をかけていて、子供たちにとっての居場所なのだと強く実感するのと同時に、春から異動する方もいるようなので変化する環境の中で私たちがまたボランティアとして訪れることは何らかの意味があるのではないかと思った。」（教育学科・4年）

【今後の展望】

今回は放課後のみの活動で期間が三日間であったこともあり、短いスパンでの活動であった。今後は時期なども調整しながら、春も夏同様子どもたちとより深く関われる活動をしたい。今までは学生スタッフが企画したイベントを参加した青学生と共に実施という形で行ってきたが、参加した学生からはイベントの企画発案から関わりたいとの声も挙げられた。次年度の春のプロジェクトではこうした意見も取り入れながら活動が出来たらと思う。「震災復興支援」として始まった活動であるが、今後は「地域活性支援」としての活動を行っていきたい。その上で、未来の塩竈に何か残せる活動、子どもたちに重点を置いた活動にこれからも力を入れ、信頼や安心を感じられる関係を築きながら継続した活動を行っていきたい。

＜2017年夏期活動＞

【活動場所】宮城県塩竈市立第一、第二、第三、玉川、月見ヶ丘、杉の入小学校

【活動期間】2017年8月7日（月）～10日（木）

【参加人数】16名（8、9日:20名）

【活動内容】

具体的活動内容としては、主に学童保育所である仲良しクラブ室内や校庭で子どもたちと一緒に遊び、交流をした。交流の他にも勉強の手助けを行い、昼寝の時間には指導員の方たちと一緒に子どもたちを寝かしつけた。夏休みの日常に変化を与え、より楽しく思い出に残る時間を子どもたちに過ごしてもらうことを目指し、私たち学生が企画した工作イベントも実施した。今回はリンググライダーというおもちゃを作り、手作りしたおもちゃを使用して的当てゲームを行った。

【スタッフの所感】

・活動も５回目となり、改めて「なぜ私たちが仲良しクラブに来て活動を行うのか」という意義を考え直す必要があると感じた。私たちが訪れることによって子どもたちに良い変化を与えられるのか、指導員の方の負担を減らすことができているのかを考えさせられた。

・反省を繰り返しながらも、最終日に向かうにつれて初めはあまり話すことのなかった子が自ら話しかけてくれるなどの変化が見られた。子どもたちや指導員の方から感謝の言葉を頂き、活動をしてよかったと感じることができた。

・イベントでは、各クラブの雰囲気に合わせたやり方で子どもたちの楽しむ姿を見ることができた。同時に、イベントにおいても実施する意味を私たち自身がしっかりと理解することが大事である。目的意識を持って行うことでより充実したイベントが企画できると感じた。

【参加学生所感】

「昨年に続いての参加で、子どもたちの中に自分のことを覚えていてくれた子がいて嬉しかった。一緒に遊ぶ中で、私たちが普段気づかないようなことにも目を向ける子どもたちの視点に勉強させられることが数多くあった。子どもたちとの距離も最初から近く、継続して活動に参加することの意義を感じられた。しかし、以前と変わったこともあり、（指導員の方の異動、子どもが活発に変化など）環境に合わせて私たちも対応の仕方を変える必要があると感じた。子どもたちからのメッセージには、時間をかけて深く触れ合ったことに関して書かれていることが多く、心に残ったのだと感じた。また、私たちがボランティアに来ることで人員増加を狙っているのであれば、普段できないような手厚い関わりをすることも大切だと感じた。」

【今後の展望】

私たち大学生が塩竈市の学童保育で活動する目的を、スタッフ、参加者、そして指導員の方々との間できちんと共有する必要がある。これらの共有により、活動がより意味のあるものになるであろう。また、活動を続けることの大切さも感じている。継続することによって子どもたちや指導員の方と信頼関係を築くことができ、活動がより充実したものになる。常に活動を続ける意味を理解し、また私たちの役割を考えながら目的意識を持って活動に取り組んでいきたい。

＜2018 年春期活動＞

【活動場所】宮城県塩竈市内の仲よしクラブ（第一、第二、第三、玉川、月見ヶ丘、杉の入）、藤倉児童館

【活動期間】2018 年 2 月 19 日（月）～ 2 月 22 日（木）

【参加人数】18 名

【活動内容】

塩竈市内の６つの学童保育と藤倉児童館にて、子どもたちが下校する 14 時 30 分頃から宿題の補助、レゴや折り紙といった室内遊び、ドッジボールや鬼ごっこ、大縄などの屋外遊びを一緒に行った。また、2017 年度夏期のプロジェクト実施の際に学童の子どもたちが指導員の方々の話を聞かない、静かにしなければならない場面で静かにできないなど、集団で生活する上でのルールを守れていない様子が見受けられた。そこで私たちが子どもたちのお手本となり、集団の中で指揮を執る人の話をしっかり聞く、集団での遊びの中でルールを守って楽しく遊ぶなどの集団意識の重要性を知ってもらうことを目指した。加えて、この目標を達成する手助けをするようなイベントを実施した。活動日の午前中にミーティングを開き、スタッフと参加者で意見を交わしつつ、集団意識の重要性に気づいてもらえるようなイベントを考えた。このイベントは、以前はスタッフだけで内容を考えていたが、これまでの参加者の中でイベントの内容を考えてみたいという意見もあったため、今回このような形式を取り入れた。

【スタッフ所感】

当初イベントは全ての学童で同じ内容を実施する予定でいた。しかし活動初日に指導員の方々にヒヤリングをしたところ、各学童で求められているものが異なることがわかった。それを踏まえ各学童の想いに合致したイベント企画をスタッフと参加者で協力して考えることができ、また実施することができた。加えて、イベント以外でも子どもたちと触れ合い、信頼関係を築き、だれもが別れがたい気持ちが芽生えるほどの充実感を味わった。しかし、４日間という短い時間では集団意識の大切さを完全に理解してもらうことは難しかった。私たちがいるという特別な状況に子供たちの気分がいつもより高揚してしまい、逆に集団での行動を妨げてしまったことも否めない。どうしたら子どもたちと楽しみつつ指導もできる振る舞いができるのか、これまでの活動で培ってきた様々な知識をスタッフと参加者間で共有していくことが大切だと感じた。

【参加者所感】

・塩竈の子供たちは非常に元気で素直な子が多く、子供好きな私は毎回学童を訪問するのが楽しみ

で仕方なかった。子供たちの集団意識を向上させることが目標だったが、アンケートによると学童の先生方も集団意識を向上させることは難しいということだったので、私たちにとっても少し目標が難しかったと思った。私たち大学生にしかできないような目標を設定するべきではないか。また、学童の先生方はなぜ私たちが塩竈に来て学童を訪問しているかあまりわかっていらっしゃらなかったようなので、先生方に活動の主旨を明確に伝える必要があると感じた。（文学部フランス文学科１年）

・子供たちの笑顔に毎日触れ合えて自分が元気づけられた。また、イベントをやった時に予想外なことも起こり、それを予想することが大事だと感じた。（法学部法学科）

・子供たちはみんな元気で、外遊びが大好きだった。集団意識という言葉を自分がどこか履き違えていて、個人で遊びたい子供を集団で遊ぶように無理強いしてしまい、その子に対して申し訳ないことをしてしまった。子供たちへのちょっとした言動により、とても喜んでくれたり、反対に悲しませてしまったりともう少し気をつけるべきだと思った。（経済学部経済学科２年）

【今後の展望】

子どもたちが平常授業の期間に私たちが訪れることで、夏とは違う特別感が生まれているのではないか。加えて今後も各学童の特徴に合わせたイベントを行っていきたい。また指導員の方に「もっと学童に訪れてほしい」という言葉をいただいた。私たちも学生である以上、活動期間はどうしても限られてくるが、活動期間を見直したり活動の質を上げたりと、より充実したプロジェクトになるように考えていきたい。

けやき教室＆コラソン　プロジェクト

【活動目的・背景】

宮城県は全国的に不登校の児童・生徒の割合が高い。特に平成 26 年度の学校基本調査では中学生 65,309 人に対し、不登校生徒が 2,109 人で不登校出現率が 3.37 という数字がでている。これは全国で 2 位の順位である。中でも塩竈市は、平成 25 年度の調査で小学生が 31 人で出現率 1.21%、中学生が 80 人で 5.54% と共に高い数字となっており、宮城県下 1 位である。そういった状況を鑑み、市では新たなサポート体制をつくり、不登校支援に取り組んでいる。

活動場所であるけやき教室、コラソンとは、様々な事情で小学校や中学校に通えなくなってしまった子どもたちが通う教室で、子どもたちに安心できる居場所を提供し、また学習指導や体験活動を行うことで学校に復帰できるよう支援している。子どもたちとも年齢が近く、普段はあまり関わることの少ない大学生が入ることで、いつもとは異なる環境や新たな刺激が得られる場を提供し、けやき教室、コラソンに通おうという意欲につなげることを目的とする。

＜ 2017 年春期活動＞

【活動場所】塩竈市適応指導教室けやき教室

【活動期間】2017 年 3 月 1 日（水）～ 3 月 3 日（金）

【参加人数】3 名

【活動内容】

活動はトランプ等のゲームや勉強を教える、お話することでコミュニケーションをとることに重点を置いた。1 日目は子供たちが驚いて帰ってしまう子がいたなど距離を縮めることは難しかった。しかし 2 日目にはステンドグラス作りのイベントを通して少し距離を縮めることができたように思う。人数は夏よりも多く、やはり長期休暇中ではないことが関係していると思われる。

【スタッフ所感】

今回の活動中、特に嬉しいことがあった。それは、将来の仕事について一緒に話をした生徒から、活動終了後の教室を出る際に、機会があればまた話をしたいという電話をもらったことだ。話をしたのは短い時間であったが、心を開きお互いに少し歩み寄ることができた証拠のように感じられてとても嬉しかった。今までは、子どもたちに対して自分たちのことを知ってもらう機会をあまりつくっていなかったが、この経験から、距離を縮めるためにはまずは私たち自身のことを伝えることが必要なのではないかと感じた。また今回のように、子どもたちと比較的年齢の近い私たち大学生だからこそ、近い視点に立って話ができるという強みがあることを実感できた。今回は先生方の提案で、学校生活等について私たちが自分の経験を話したり、子どもたちから質問をしてもらったりする時間を設けたが、ぜひ今後もこのような機会をつくりたいと感じた。

【参加者所感】

・私自身も初めてけやき教室へ赴いたが閉鎖的な環境であることを感じた。そこへ私たち大学生が入ることで子どもが新たな発見や経験をしてくれるのではないだろうか。

・コミュニケーションを取りながらトランプ等で一緒に遊び、段々と距離を縮めることができた。遊びを通して少しでも外へ興味を持ってくれれば良いと思う。

【今後の展望】

３日間という短い時間であったが、夏に繋がる有意義な活動となった。特にけやき教室で春に活動を行うのは今回が初めてであったが、学校が夏休みに入ってしまう夏の活動時に比べて、やはり春の方が教室に来る子どもたちが多い印象だった。したがって、需要が高い春の時期に活動を行うことを視野に入れ、今後の活動時期を見直していきたいと思った。

＜ 2017 年夏期活動＞

【活動場所】塩竈市適応指導教室「けやき教室」塩竈市学びの支援センター「コラソン」

【活動期間】2017 年 8 月 7 日（月）～ 10 日（木）

【参加人数】4 名

【活動内容】

今期は学校が夏休み中であることや悪天候などの条件が重なり、子どもたちが学校に来ないという状況があった。そのため 1 ～ 3 日目は教室の環境整備を行ったり、学童保育の活動に参加したりした。しかし、最終日にはコラソンの生徒 2 名と先生方と社会福祉施設の窓拭きをお手伝いし、昼食を一緒に作ることができた。午後には企画していたイベントを行うことができ、最終的には会話を通して子

どもたちと打ち解け、笑顔を見ることができた。また、先生方から現状を聞くことができ、新たな課題や問題の発見に繋がった。

【スタッフの所感】

なかなか子どもたちが来ないという状況で活動が難しかったが、最終日には実りのある時間が過ごせた。最初はどのように接していいかわからず戸惑い、子どもたちにもその不安が伝わってしまったように思う。しかし積極的に話しかけてみると子どもたちも徐々に話してくれるようになり、自分の想いも言ってくれるようになった。イベントとして用意したスライム作りにも興味を示してくれたことにも喜びを感じた。なかなかコミュニケーションをうまく取ることのできない子どもたちが、この一日を通して心を開いてくれたようで心から嬉しく思い、この活動の意味というものを実際に体感することができた。また、先生方のお話から子どもたちや教室の現状や厳しい現実を知ることができた。６年たった今だからこそ見えてくる心の問題に対して私たちに何ができるか考え、ニーズに応えられるような活動をしていきたいと改めて思った。私たちの活動が子どもたちの記憶に残り、少しでも社会復帰への後押しとなっていることを望んでいる。そしてなにより自分にとって視野を広げる良い機会となった。

【参加学生所感】

４日間の内、私たちが本格的に活動できたのは最後の１日のみであった。しかし、けやき教室の先生方やコラソンの先生からお話を伺い、コラソンに通う子供たちと実際にコミュニケーションを取ることで子供たちが抱える心の傷を感じ取ることが出来た。今回のけやき教室＆コラソンの活動を通して“心の復興”について考えさせられた。東日本大震災から６年が経ち、道路や住宅など目に見える復興は凡そ終わっていると言えるだろう。しかし、多くの子どもたちは未だ心に大きな傷を抱えている。心を閉ざしてしまった子、未だ海を見ることができない子、心の復興は終わっていないということを肌で感じた１週間だった。今回触れ合った子供達が数年後、少しでも私達のことを思い出し、何かのきっかけになってくれたなら嬉しく思う。また、短い時間の中でも子供たちの心情の変化を見ることが出来たことは非常に大きな収穫になったのではないかと考える。子供たちの心に寄り添い、少しでも新しい刺激を与えるためには何をすべきか考える大変良い機会であった。

【今後の展望】

夏休みの期間と重なることで活動が難しい状況になるため、活動時期を改めて考え直す必要性があると感じた。今年の教室に通う子どもたちは、室内のイベントに向いている人が多かったため、その時に通っている子どもたちの性格などを聞いた上でイベントを企画していくと良いと思われる。また、今回の最終日の活動の企画はコラソンの先生によるものだったため、子どもたちが自ら参加したくなるような企画を自分たちで考えたい。

＜ 2018 年春期活動＞

【活動場所】塩竈市適応指導教室けやき教室、塩竈市学びの支援センター「コラソン」

【活動期間】2018 年 2 月 19 日（月）～ 2 月 22 日（木）

【参加人数】4 名

【活動目的・背景】

宮城県は小・中学校の不登校の児童生徒の割合が高く、震災以降更に増加傾向にある。中でも塩竈市は、県内でも不登校の児童生徒の割合が高い。けやき教室、コラソンとは、小学校や中学校に通えなくなってしまった子どもたちが通う教室で、子どもたちに安心できる居場所を提供し、学習指導や体験活動を行うことで学校に復帰できるよう支援している。春は子どもたちが比較的に教室に来ることが多いため、夏の活動と比べると沢山の子どもと接することができた。夏の活動で行った工作が子どもたちに喜んでもらえたため、引き続き工作のイベントを企画した。子どもたちが教室に来るのは不定期で、今まで毎日来ていた子どもが急に来なくなったり、全然来なかった子どもが突然通い始めたりするそうだ。そのため、今回は活動の目的を教室に来た子どもが継続的に教室に通うことができるようにすることに設定した。我々が活動する 4 日間のうちに 2 日以上同じ子どもが来てくれることを目標とした結果、ほとんどの子どもが 2 日以上教室に足を運んでくれた。

【スタッフ所感】

初めはうまく話すことができなかった子どもたちが、最終的には積極的に話しかけてくれるようになり、４日間という短い時間の中でも成果があることがわかった。「青山学院大学に行きたいから学校に行って勉強したい」と言ってくれる子どもがいたり、今まで体操の時間に参加したことのなかった子どもが初めて参加したりと、刺激が与えられたのではないかと思い、心から嬉しく感じた。しかし、コミュニケーションが苦手な子どもに対しての接し方がわからず、戸惑ってしまう場面もあった。学校に通えなくなってしまった理由も人それぞれで、一人一人に合った関わり方を考える必要がある。

外で遊ぶのが苦手な子どもが多いという理由から室内でできる工作をイベントとして考えたが、ほとんどの子どもが参加してくれて良い反応を見ることができた。その反面、それ以外の遊びをあまり考えていなかったため、みんなで遊べる遊びをいくつか考えてから活動に取り組むべきであった。

【参加者所感】

様々な事情によって学校へ通えなくなってしまった子どもたちの支援を目的とした活動をして、良い影響を与えられたのではないかと思う。子どもたちにとって年齢が近い私たち大学生は親しみやすかったと思う。子どもたちの不登校の原因は多種多様で、一朝一夕ですぐ解決出来るようなケースは少ないようだ。そのため、すぐに学校復帰を促すのではなく、長期的な視野を持って子供のサポートをしていく必要がある。既に週に１回は学校へ通うことができている子供もいると聞いているため、そこからさらに前進出来るように背中を押してあげたいと思った。活動に参加して一番強く心に感じたのは「友達になる」という支援の大切さである。ボランティアというと、相手のために何かをしてあげたい、支援することで何かを変えたいという思いが先にきてしまう。しかし、教室の子どもたちとの触れ合いの中で、自分たちが多くのものを与えられ、大きく変えられた。活動した４日間を通して沢山の想いを分かち合い成長し合うことができたように感じる。「ために」ではなく「ともに」の大切さに気が付いた素敵な４日間となった。

【今後の展望】

私たちと接する中で学校に通いたいと言ってくれた子どもがいたため、今後も活動を行っていきたいと考える。しかし、夏は子どもが教室にあまり来ないことが予想されるため、春の活動のみとする。人と関わることが得意な子どももいれば苦手な子どももいるため、平等に接するほか、それぞれの子どもたちに合った接し方を考えて行動する必要がある。指導員の先生に助けられる場面が多かったため、事前の準備をしっかりして、自分たちで動けるようにするべきである。

サマースクール

【活動背景・目的】

宮城県は子どもたちに対する学力調査等において全国的に見て低い位置にあったが、震災以後家計の圧迫やストレスの影響で学習環境がさらに悪化した。このサマースクールでは午前中に本学生が学習の補助を行うことによって生徒たちの学習意欲の向上を目指すことを目的としている。また、先生方よりも年齢が近い大学生とコミュニケーションをとることによって、大学のない地域に暮らす子どもたちに大学とは、東京とはどのようなものかを伝えることができる。未来に向かって学習する子どもたちの視野を広げ、好奇心を刺激することで自分の将来を見据えるきっかけになることを望む。

【活動場所】宮城県塩竈市立第一中学校
【活動期間】2017 年 8 月 17 日（月）、18 日（火）
【参加人数】7 名

【活動内容】

活動内容としては、午前中は生徒たちが各自持ち込んだ夏休みの宿題や学習塾のテキストの問いに対する疑問点に答え、その導き方を一緒に考えていくものだ。先生よりも年齢の近い大学生という立場を生かし自分の経験を含めながら教えることで、より生徒たちにあった学習方法のアドバイスをする。午後からは部活動に参加し、体を動かしながら積極的に交流し距離を縮めることができた。

【スタッフの所感】

・このサマースクールを実施するにあたって昨年の活動を振り返り、この短期間に生徒たちにどれほどのものを残すことができるかを重視した。学習指導をメインとした活動ではあるが、自分の経験をもとにした学生生活におけるアドバイスや進路に関することも伝えられるよう心がけた。
・初日は「学習することに意欲がわかない生徒たちにどのようにアプローチすれば良いか。」「未経験の部活動にどういう形で参加したら良いか」といった参加学生からの声が上がり、ミーティングで工夫すべき点について話しあった。その結果、一年生のクラスでスタッフによる自身の上京の経験や学生時代のことについて話す機会を作るなど、初日の反省を生かした活動ができた。
・中学校の先生方は私たちを温かく迎えてくださり、様々な面で協力してくださったため活動がスムーズに行えた。しかし二日間という短い期間で全ての生徒たちと平等に親しい関係を築くことは難しいと感じた。

【参加学生所感】

「私は自分と異なる年代の人と関わってみたいという理由でこのサマースクールへの参加を希望した。この活動を通して一番強く感じたことは、生徒一人ひとりに個性があることだ。二日間で全員と言葉を交わすことができ、どの生徒も大学生と交流したい気持ちは持っているが、積極的に話しかけてくれる子と、そうでない子がいることがわかった。初めはどのように対応を変えて接すれば良いかわからなかったが、クラス全体の雰囲気が良かったため楽しく過ごすことができた。」

「部活動でバドミントン部に参加した。初日は真剣に練習をしている生徒に話しかけるタイミング

が難しく、気を遣う場面も多かった。しかし次の日は反省を生かして休憩時間を効率的に使い、生徒だけでなく顧問の先生ともお話ができた。活動全体を通して、生徒たちの素直で一生懸命な姿を見て私自身も良い刺激を受け、充実した二日間だった。」

【今後の展望】

活動する中で、私たちの存在が生徒たちにとってプラスに働くことを望む先生方の気持ちを強く感じ、今後も活動を続けていく意義は十分にあると感じた。しかし、前日の反省を生かし次の日につなげるというプロセスを踏みながらの活動を、二日間という短い期間に実行するのは難しいと感じたため、来年度は活動期間を延ばすことも視野に入れたい。

浦戸諸島プロジェクト

【活動背景・目的】

浦戸諸島は震災以前から若者の島外流失が問題となっていた。島の主産業である漁業や農業の後継者不足や、お祭りなどの伝統文化の担い手を本土のボランティアに頼っているなどの問題が発生した中で震災が起こり、その問題がさらに顕著に現れるようになった。島のご高齢の方々が行うには体力的に大変な作業を、体力がある私たち大学生が代わりに行うことで、島の生活環境の向上と人手不足の一時的な解消を目指した。

【活動場所】桂島海水浴場　海の家「かもめん家」「たからや」、野々島フラワーアイランド、牡蠣作業場
【活動期間】2017 年 8 月 11 日（金）、15 日（火）～ 18 日（金）
【参加人数】1 陣 22 名、2 陣 23 名

【活動内容】

活動内容は 3 つに分かれる。1 つ目は草刈りである。野々島に住むご高齢の方のお宅、寒風沢島の軍艦碑や船の待合所周辺、加えて NPO 法人 High-Five の方が管理する野々島フラワーアイランドで草刈りを行った。2 つ目は漁業支援である。野々島にある牡蠣作業場において、不要になった牡蠣の殻を袋詰めした。3 つ目は海の家の手伝いである。この活動は今年度初めての活動である。従業員の方とコミュニケーションをとりながら、海の家の運営に携わることができた。全ての活動を通して、現地の方とたくさんコミュニケーションをとることができ、東京では聞けないようなお話をしていただいて大変勉強になった。

【スタッフの所感】

・天候に恵まれず例年のような活動はなかなかできなかった。そのため、参加者の方にとっては思ったような活動ができず不完全燃焼で終わってしまったのではないかと不安があった。しかし、なんとか天候が安定している間にできる限りの活動を行うことができた。参加者の方からも達成感があり充実した活動だったという声をいただき、プロジェクトとしては成功だったのではないかと感じる。それと同時に、天候が悪いときの代替案を考えておくべきだったと反省している。

・浦戸諸島プロジェクト２年目だからこそわかる部分がたくさんあることを実感した。昨年と景色が変わっていたり、ボランティアを取り巻く状況が変化していたり、そういったことに気付けるのは継続して活動ができたからである。２年目だからこそ築けた信頼関係を大切にし、今後も良い関係を保ち続けていけるように努力していきたい。

【参加学生所感】

・雨だったこともあり、お客さんが少なく接客業務をすることができなかったことが残念だったが、お店の方から頼まれた草刈りなどをしっかりやり遂げられた。今年度この活動を行ったことで桂島のビーチの課題がわかったので、来年度以降につなげていきたい。（海の家）

・普段の生活では知ることができない農家の方の大変さを知ることができた。活動の合間に聞かせていただいた貴重なお話、島の方々とのコミュニケーションも大切な時間の使い方であると感じた。（農業）

・現地では人手不足、若い力の不足が顕著である。その中でいつもは一日１つくらいしか作ることができない畝を３つ、４つ作ることができた。手直しなどの二度手間をかけてしまうかもしれないが、作業の土台を作ることができ役に立てたのではないかと感じる（農業）

・浦戸諸島プロジェクトのメンバーで協力して活動できたことが楽しかった。牡蠣の貝殻を袋詰めする活動は、成果が視覚的にわかるので達成感があった。（漁業）

【今後の展望】

現在の浦戸諸島プロジェクトは島の方の要望に応えるだけの活動になることが多い。もちろん、ニーズに応えることは大切である。しかし、ただ活動しただけで終わるのではなく、島がよりよくなるためのプラスアルファの提案をできたら良いと考える。

また、浦戸諸島プロジェクトは島の方と関わる機会が多いプロジェクトである。今まで築き上げてきた島の方との信頼関係を大切にしながら、さらに交流の機会を増やしていきたい。

商店調査プロジェクト

【活動背景・目的】

前年度までの経済復興支援から塩竈市のさらなる活性化を目指して今年度から始まった新しい活動である。塩竈市が実施している市内の空き店舗で事業を始める方を支援する

【活動場所】塩竈市内
【活動期間】2017 年 8 月 15 日 (火) 16 日 (水)
【参加人数】6 名

【活動内容】

「塩竈市シャッターオープン･プラス事業」を利用している「ジェラテリア フルーツラボラトリー」さん、「CHAIR BANK」さん、「有限会社　今野商店」さんの３店舗で実際にお話を伺った。調査項目は、①店舗立地、②店舗状況、③事業実績、④塩竈市に補助金制度がなくても創業したくなるような街であるか、⑤現在お店で課題となっていること、⑥市や地域で実施しているイベントの参加の有無、⑦経営で最重視していること、の７項目である。プロジェクト実施前に塩竈市役所の方と協議をした上で厳選した項目から調査を行なった。

行政の立場からはなかなか聞けないことを学生が積極的に調査することで、塩竈市のこれからのまちづくりのヒントになりうるお話を数多く伺うことができた。また、調査結果を塩竈市に提出するだけでなく、いただいたお店の情報を元に学生目線からの各商店の魅力を各種 SNS で発信することで塩竈の観光アピールを行なった。

【スタッフの所感】

実際に調査を終えて、私たちの想像以上にお店の方が質問項目以外のこともお話してくださり、充実した活動となった。それと同時に、私たちも楽しみながら商店の調査をすることができた。協力してくださった３店舗、すべての方が塩竈を大切に想い、塩竈ならではの素材を大切にし、アピールしていこうと考えていることが強く伝わった。塩竈を愛すお店の方とお話をすることで伝わってきた塩竈の魅力・素敵なところを、調査だけで終わらせるのではなく、PR まで行うことでさらに塩竈市の

これからに繋げた活動になったのではないかと考える。

【参加学生所感】

一つひとつのお店にそれぞれ異なる考え方があるが、共通の考えもあったことが印象的であった。それは、「スーパーやコンビニでは買うことのできない特別なものを作ること」であり、価格の安さで勝負するのではない。味や品質を納得いくまで試行錯誤し、お客様のことを第一に考えているという強い想いを感じた。シャッターオープン事業にこのようなお店が参画することで塩竈の良さがどんどん広まっていくと感じた。今後もこのようにお店を助成する事業により、さらに活気のある商店街にしていければと考える。また、私自身経営者の方とお話をする機会が多いわけではないため、１つの仕事に対し、こだわりを持っている方々とお話しできたのがとても良い経験になった。

【今後の展望】

お盆の時期ということもあり、調査できる商店の数に限りがあったため、今後は時期をずらすことでより多くの商店を調査していければと思う。また、経済学部や経営学部などの学生にも参加していただくことによって、よりマーケティング的な視点からの調査を行なっていけるのではないかと考える。さらに来年度以降は、取材させていただいた商店の魅力を調査し発信していくにあたって、PR動画作成をする既存のプロジェクトと合同して発展させていければと考えている。

PR 動画プロジェクト

【活動場所】塩竈市魚市場、塩釜海産物仲卸市場
【活動期間】2017 年 8 月 17 日 (木) 18 日（金 ）
【参加人数】8 名

【活動内容】

PR 動画プロジェクトでは、塩竈市魚市場と塩釜水産物仲卸市場で取材を行なった。魚市場は、2011 年に起きた東日本大震災によって被災したが、2017 年秋の完成を目指し新しく建設されている最中である。今回魚市場では、セリの様子を通常では立ち入ることのできない 1 階のフロアで、衛生管理や、魚の新鮮さを大切にしている様子を見学させていただき、撮影を行なった。また、塩釜水産物仲卸市場では「My 海鮮丼」の取材を行い、魚市場でセリが終わったばかりの生マグロや、ウニ、ホタテ、イクラなどを使ってオリジナルの海鮮丼を作り、その様子を撮影した。

このプロジェクトの目的は、大学生など若い世代に向けた塩竈市の観光誘致である。前年度より引き続き行なっているプロジェクトであるが、今回作製した動画は大学生などの若い世代をより惹きつけることができるように短い動画を様々なバージョンで 4 本製作した。大学で行われる同窓祭や青山祭、YouTube などで放映する予定であり、より観光誘致のターゲットの世代に身近な動画になったのではないかと考える。

【スタッフの所感】

PR 動画を作製するにあたり私は、塩竈の方々は豊富な海産物を取ることができる塩竈の海、塩竈という地を誇りに思っているということを強く感じた。市場の様々なところについて熱心に説明してくださる魚市場の方、名物のマグロの話をするときの生き生きとしたお店の方の表情はとても印象深く残っている。

活動中には、様々な方から、「たくさん東京の方にも広めてね」というお言葉をいただき、この活動のニーズを肌で感じた。

また、この PR 動画プロジェクトは現地の方々のご協力がないと行うことができないと改めて感じた。多忙な中、私たちのために時間を割いて取材に協力してくださった魚市場や、塩釜仲卸市場の方々の温かさを感じると同時に、感謝の気持ちを忘れずに塩竈市の PR を東京でも引き続き行なっていきたい。

【参加学生所感】

新しい魚市場は衛生面の管理を徹底していたことが印象的だった。建物や設備を震災以前の状況に戻すだけではない、今後社会で求められる市場へしていこうと努力している様子から、塩竈の力強さを感じた。

PR 動画を作る上で意識したことは、見る人の気持ちを考えることだ。まず、この動画を見たいと思うか、動画を見て塩竈市に行きたいと思うかが重要だと考えた。

短い時間で、多くの魅力を PR することはとても難しいが、これを見て「塩竈に行ってみたい」と思う人、また実際に塩竈に訪れる人が増えてほしいと思った。

何より自分自身が動画や写真を撮りながら、塩竈の魅力を知って楽しく動画の作製をすることができた。

Instagram では実際に「行ってみたいと思いました！」というコメントが来てやりがいを感じた。今後は個人的にもどんどん塩竈市を PR して行きたいと思う。

【今後の展望】

来年度以降もこの PR 動画プロジェクトを行い、「大学生」目線から塩竈の魅力を YouTube や Twitter 等を通じて、発信していきたいと考えている。そして、この動画をきっかけに塩竈へ訪れたいと思う学生が増え、塩竈市を含め、宮城県における観光客増加へのきっかけになるような動画を作製していきたい。このように私たちを信頼し、ご協力くださった現地の方々の為にも、その期待に裏切ることのないように活動していきたい。

陸前高田プログラム

スタディーツアー

【活動背景・活動目的】

陸前高田市は震災で大きな被害を受け、現在もなお市内には震災の爪痕が多く残されている。このプロジェクトでは現地に住む本学 OB の方の案内により市内の様々な震災遺構を訪れ、貴重な当時のお話を聞いた。それらを通しスタッフや参加者が「復興」や「陸前高田でボランティアを行う意義」について改めて考えるきっかけを与える。

【活動場所】 奇跡の一本松・箱根山・気仙大工左官伝承館・米沢商会・陸前高田ドライビングスクール・旧道の駅高田松原（タピック 45）・復興まちづくり情報館・鈴木旅館

【活動期間】 2017 年 3 月 11 日（土）、2017 年 8 月 4 日（金）、2018 年 3 月 11 日（日）

【参加人数】 それぞれ 7 名、9 名、8 名

【活動内容】

まず始めに復興のシンボルとして有名な「奇跡の一本松」を訪れた。陸前高田の人々と防潮林として植えられていた 7 万本の松（高田松原）の関係性や「奇跡の一本松」がモニュメントとして存在する現在の形になるまでの経緯、陸前高田の復興のビジョンとこの 6 年間の復興の歩みを学んだ。また気仙大工左官伝承館では気仙大工の歴史を教わると同時に震災直後の避難所の状態や、東日本大震災から学んだ教訓、もし新たな震災が発生したときにするべき避難所支援の方法を教わった。夜には宿泊場所にお招きし本学 OB であり現在は震災語り部としてご活躍中の方と同じく OB であり震災に関する書籍を執筆されている方からお話を聞いた。そこでは震災を「風化」させるということは次に震災が起こったときに自らの命を守るための行動ができなくなるということ、そもそも東日本大震災は未曾有の大震災ではなかったということ、嵩上げ（津波を被った土地の高さを上げる）に対する市民の意見など、実際に現地の方から聞かなければ知ることのなかった貴重なお話を伺った。

【スタッフの所感】

このプロジェクトを通して東日本大震災の被害の大きさと現地の人々の強さを学んだ。震災遺構である米沢商会を訪問し、震災当時に米沢さんがいらっしゃった場所から見た景色は言葉では言い表せないようなものだった。辺り一面土に覆われ、人影も建物もない。一目で津波の犠牲になった場所だとわかる風景だった。7 年前にはそこに人が生活していたとは信じがたかった。また 7 年たった現在でも震災の爪痕を残したままである嵩上げに復興の難しさを学んだ。あの震災で陸前高田が負った傷は想像以上のものであった。

一方、現地の人々の強さも感じることができた。現地の人々は、震災でご両親を亡くされたお話や当時の混乱した避難所の状況など思い出すのも辛いであろうお話をしてくださる。なぜ外から来た我々にそこまでしてくださるのだろうか。それは同じような体験を我々にしてほしくないからだろうと感じた。自らもまだ辛い状況にあるにも関わらず私たちのことも考えてくださる現地の人々の強さと優しさを感じた。

【参加者の所感】

一番印象に残ったお話は、人の心は風化するということだ。私は東北関東大震災以前に津波の体験があるという歴史を知らなかった。その歴史の後に、防災訓練を行っても、避難場所の設置の矛盾が起きていると気づかないという人間の愚かさに驚いた。しかし、自分がこう思えるのは、客観的な傍観者であるからだとも思う。とくにはっきりとイメージが見えてきたのは、やはり米沢さんのところの建物をみたときからである。はがれたタイルや、がれきに埋まった事務所を見て、あ、こんな感じだったのか、と急に疑似体験した気分になった。防災より減災、そして過去のデータに囚われてはならないこと、誰のための復興か、その一つ一つの主張が今ならわかる。ただの頭の悪い私でも主張を理解して、自分にあてはめて考えようとできるのは、当時の緊迫感、無念、焦燥感、を自体験して人が話してくださったからだと思うのだ。当時の風景、におい、思い、そのすべてに緊張感があるから、受け取り側も事柄の重さを感じられるのだと思う。

【今後の展望】

現地と東京の架け橋となるような活動にする。この活動を通して学んだ陸前高田の現状や現地の人々が教えてくださる震災の教訓を学内の人々や津波を経験していない東京の人々に伝えていく。ただ教えてくださったことを伝えるのではなく、東日本大震災の教訓を基に、首都直下型地震や南海トラフ地震に遭遇したときに自分の命を守るためにどのような行動をとることが適切なのか考えるきっかけを与えるようなプロジェクトに展開していきたい。

教育支援プロジェクト

【活動背景・活動目的】

陸前高田市は市内に大学がなく、次の時代を担う中学生たちが相談することのできる歳の近い存在である大学生と、日常的にコミュニケーションを取ることが難しい現状にある。東日本大震災の発生から今日まで、常に先頭に立ち、勉強・部活動などの日常生活のすべてを全力で頑張ってきた中学生たちに疲れが見え始めてきているという。「なぜ勉強をするのか。」「なぜ大学に行くのか。」「何を理由に高校・大学へ行くのか。」という悩みとともに、子供たちの勉強へのモチベーションがだんだんと低下してしまっているというお話を校長先生から伺った。このプロジェクトを通して、大学生である私たちが中学校に入ることによって、中学が、新しいステップに進むための選択肢を選ぶ「きっかけ」を創るサポートをし、私たちとコミュニケーションを取ることによって、中学生が自分自身を客観的に見つめなおす「きっかけ」を私たちとともに見つけることを目的とした。

【活動場所】陸前高田市立気仙中学校
【活動期間】2017 年 8 月 8 日（火）・8 月 10 日（木）
【参加人数】4 名

【活動内容】

今年度をもって気仙中学校は閉校となってしまうため、閉校してからも新たな学校生活を歩みながら自分と向き合う時間を作る大切さを考える時間を作ることができるよう活動を行った。活動期間中には、学校に来ている中学校３年生に対して自主学習支援・部活動支援を行った。「教える・教わる」関係だけではなく、「勉強の話題」「生活の話題」など、コミュニケーションを取りながら活動をした。「きっかけ」創りの一つとして中学生に対して、「なぜ私たちが勉強をしているのか」「なぜ大学に入ったのか」という話題のプレゼンテーションを個々に作成し、発表した。

【スタッフの所感】

「頑張ることがすべてではない、一回立ち止まることも大切なのかもしれない」

プレゼンテーションを終えた後、男子中学生に感想をもらった。中学 3 年生の中には、「自分の夢をどこまで追いかけてもよいのか」「自分のやりたいこと・したいこと」をどこまで表に出してよいかわからずに、自分自身で自分の気持ちに蓋をしてしまっていた子供たちもいることに気づかされた。同時に大学生のように、中学生が年齢の近い「お兄さん・お姉さん」という感覚になれるような人々と関わることによって、普段大人に言えないような悩みも話すきっかけにつながったと推察できる。

今回、中学 3 年生への学習支援、「きっかけ作り」のプレゼンテーションと、女子バレーボール部の部活動交流支援を行ったことで、気仙中学校の中学生に、「自分の人生を考えるきっかけ」を与えることができたと考える。

また、学習支援においても普段聞けない素朴な疑問や、学習支援を通じたコミュニケーションの中で普段の生活の悩みなどを共有することで、大学生とともに時間を過ごすことへの特別感を創出することができたのではないかと思う。

閉校に伴い、新しい学校でスタートを切る気仙中学校の中学生が、今年度のプロジェクトを通じて

考えてもらった「自分自身」について、改めて振り返り、自分の将来、したいこと、夢について考える「きっかけ」となってほしいと切に願う。

【参加者の所感】

わたしも気仙中学校の子たちのような環境で中学時代を過ごしたので、東京の大学生から話を聞く機会があることはうらやましいなと思った。ひとりでも多くの子供たちが、私たちのプレゼンテーションを聞いて刺激を受けて、前向きな進路選択をできたらいいなと思う。また、今回は、「勉強への姿勢」ということで「自分とは」というテーマでプレゼンテーションをすることになった。自身の体験談を交えてコミカルに仕上げたプレゼンになったと個人的にはなったと思っているが、彼らのこれからの人生に役立つ発表ができたかどうかが少し不安である。そんな一方で、勉強を教えている際にいつも笑顔で頷きながら解説を聞いていた彼らならきっと間違えた道を進むことはないだろう、とも思った。純粋な子どもたちであることを改めて実感した。

【今後の展望】

前述したとおり、陸前高田市立気仙中学校は 2017 年度をもって閉校し、陸前高田市立第一中学校と統合される。気仙中学校校長先生より「大学生だからこそ話す夢の広さ、目線、それらは中学生には大人には与えられない良い刺激となる」とお話しいただき、プレゼンテーションをはじめとした効果は高いと考えられる。今後は、気仙中学校で行われてきた活動を活かしながら、陸前高田市内の小学校・中学校や、「陸前高田市ジャンプスクール」などでの活動を模索しながら引き続き陸前高田市内の小中学生に広く「きっかけ」を考える活動を行っていきたいと考える。

地域支援プロジェクト

【活動背景・活動目的】

このプロジェクトは子供たちの居場所作りを目的とした活動である。震災当時小学生であった子供たちは津波によって変わりゆく日々に不安や恐怖を抱えていたが、同じように不安や恐怖を抱えながらも奮闘する親や学校の先生方といった大人の姿を見て、その気持ちを自らの中に留めてしまっていた。そのため、震災から 7 年経ち中学生、高校生へと大人になりつつあるが、なかなか子供たちの心の傷は癒えておらず、子供たちの心のケアが陸前高田市の大きな課題の一つとなっている。また中学校にスクールバスで通うなど交通の便が悪いため、放課後子供たちだけで遊ぶ場所がないという現状がある。そ

こで我々のような、津波や震災の被害にあっておらず、年上の大学生と関わることによって無条件に受け入れてもらえる環境を提供すると同時に、子供たちだけでのびのびと遊べる場所を提供している。それに加え、陸前高田市は大学がないため、大学生と関わる機会が少ない。そのため、大学生と触れ合うことで、「なぜ大学に入ったのか」などの普段聞くことのない大学生の話を聞くことで、陸前高田以外に目を向けるきっかけや大学進学を考えるきっかけなどの視野を広げてもらうことを目標としている。

＜ 2017 年夏期活動＞

【活動場所】二又復興交流センター、陸前高田グローバルキャンパス

【活動期間】2017 年 8 月 5 日（土）、8 日（火）～ 12 日（土）

【参加人数】10 名

【活動内容】

子たちを集め、短い時間ではあるが勉強と遊びの時間と場所の提供を行い、少しでも子供たちの夏休みの思い出作りができるように活動した。今回は、期間中 1 日だけではあるが、陸前高田グローバルキャンパスで活動できたため体育館を使用して子供たちと体を動かすことが出来、子供たちにも好評だった。今まで出来なかったバスケットボールや卓球などを行った。また、子供たちが持ち込んだスイカでスイカ割りをしたり、薄暗くなってから手持ち花火をしたりして、ともに夏らしい思い出をつくることができた。子供たちは、青学生が持ち込んだカードゲームなどにも大変興味を示し、新鮮な遊びができていた。また、勉強の面においても、受験を控えた中高生が青学生と関わることによって、サポートすることができた。陸前高田市内には大学がないため、「身近な大人」として大学生と接することで、自分の進路や将来について考えるきっかけになった。

【スタッフの所感】

今回はスタッフ、参加者ともに、子供たちととても良い関係をつくることができたように感じた。短い期間ではあったが、一緒にご飯を食べたり、サッカーやバスケットボールで体を動かしたり、勉強やちょっとしたおしゃべりなど、何気ない時間を共有することの大切さを大きく感じた。七夕まつりの日も、地域プロジェクトで交流のある子供たちと合流してお祭りを楽しむこともできた。その反面、子供たちがとても活発なのは、普段体を動かしたり、友達と騒げる環境にいないことの表れでもあるように感じ、このプロジェクトの重要性も感じられた。今回の子供たちも、親に送り迎えをしてもらわないと参加できなかったので、その環境の整備が急務であると考えられる。

また、参加してくれる子供たちが毎回同じ子が多いので、より多くの子供たちと関係が持てるようなプロジェクトとして、今後の活動の幅を広げられたら良いと感じた。

しかし何よりも参加してくれた子供たちが、とても楽しんでくれて、最終日には涙を流して別れを惜しんでくれるほど、充実した時間と場所づくりができたと思った。

【参加者の所感】

最初は子供たちと仲良くできるか不安だったが、子供たちがとても明るくていい子たちばかりだったので、楽しく活動できた。わたしには想像もできないくらいつらい経験をしているにも関わらず底

抜けの明るさを持っている彼らに、逆に元気をもらった。1番感じたことは、子供たちが私たちを心から歓迎してくれているということだ。子供たちには、初めて会った時から、前向きで明るい印象を受けて、正直、こんなに明るい子たちに支援する必要あるのかな、など不謹慎なことを思ってしまった。しかし、実際話してみると、学校に行きたくない（来年には学校が合併されてしまうから不安だ等）それぞれに震災の影響に苦しんでいて、私たちがいるから、二又復興交流センターに足を運んでくれて、私たちと過ごす時間の1分を惜しんでくれて、私たちが彼らの心のよりどころになっているのを感じた。大学生ボランティアは、親や教員を気遣ってわがままを言えない子供たちの息抜きの場を提供できるのだ、と思った。

【今後の展望】

今後地域支援プロジェクトを行うにあたって、子供たちにも地域のコミュニティの一員であることを意識付け、自分の地域に関して考えるようになって欲しいと考えている。子供たちにとって、外部の人間かつ身近な大人である我々からの話題提供によって、今一度自分の進路や将来とともに、陸前高田市の未来についても自発的に考え、周りを巻き込める存在になれるよう、居場所の提供をしていきたい。

＜2018年春期活動＞

【活動場所】二又復興交流センター交流室

【活動期間】2018年3月10日（土）、12日（月）、14日（金）

【参加人数】10名

【活動内容】

学習支援、人狼やスピードなどの大人数で出来るトランプ遊び、外でのサッカーを行なった。

【スタッフの所感】

今回の活動で私自身プログラムの参加が2回目だったのだが、子供たちに会う回数が増えれば増えるほど子供たちとの距離が近づくのが大変嬉しく感じた。この活動を通して、学校が違うため、普段

なかなか会えない友達同士と会うことが出来るなど、子供たち同士の交流の架け橋になっていると感じた。また子供たちとの会話する中で、東京に暮らす私たちの生活を話す場面があり、子供たちの心の支援、居場所作りを目的とした活動であると同時に大学生と触れ合うことで、視野を広げるきっかけを与えることができたと実感した。継続的な支援を行ってきたからこそ生まれた信頼関係から得た今回の成果ではないかと感じた。またこれからの未来を担う子供たちが、自分たちの地元陸前高田の未来に対して考えるきっかけを与えるような活動にしていきたいと考える。

【参加者の所感】

陸前高田市は普段の移動でもタクシーやバスでないと厳しい土地であるなど、自分自身とは全く違う環境で過しているということに驚いた。しかし、そのなかでも子供たちは普通に元気で明るく、笑顔で接してくれていたのがとても嬉しく感じた。一方で心の奥底には何か抱えているのか、辛いことや悲しいことを多く抱えているのではないかとも感じ取れる場面があった。それらの思いを少しでも私たちと過した時間ので、癒やされてほしいと感じると同時に、震災をきっかけにできたこの絆を私たちも子供たちも忘れることなく、これからも続いていってほしいと感じた。

【今後の展望】

陸前高田プログラムの今後の展望として様々な世代が関わり合えるきっかけづくりを目指している。そのためコミュニティー活性支援で関わりを持っているお年寄りと地域支援に参加している子供たち、両方が楽しめるイベントを行う。現在のコミュニティーの中心であるお年寄りと今後の陸前高田の未来を担う子供たちが関わり合うことで、大学生がいなくても成り立つ自立したコミュニティー作りを目指す。

福祉支援プロジェクト

【活動背景・活動目的】

本プロジェクトは 2012 年度から引き続き行っている。活動するあすなろホームは、障がい者就労継続支援事業所で、最終的には利用者の方々が一般企業に就労することを目標として活動している施設である。施設側は、それらの活動の中で利用者のコミュニケーション能力の向上や日常生活に刺激を与える存在として、学生ボランティアが求められている。

＜2017年夏期活動＞

【活動場所】社会福祉法人　燦燦会　あすなろホーム

【活動期間】2017年8月5日（土）、8月8日（火）～8月10日（木）、8月12日（土）

【参加人数】4名

【活動内容】

夏は石を使ったモザイクアートの作成、わかめ加工のための下処理作業を利用者の方々とコミュニケーションをとりながら行った。利用者の方々は普段あまり接することのできない学生との交流をして本当に嬉しそうだった。交流をすることで利用者の方々の社会進出を手助けできるプロジェクトである。

【スタッフの所感】

あすなろホームでの活動に参加したのは今回が初めてだったが、利用者の方々は私を温かく迎えてくださった。まだ何もわからない私に、利用者さんは私の大学生活について質問してくださったり、休み時間にはボール遊びに誘ってくださったりした。また、普段は恥ずかしがって自分から話しかけることの少ない1人の利用者さんは、身振り、手ぶりを交えつつ私と関わろうとしてくださった。この人々の心の温かさは、陸前高田市に根付いている良さだと思う。震災直後の誰もが不安で押しつぶされそうな中でも、陸前高田市の人々はお互いの心を寄せ合って、励まし合っていたのだと思った。私のある好きな曲の歌詞に「迷った時でもいつだってキミは一人じゃない」という一節がある。心が不安で押しつぶされそうな時に人に支えられると安心する。このあすなろホームでの活動は、人の心にある温かさを改めて感じることができたプロジェクトになった。

【参加者の所感】

今回この支援を通して、思ったことは、コミュニケーションのキャッチボールのツールは口や手だけではないということだ。あすなろホームの利用者さんの中には少なからず、会話を交わすことが困難な人がいた。コミュニケーションの基本はやはりキャッチボールなのだと実感した。例えば、こちらが手のひらを差し出せば、ハイタッチをしてくる。背伸びしている人に目を合わせて、同じ動きをすれば、笑いかけてくれる。私が笑顔を向ければ、笑顔を返してくれる。手を振ったら、手を振り返してくれる。この数日間、私は思った。会話はコミュニケーションのツールにすぎない。こちらが一方的に話しかけるよりも、それ以外の方法でお近づきになるほうが、利用者も心を開きやすいのだと思った。利用者さんが返せる方法で、自分が利用者さんとお近づきになりたいという意思を伝えたいな、と思った。

【今後の展望】

普段の生活の中で、障がいを抱えた方と関わることは、そう多くはない。そのため、彼らをあまり知ることのないまま、偏見を持ったり、関わりにくいと感じてしまったりすることがある。よって、このあすなろホームでの活動に参加することで、それらの意識を変えることができる。また、参加する学生一人ひとりが障がいを抱えた方に寄り添った見方での復興を考えていくことが可能になる。今

後も夏期、春期共に継続的に支援していきたい。

＜2018年春期活動＞

【活動場所】あすなろホーム

【活動期間】2018年3月12日（月）～14日（水）

【参加人数】4名

【活動内容】

春は商品の販売に参加させていただいた。利用者さんが普段の活動でつくっているお菓子を、施設周辺の企業や保育園に直接販売に行く活動だ。どの販売先でもとても喜んで買ってくださるのがよくわかり、あすなろホームが地域に貢献していることがよくわかる活動になった。

【スタッフの所感】

3日間の活動を通して、コミュニケーションには大きな意味があると感じた。利用者さんの中には、学生からはたらきかけることによってコミュニケーションをとれる方と利用者さん自ら私たちに声をかけてくださる方がいたが、共通して言えることは、利用者さんが私たち学生とかかわっている時は、とても嬉しそうであるということだ。私は、自分から人に声をかけることがあまり得意ではないが、私から声をかけてお話をする方々は皆、嬉しそうにしてくださり、私も嬉しかった。

活動中は利用者さんの気遣いに感謝する場面がたくさんあった。例えば、作業前に長靴を出してくださったり、エプロンを渡してくださったりした。利用者さんの中には、「自分には障がいがあるから･･･」と自信を持てない方もいるかもしれないが、皆さんには良いところがたくさんあり、自信を失う必要は全くないと思う。利用者さんの心の優しさや温かさは私たちの何倍もあると強く思った。

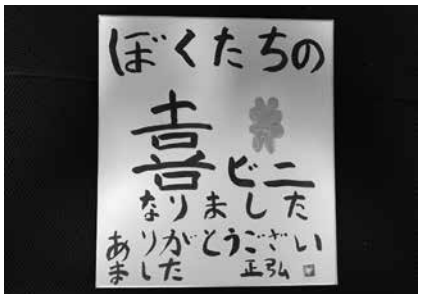
【参加者の所感】

あすなろホームで福祉支援を行うということで、行く前は本当に不安だったし、そもそもあまり障がいを持った方と接したことがなかったので、どのように話せばいいのか、わからなかった。しかし、実際に行ってみるとみなさん温かく迎えてくださって感動した。利用者の方々の中には、目があまりよくない方、上手にお話しすることができない方々などがいて、そのような方に対しても、いつもの自分通りに楽しく話すことを心掛けた。あすなろホームでは、わかめ、りんごジャム、お菓子作りなどの作業をしていて利用者の方々がその人自身にとって少し難しい作業であったとしても、自分なりに努力して取り組み、わからないことがあれば正直に職員に尋ねている姿を見て、今まで自分が障が

い者の方々に対して差別まではいかないまでも偏った見方をしていたことに気づかされ、障がい者の方々に対する見方が大きく変わった。

【今後の展望】

今後はあすなろホームに限った福祉支援活動だけでなく、陸前高田市民全体に対する障がいのある方への偏見や価値観の変化のきっかけを与える活動をしていきたいと考えている。具体的には陸前高田市民とあすなろホームの利用者の方々のような障がいを抱えた方々双方が楽しめる障がい者スポーツを用いたイベントやアートや音楽といった芸術活動を検討している。一方でより多くの一般の青学生が、あすなろホームの活動をきっかけとした障がいに対する意識変革にも力をいれていきたい。



コミュニティ活性プロジェクト

【活動背景・活動目的】

現在、陸前高田市では仮設住宅から復興公営住宅への入居が進められているが、そこでは震災後の6年で築かれてきたコミュニティの再構築が必要となっている。抽選で復興公営住宅への入居が進められたことで、これまで仮設住宅にできていたコミュニティの破損と復興公営住宅での慣れない生活の負担がみられる。高齢者率42.9%の陸前高田市において、コミュニティの中心となってくるのは主にお年寄りであるが、近所づきあいが希薄化している現状がある。そこで、高齢者の方々と我々大学生や中高生の若い世代とのコミュニケーションを通して、コミュニティ再構築のきっかけづくりを目的とした活動を行った。世代を超えたつながりの構築によって、高齢者の孤独死などの問題に向き合い、すべての市民を巻き込んだ陸前高田市の目指す復興に寄与することを目標とする。

＜2017年夏期活動＞

【活動場所】竹駒小仮設

【活動期間】2017年8月9日（水）

【参加人数】3名

【活動内容】

今回の活動で初めて取り入れたプロジェクトで、陸前高田市復興支援連絡会の地域連携事業に参画し、仮設住宅で行われているお茶会に参加した。定期的に仮設住宅の一室に近所の人々が集まる場を設け、一緒にお茶を飲みながら他愛のない話をするというだけの活動内容ではあるが、地域の方々の

憩いの場、そして貴重な交流の場となっていた。普段のお茶会の場に我々が参加することで、陸前高田の方言や土地柄、文化などの良さを教えていただくことができた。また、お茶会に参加した地域の方から積極的に、ご家族のことや、暮らしのことを話していただくこともあり、より陸前高田の人々との距離を縮められる活動となった。

【スタッフの所感】

コミュニティ活性プロジェクトは、今まで陸前高田市ではあまり関わってこなかった方々との交流の機会であり、とても新鮮に感じられた。活動前は部外者の我々がコミュニティに入っていくことが、受け入れてもらえるのか緊張感もあったが、他のプロジェクト同様、地域の方々が温かく迎えてくださったことがとても嬉しかった。

初回の活動であり、たった 1 回の活動ではあったが、この活動の必要性を強く感じることができた。この活動にご協力いただいた復興支援連絡会の方々のお話によると、陸前高田市では、仮設住宅で暮らしている人々は減ってきているものの、そのために仮設住宅に残っている人の寂しさや、復興公営住宅に移った人の戸惑いがよく見られることが分かった。

しかし、実際にお茶会に参加すると、とても元気なお年寄りの姿を見ることができた。地域の方々も我々が参加したことによって、いつもと違ったお茶会になり、喜んでくださっていたように感じた。初めは緊張もあったが、復興支援連絡会の方の助けもあり、とても楽しい時間を過ごすことができた。この活動を、もっと活性化していければ、より良いコミュニティの構築と、地域の活性ができるのではないかと強く感じられた。

【今後の展望】

今回は仮設住宅のみでの活動になったが、今後、お年寄りの孤独死が懸念されている復興公営住宅での活動も視野に入れていきたい。また、お年寄りだけでなく、中高生やほかの世代、地域の全体を巻き込んだ交流のきっかけをつくれるよう、このプロジェクトを通して考えていけると感じられた。そのためには、より多くの地域の方々との交流が必要になるとも考えられる。

＜ 2018 年春期活動＞

【活動場所】広田水産高校仮設、脇ノ沢公民館

【活動期間】2018 年 3 月 12 日（月）～ 13 日（火）

【参加人数】4 名

【活動内容】

お年寄りとお菓子やお茶を食べながらお話を聴いたり、歌を歌ったり、ストレッチをすること。

【スタッフの所感】

今回の活動では 2 か所で行われているお茶っこに参加することができたが、 2 つとも同じお茶っこでも行われている内容が異なっていて、それぞれの地区によってお茶っこに求められているニーズが異なることを学んだ。広田水産高校仮設は 2018 年 3 月末で閉鎖されてしまう会場であり、現在は高台にバラバラに暮らしている方々が震災直後、ともに過ごした人々との交流を求めて集まっていた。そのため普段は自宅付近で過ごすことが主な方々なため、運動不足解消のための簡単なストレッチなどが行われていた。一方、脇ノ沢公民館で行われたお茶っこは、震災後新たに高台に引っ越してきた方々による新たなコミュニティー作りを目的としたお茶っこであった。どちらもお年寄りの方が積極的に大学生と関わってくださり、様々なお話を聞くことができた。その中で「普段なら言わないけれど」と一言お話された後に、震災の話をしてくださったことが印象的だった。支援員の方にもなかなかお話できないような話であり、外から来た大学性だから話せるお話を聞くことが出来、非常に嬉しく感じた。

【参加者の所感】

このプロジェクトを通して、人と人の繋がりを保つことの難しさを実感した。人と関わることの出来る環境が当たり前ではないことも、この活動を通して実感した。だからこそ、今ある環境、家族、友達との繋がりをより大切なものにしなければならないと感じた。一方でお茶っこの参加者と会話する中で、震災についての話はして良いものなのか悩んだときがあった。しかし多くの方が会話の中で話していらっしゃって日常の一部なのだと実感した。会話の中で地元ならではの良さを沢山教えていただき、お話をされているお年寄りの方が笑顔で活き活きとなさっていて自分の故郷が本当に好きなのだと気づかされた。

【今後の展望】

今回の活動では復興支援連絡会の皆様の活動に参加させていただいたが、今後は災害公営住宅や仮設住宅にお住まいのお年寄りが参加するイベントの企画立案をしていきたいと考えている。地域支援プロジェクトや教育支援プロジェクトで関わりのある中高生とお年寄りが関わり合える、陸前高田の郷土料理を教わる会や震災以前の陸前高田の様子について教えてもらう会などを検討中である。

熊本プログラム

農業プロジェクト

【活動背景】

熊本地震によってビニールハウスの倒壊や、アルバイトとして南阿蘇村の農家を支えていた東海大学生が村を離れるなど、主産業である農業は甚大な被害を受けた。その被害は農地と農業用施設合わせて 580 ヘクタール、金額にして 89 億円にも及ぶ。東海大学阿蘇キャンパスの廃止に伴い、東海大学生という大事な人手を失った今、震災による従来よりも進んでしまった人手不足の問題が顕著に残っており、復興に至るにはさらなる時間が必要となると考えられる。これらのことから私たち大学生にできることを考え、主産業である農業の復興に貢献することを目的に支援を行った。

＜ 2017 年春期活動＞

【活動場所】熊本県阿蘇郡南阿蘇村、阿蘇市

【活動期間】2017 年 3 月 6 日（土）～ 18 日（土）

【活動人数】17 名　（内訳）スタッフ 8 名、一般参加者 9 名

【活動内容】

次の 3 つの活動を実施した。スタディツアーで初めて南阿蘇や被災地を訪れる学生に、実際に現状を見てもらいたいことと、同じ学生という立場から話を聞いてもらいたいと思い、東海大学の学生に依頼した。スタディツアーは、地震によって被災した東海大学阿蘇キャンパス周辺である黒川地区で行われた。また、ツアーのあとには東海大学生と懇談会の場を設けてもらい、お互いの組織運営についての意見交換や、下宿先の村人の方からお話を伺った。農業支援では苺の苗やジャガイモの種芋の植え付け作業などの直接作物に関わるものや、ビニールハウスの組み立てや解体などの間接的に農業に関わる支援を行った。復旧支援では瓦礫の仕分け作業を行った。南阿蘇村においては、震災から 1 年が経った今でも建物の解体作業の段階であり、機械ではできない細かい作業を人力で行う必要があった。

【スタッフ所感】

農業支援は今回、農業インターンシップを利用したため、活動先の農家の方の受け入れ態勢が整っており、参加者の負担も軽減されていたと感じる。しかし、当日のスケジュールが計画書時点で予測不可能であったため、当日の準備物や時間調整に困ることがあった。現地へ行く前に現地担当者との連絡を事細かにする必要があったと考えられる。農業支援といっても直接作物を育てることではなく、ビニールハウスの解体作業などを行うことによって農業の土台部分から知ることができた。世間で言われるような農業のイメージから、地道だがとても力がいる作業だということを実感した。復旧支援の仕分け作業は、がれきの分別の基準が細かく、素人ではなかなか難しい物があったが、受け入れ先のほうで表を作っていただいていたので比較的スムーズに作業に入ることができた。気の遠くなるような作業量で、精神的にも体力的にも厳しい部分があった。休憩などのタイムスケジュールは受け入れ先に一任していたが、自分たちの体調と相談しながら、自主的に休憩をとってもよかった。

【参加者所感】

アスパラガスのビニールハウス設置のお手伝いをしました。農作業というと、苗を植えたり、収穫をしたりという工程がイメージされますが、土台づくりに参加させていただいたことで、改めて農作業はいかに多くの苦労があり、自分達の食べる食材への感謝がわいた。農作業は一見単純作業に見えるが、人手不足が課題。専門的な知識よりもむしろ、若者の元気な力が必要であることが分かった。

(地球社会共生学部地球社会共生学科 2 年)

メルヘン村にて家屋を崩したときに出たゴミの仕分け作業を行った。作業をしていると、だれかがここに住んでいたという様子が想像できなかったが、ごみの中にはトイレの便器の破片などが混ざっていたのを見たときに、震災以前にはここに暮らしがあったのだということを実感した。終わりが見えないほどのゴミの量で作業がはかどっているのか不安になるときもあったが、作業員の方から「すごく進んだ！ありがとう！」の言葉をいただき、少しでも復興の力になれたのだと嬉しく思った。

(教育人間科学部教育人間学科 4 年)

【今後の展望】

今後の方針としては、南阿蘇村を中心に活動を行っていく。夏期活動では、農業支援に加え、小・中学校において教育支援や仮設住宅での支援も行っていく。また、新体制になって、災害学習にフォーカスした活動をプロジェクト内だけではなく、活動先でも展開していく。復旧支援は、今回初めて行ったが、参加者の体力面でも今後行なっていくのは難しいと考えるため、検討中である。

＜2017年夏期活動＞

【活動場所】熊本県阿蘇郡南阿蘇村、阿蘇市　木之内農園、ノースグレープファーム、野田いちご園、南阿蘇オーガニック、大津いちご園

【活動期間】2017年8月27日（日）～9月2日（土）

【参加人数】12名（スタッフ6名　一般学生6名）

【活動内容】

農業面における復旧のお手伝い、人手不足の解消のために今回活動を行った。また、8月31日には下切地区の方々と交流会を行った。下切地区は23人しか住んでおらず、平均年齢も65歳を超えるいわゆる限界集落である。普段交流することの無い地方に住むご年配の方々と時間を共にすることで、お互いに刺激を受け、なにか得ることができたらと思い、実施した。

【スタッフ所感】

農業プロジェクト活動初日は、長陽大橋が開通した日からの活動であり、前回の活動と比べて南阿蘇村での交通の便が良くなったことが実感できた。しかし、農家は依然として人手不足であり、作物の手入れが十分に行われていない状況であると感じた。私たちがボランティアに入ることで、遅れていた作業を少しでも前に進めることができた。また、農家の方々と共に作業したり、お話を聞いたりすることで普段馴染みのない農業について深く考えるきっかけとなった。また、今回初めて行った下切地区の交流会はスタッフ、参加者共に現地の方と深く関わることができ、人との繋がりの大切さや温かさを実感し、東京ではできない素晴らしい経験ができた。私たちのことを「青いTシャツの学生」と覚えてくださった。また青いTシャツを着て交流会をすることで、結びつきを強めていきたい。

【参加者所感】

・同じ農家という職業でも、規模によって異なる問題を抱えていることや復興にはお金だけではなく地域の活力やビジョンが大きな力になることを知った。また農家さんの大変さだけではなく、農業に対する愛情や熱意についても考えることができ、様々な視点から農業を見つめられた。

・農家の人手不足の深刻さを肌で感じた。メディアを通してでは知ることができない現状を実際に自分の目で初めて見ることで、多くのことを得ることができた。これからの自分なりの被災地へのかかわり方を見つめなおすきっかけとなった。また足を運び、南阿蘇村が今後どのように変わっていくのかを見つめていきたい。

【今後の展望】

南阿蘇村の農業面においては依然として人手不足が深刻である。従業員を増やそうにも、様々なことに莫大な費用がかかり人件費を払うことが難しいのが現状である。そのため若い私たち大学生がボランティアとして入ることが必要である。また、今回は農家の方々からあらゆる知識を提供していただくばかりであったが、今後は私たちから新しい発想や考えを提供し、お互いにWin-Winな関係を築いていきたい。

＜2018 年春期活動＞

【活動場所】木ノ内農園、はな阿蘇美、波野農場、ノース・グレープ・ファーム、榊農園など

【活動期間】2018 年 3 月 1 日（木）～ 13 日（火）

【参加人数】22 名（述べ 25 名）

【活動内容】

具体的な活動内容としては、受け入れ先の農家、農園が複数あったので、グループに分かれて各農家、農園の下で活動した。主に、ビニールハウスの組立・解体や施設内の清掃など次年度の栽培へ向けた準備作業が多かった。力仕事も多々あったため、男女分かれての作業も見られた。例えば男子はビニールハウスの組立・解体、石垣積み、薔薇の鉢の移動等を行い、女子はバラの手入れ、雑草抜き、枯葉の除去、山羊の小屋清掃等を行った。

多くの農家の方々は震災によるさらなる人手不足や若者不足が問題だとおっしゃっており、また今回の活動において何度も感謝のお言葉をくださった。特に今回は力仕事が多かったため、少しでも私たち大学生の力が農業の復興に繋がれば幸いである。

【スタッフの所感】

今回の活動はハウスの解体やテントのペンキ塗りなど、農作物の手入れ以外の作業が多かった。本来そのような作業は業者に依頼してやってもらうそうだ。しかしながら今現在、それらは費用削減のために農家の方々自身で行なっていると聞き、農家の方々の気苦労を感じた。そして活動中に農家の方のお話を聞く中で、「自分たちだけだと何週間もかかる作業が、あなたたちボランティアスタッフのおかげで 1 日で終わったよ」と言われることが多々あった。それを聞き、我々のような農業に関して専門性を持たない学生でも力になれるのだ、と感じた。

また、農学部生でもない我々が農業の支援をするメリットは他の面にもある。それは、より多くの学生に第一次産業に触れる機会を広めることができることだ。特に都会の大学に通い、都会で生活する我々にとって、そのような機会を持つことはほとんどない。そのきっかけはともあれ、土に触れること、食べものに感謝を持つこと、こういった機会を持つことは大変意味のあることである。

これからはハウスの解体、そして設置の作業が多くなると言うお話だった。ハウスを解体すると、そこからさらに鉄骨を集積場まで手作業で運ばなければいけない。そのような作業のお手伝いは農業経験の乏しい我々にも出来ることなので、今後も南阿蘇村でのボランティアのニーズはたくさんあると思う。

【参加学生所感】

震災は人々の暮らしを大きく変えてしまうということを改めて学んだ。木之内農園さんの立野地区の農地は震災によって減少した。地震で崩落した道路を作り変えるために元あった農地の上に新たな道路が作られたのである。今では地区を繋ぐ道として多くの車両が通っているが、その下に収入の柱の作物を作っていた農地が埋まっていると考えると胸が痛い。今も災害公営住宅建設のために土地を決められた期限までに開けなければならないが、全てはみんなのためにということで取り組んでいる。今回お会いした全ての方々は南阿蘇が好きなのだという気持ちが非常に伝わってきて、地元のために活動することの素晴らしさを知った。また、全てを奪い去ってしまう津波とその後も被害が目に見える形で残るとでは心情もその後の復興の形も異なるということも知った。自らの目で現状を見ることで自然災害の脅威を再認識し、日々のコミュニケーションの重要性を感じた。

【今後の展望】

熊本地震から２年が経つ今、現地には様々な変化が生じている。道路などの復旧面では大きな進歩が見られたが、現地の方からは「目に見えない部分、人の心が外面的な変化に追いつけていないのが現状」とのお声もいただいた。そのような現地の現状とともに我々の活動も形を変えながら、一日も早く復興を迎えられるよう今後も努力していきたい。

教育プロジェクト

【活動背景】

震災によって仮設住宅で暮らすことや、橋の崩落などの交通網の悪化により塾へ通えないことで学習環境が十分に整っていない子どもが増えたため、子どもたちの学習意欲を向上させることを目指し活動を行った。

【活動場所】熊本県阿蘇郡南阿蘇村　南阿蘇中学校 南阿蘇西小学校 寺子屋 ちょうよう保育園 久木野地区学童保育

【活動期間】2017 年 8 月 20 日（日）～ 26 日（土）

【参加人数】14 名（スタッフ７名 一般学生７名）

【活動内容】

南阿蘇中学校では、中学 3 年生対象に受験勉強のサポートを行い、英語の基礎を教える小規模の授業も実施した。

南阿蘇西小学校では、学年別に分けられた 20 名ほどの各クラスに分かれ、午前中は児童の夏休みの宿題など学習のサポートをし、その後交流ゲームを行った。

寺子屋では約 20 名の生徒が参加し、スライム作りや、流しそうめんを行う他、勉強の指導やゲームをして過ごし、児童による『たこ焼きパーティー』などで交流した。

ちょうよう保育園では、年齢別に 20 ～ 30 人に分けられたクラスで、それぞれ子ども達の遊びや給食のサポートを行った。また、子ども達がお昼寝している間に先生方からのご依頼で、仮設住宅に設置予定の「みんなのポスト」の装飾をした。

学童保育には約 20 ～ 30 人の児童が来ており、午前中は学習指導をし、午後は遊んでいる児童を見守ったり、お迎えの時間まで一緒に遊んだりした。最終日には全員で学童主催の『お店屋さんごっこ』を行い、子どもたちとの距離をより縮めることができた。

【スタッフ所感】

教育支援に関しては、災害支援部のプロジェクトとしては初めての試みということもあり、手探り状態な部分もあった。しかし、宿題のサポートや授業をする際のコミュニケーションを通じて、次第に現地の子供たちとの距離が縮まっていき、より親密な関係を築くことができたのではないかと思う。参加者の方からは、今回の活動を通して再度南阿蘇村を訪れたいとの声を多数いただくことができ、今後の活動の大きな糧にしていきたい。

【参加者所感】

子どもたちが、私たちが来たことに心から喜んでくれたことが、一番印象的だった。また、今まで知ることができなかった地方の学校教育の現状を知ることができ、教育分野における都市部と地方の格差の問題意識が高まった。（中学校）

教育といっても様々な支援があり、勉強を教えるだけでなく、成長を見守ったり、寄り添うこともその一つであると感じた。今後は成果としては見えにくいが、教育やメンタル面の支援が必要になると感じた。（中学校、学童）

【今後の展望】

震災によって学習に影響を受けた子供たちの助けになることが実感できたため、現地のニーズに合わせて活動を継続していきたい。

知的障害者支援プロジェクト

【活動の背景、内容】

知的障害者幡ヶ谷教室（以下 GAYA）と知的障害者恵比寿教室（以下えびす青年教室）はどちらも知的障害者の余暇活動を運営するものである。いずれの活動もより多くのボランティアを必要とし、知的障害への理解を求めている。さらに、知的障害者が人間関係のなかでコミュニケーションをとり、人付き合いを学ぶことを目的としている。これらの活動に参加するなかで、我々は「知的障害者に対して持つ青学生の偏見を変えることで広い視野の獲得を目指す」という目標を持ち、参加者と 2 つの知的障害者教室をつなぐ架け橋となっている。

GAYA では 3 つのチームに分かれ、ジャンルにとらわれない活動を行う。主な活動のなかでは特に、料理や工作、音楽やダンスが人気である。また、5 月には運動会「ガヤリンピック」、9 月には「夏フェス」、12 月には「クリスマス会」など、季節のイベントが多いという魅力がある。

えびす青年教室ではけんこうクラブ、アートクラブ、カフェクラブの 3 つのクラブに分かれ、それぞれ活動を行う。また、社会教育館外で行う外出プログラムでは、博物館や美術館などに出かける。さらに、毎年 12 月には我々が主体となって「クリスマス会」を行う。

この 2 つの活動を通した我々の役割は、知的障害のある方と一緒に活動し、必要な場合に補助をするほか、活動の企画運営を行うことである。

【活動場所】幡ヶ谷社会教育館（知的障害者幡ヶ谷教室）、恵比寿社会教育館（知的障害者恵比寿教室）
【活動期間】毎月第 1 日曜日（知的障害者幡ヶ谷教室）、第 4 日曜日（知的障害者恵比寿教室）
【参加人数】約 15 名

【スタッフ所感】

知的障害者支援プロジェクトは地域連携部の中では古くから行っている活動であるため、GAYA やえびす青年教室に参加する知的障害のある方や、社会教育館の職員の方との距離が近い。加えて、参加すれば参加するほど交流が深まる活動である。他部の活動と違い長期的な活動となるため、成果の即効性はあまり感じることができないが、参加を続け様々な方と仲が良くなるにつれ、知的障害のある方の普段の生活や考え方、行動の特徴がわかってくる。その度に、今までの「障害のある方」という漠然としたイメージと、実際に共に活動をして得たイメージに違いがあることを痛感させられる。

また、GAYA やえびす青年教室に参加する知的障害のある方は、職場と家を往復する生活になりがちである。そのため、知的障害のある方との交流の中で、活動を毎回楽しみにしているという話をよく耳にする。我々が活動することによって急進的な変化が現れるようなことは少ないが、根気よく活動していくことに意味があるため、これからもより一層活動に励みたい。

【参加者所感】

活動のなかで、知的障害のある方が生き生きと参加している姿がとても印象的だった。知的障害のある方との接し方や距離感などがあまり分からなかったため、上手くコミュニケーションをとること

ができたかどうかに個人差が出来てしまったことが心残りであった。けれども、総じて活動を楽しく過ごすことができ、有意義な参加であった。

【今後の展望】

昨年度は GAYA、えびす青年教室ともに、一般青学生を募って活動することが少なくなってしまった。今後は一般青学生を募る回数を増やし、より多くの学生に自分の価値観を見つめなおす機会としていただきたい。また、月 1 回の活動回数や内容も一定しているものではなく、急激に変化がみられる活動ではない。しかし、少しずつでも進展があるように、長期的な変化を視野に入れつつ、よりよい活動を作り上げられるように努力したい。

地域清掃プログラム

清掃活動

【活動背景・内容】

この活動は地域連携部が継続して行っている活動の一つであり、青学生が日常的に利用する渋谷区のごみ拾いをする活動である。渋谷区ではごみ問題による環境悪化が問題視されており、これに対してどこか「汚い」というイメージを持っている人も多い。そのイメージを刷新するべく、今年度は「渋谷区をきれいな街 No.1 にする」という目標のもと活動を行った。1 年生が多いプロジェクトであったため、何か新しい取り組みをしようと最初の段階ではポイ捨てを抑制するための活動を考えていたが、今回は実現が困難であったため、目標達成に即効性があり地域連携部が例年行っているごみ拾いにシフトして活動するに至った。

【活動場所】渋谷区内
【活動期間】2018 年 1 月 20 日（土）
【参加人数】４名

【スタッフの所感】

実際に清掃活動を終えて、渋谷区をきれいな街にするためにはもっと多くの人の協力が必要であると感じた。実際の清掃では参加者とスタッフを合わせ 8 名で 2 つのルートに分かれて活動したが、土曜日ということもありゴミが多く人手が足りないと感じた。また場所によってゴミの多さや種類が違うということもわかったので次回の参考になった。活動中にはたくさんの通行人とすれ違い、少しではあるが関わりを持つこともできたため Roote の活動を渋谷区の利用者たちに知ってもらうことができたのではないかと考える。

【参加者所感】

実際にごみ拾いをしてみることによって落ちているゴミについて知ることができ、もっと拾いたいと思った。道路に落ちているゴミは拾うことができないため残念だった。次は液体物や細かいゴミを処理するためにもっと様々な道具（例　バケツ、塵取りなど）を持って活動を行うとより良いと考える。また、時間も計画どおりに動くことができ良かった。全体的に和やかに楽しく清掃できたと思う。魅力的な広報の方法を考えることでもっと多くの人に参加してもらえると考える。

【今後の展望】

今後は単なるごみ拾いではなく、魅力あるイベントを付随させることで気軽に多くの青学生に参加してもらえるようにしたいと考える。また、より多くの青学生がボランティアに参加する機会を得られるように定期的に開催することも考えたい。そして、当初考えていたポイ捨てを抑制する活動の実現についても視野に入れて活動していきたい。

食品ロスプログラム

【活動背景・目的】

セカンドハーベスト・ジャパン及び初台青年館での活動は、青学生の食品ロスに関しての知識や理解を深め、最終的にはその量を減らしていこうとするものである。現在、日本では一人当たりが出す食品ロスの量はとても多くなっている。そこでこの問題に対し、我々学生も積極的に取り組むことが必要だと考え、活動を実施している。

食品ロス問題は温室効果ガスの排出等、地球環境につながる大きな問題である。また、世界及び日本には金銭面の理由等により、食べたくても食べられない状況下にある人々は多くいる。しかしながら、この問題を認知している人は少ない。私たちがこの活動に取り込むことにより上記のような状況の改善を試みることが大切だと考える。

セカンドハーベスト・ジャパン、初台キッズテーブル（しぶやこどもテーブル）共に渋谷キャンパスから比較的行きやすい場所にあるため、地域部の目的に適った活動が可能であり、周囲の人々からこの活動を広めていくことができると考えられる。

【活動場所】 台東区浅草橋セカンドハーベスト・ジャパン、 渋谷区初台青年館

【活動期間】 セカンドハーベスト・ジャパン：８月５日（土）、８月 11 日（金）、12 月 16 日 (土)
初台キッズテーブル：1 月 18 日（木）

【参加人数】 ４名

【活動内容】

セカンドハーベスト・ジャパンでの活動は主に、路上生活者を対象とした食事の提供、事務所に届く食品の仕分け、食材の調理などがある。その他様々な活動があり、曜日ごとに活動内容が決まっている。そのため多くの活動を体験することができる。どの活動においても限られた時間の中で多くの仕事をする必要があるため、周囲の人々と役割分担をすることが重要になってくる。

初台青年館での活動は、フードドライブで集めた食材を調理し、子供たちやその両親に無料で料理を提供することだ。盛り付け方など細部まで丁寧に行うことが必要である。多くの料理作り、提供した後はすぐに後片付けを行うことが必要となってくるため、自分のやるべき活動を見極め、しっかり行うことが必要となってくる。活動後には他のボランティアの皆さんと食事をしながら反省会を含めた交流を行い、次回の活動につなげている。

【スタッフの所感】

食品ロスにつては事前に調べていたが、実際に活動をしてみると新たに発見するところが多かった。自分たちの身近にもまだまだ食べることができる大量の食材や、それを必要とする人々が想像していたより多くいるということを目の当たりにし、食品ロス問題への味方が変わった。また、実際に普段から食品ロスに対して働いている人からお話を伺うことで現場の声を聞くことができ、それを他の学生を始めとする人々に伝えたいと改めて感じられた。

活動はどれも初めて参加するもので、イメージがつかなかったが、初めは現地のスタッフさんが手

引きをしてくださり、そのためその後どのように動くべきかを自分たちで考えながら行動することができた。

廃棄された食料を扱うだけでなく、料理したものを実際に人々に提供することは、フードドライブでこんなにも身近な人々を助けられるのだと気づかされた。ましてやまだ食べられる食料を捨てるという自分たちの普段の何気ない行為は、どんなに勿体無いことをしているのかと気づくきっかけとなった。

【今後の展望】

食品ロス問題についてより多くの人に認識してもらうために、ドギーバッグの製作・普及を始め、食品ロスに関するイベントの開催など多方面からのアプローチを検討している。

ネパールプログラム

清掃活動＆衛生教育プロジェクト

【活動背景・目的】

ネパールでは土に還るごみが主流であったこともあり、以前から「ごみをごみ箱に捨てる」習慣がなかった。しかし、近年外国からプラスチック製品が大量に入ってきたことで、土に還らないごみのポイ捨てが増加し、路上や川沿いに捨てられた大量のごみが問題視されている。加えてネパールでは都市部・農村部に関わらず、衛生状況が良くない現状がある。特に農村部では、衛生環境に関する意識が低く、感染症や寄生虫による身体被害が多数発生しやすい。以上のことから現地の未来を担う学生に環境や衛生に関する意識を見つめ直してもらうことを目的に活動を行った。

＜2017 年春期活動＞

【活動場所】ネパール、カトマンズ市内

【活動期間】2017 年 2 月 21 日（火）～ 3 月 4 日（土）

【参加人数】6 名

【活動内容】

今年度の活動は、現地高校三校を対象にした Clean Up Campaign（以下 CUC）と、現地小学校 3 校を対象にした衛生教育を行った。

昨年度までは大学生を対象にしていた CUC は、今年度は高校生を対象とし、学校周辺のごみ拾い、事前・事後アンケート、ごみ問題に関するディスカッションを行った。また CUC の一環として、カトマンズ市役所が主宰するバグマティ川の清掃活動にも参加した。

衛生教育では小学生に衛生状況を改善する意識を持ってもらおうと、絵本を使った説明、手洗いダンスのレクチャーを行った。

【スタッフの所感】

・清掃活動は、中学生を 15 人程度のグループに分け、それぞれにスタッフが分かれて様子を見た。取り組む姿勢は学校ごとに多少のばらつきはあったものの、去年の活動時よりも自分の地域をきれいにしようとする積極的な発言・姿勢が感じられた。中学校とのかかわりは、必然的に学校の教職員も巻き込むことになるため、生徒と同時に大人に対しても問題の啓発となった。

・衛生教育を行った 3 つの小学校はどれもカトマンズ市内の学校であったが、ターゲットである各学校とその児童生徒たちの反応は学校ごとに異なっていた。

山間部の小学校では、特に貧しい家庭から通う生徒が多く、勉強もやや遅れているということを学校の職員が話していた。また、未就学児も多く受け入れており、英語が理解しきれない生徒が多かったため、協力していただいた NPO の職員の通訳を介さないと紙芝居などの理解は出来ていないようだった。他の学校での反応は良く、手洗いダンスでネパール民謡が流れると嬉しそうに歌っていた。

このように、カトマンズ市内をとっても小学校の教育レベルや家庭の経済状況にはばらつきがあ

り、国の経済格差や貧困といった問題を直接感じるものとなった。

【参加学生所感】

「CUC や衛生教育を通じて、普段の自分を自省出来たことが一番の収穫だと思う。活動中に、自分はきちんとごみの分別や手洗いが丁寧に出来たかなどを考えることが出来た。以前私は、ボランティア活動に対して啓発的な側面に目が行きがちで、それが故に拒否反応を示していた。しかし、実際の活動で指導することを通して自分の生活を振り返ることにも繋がった。自分の行動を見直せる機会を作れたことが、この活動に参加して一番良かったことである。」

【今後の展望】

CUC に関しては今後も同じ規模でより効率良く結果を出せるような方法を取り入れていきたいと思う。具体的には場所または地域ごとにゴミが出た量（1 袋 =6kg）と土に還るゴミと土に還らないゴミの割合などを地図にグラフを用いて記録し、それに加えて、その地図にゴミの出処である事業所、露店、売店等も追加してマーキングし、どこにゴミが集まりやすいのかも分析してゴミがどこに多く落ちているかをある程度予測してゴミの回収を効率化する方法をとる。

衛生教育は今回の活動規模と同等のスケールで活動してきたい。希望ではあるが、今後は日本でチャリティーイベントを開いて寄付の資金を集めるなどの活動もしていきたい。

＜ 2018 年春期活動＞

【活動場所】ネパール共和国・首都カトマンズ

【活動期間】2018 年 2 月 3 日（土）～ 2 月 14 日（水）

【参加人数】9 名

【活動内容】

清掃活動（Clean up Campaign）ではカトマンズ市内の中学校を 1 日 1 校、計 3 校訪問し、市役

所の協力のもと、学校周辺のゴミ拾いとその前後に行うディスカッションを通して、カトマンズのゴミ問題と現状とこれからについて考えた。

一方、衛生教育ではネパールでは未だ正しい手洗いの習慣が子どもたちに根付いておらず、手を衛生的に保つことで防ぐことのできる病気などにかかるリスクが高いことから、カトマンズ市内の小学校を1日1校、計3校訪問し、現地NGO団体Food For Life Nepalの協力のもと、手洗いについての指導を行った。手洗いを促す紙芝居を読み聞かせし、ネパールの民謡「レッサムフィリリ」に合わせて手洗いダンスを踊り、正しい手洗いの手順を学ぶ。一緒に正しく手洗いを行った後は、Food For Life Nepalの活動である給食の配膳を行った。

【スタッフの所感】

・私たちが訪問した学校はすべてゴミ問題に関する教育に力を入れている学校だったのもあり、思っていた以上に生徒たちの意識が高かったことに驚いた。生徒たちのゴミ拾いやディスカッションに積極的に参加する姿をみて、自分たちの置かれている現状を把握し、改善しようという意思が見られた。カトマンズのゴミ問題の根本的原因は子どもたちではないが、生徒たちからゴミへの意識が広まってくれたらと思う。（清掃活動）

・現地の協力者によると、現在カトマンズには子どもたちへ手洗いを促す掲示物や指導が行われているそうだったが、私たちの訪問した公立校ではあまり浸透しているようには感じられなかった。紙芝居も手洗いダンスも子どもたちは非常に楽しんでくれて、正しい手洗いの手順をしっかり覚えてくれた。また、今回は都合がつかず給食の配膳は1校のみだったが、FFLのオフィスを訪問し聞いた話はネパールの社会的状況を知ることができて非常に勉強になった。（衛生教育）

【参加学生所感】

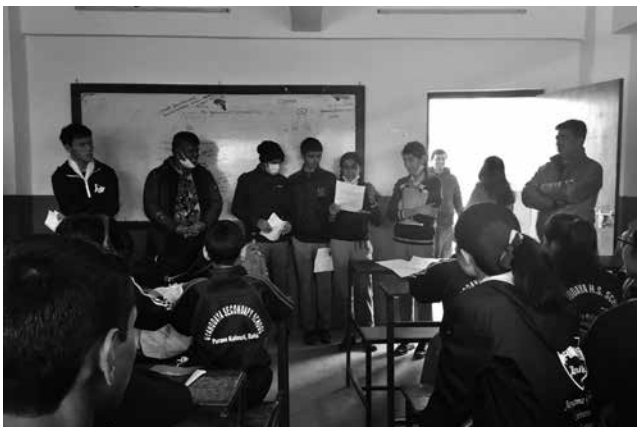
・現地の中学生のゴミに対する意識の高さに驚愕した。彼らの積極的に活動に参加する姿を見て、ゴミに対する意識改革が必要なのは中学生ではなく、むしろ大人の方であると感じた。活動を通して、カトマンズにはあらゆるところに個包装のお菓子などを販売している露店があるのに対して、町中にゴミ箱がほとんど無いことに気づいた。ゴミを家に持ち帰りたくないという思いから道にポイ捨てしてしまうこの現状も、ゴミ箱が設置されれば改善されるのではと思った。（清掃活動）

・私たちが実施したクイズは、日本の小学生であれば正解がすぐに分かるような簡単なものだったが、教員が正解に誘導して子どもたちが答えを出している姿を見て改めて手洗いの意識の低さを実感した。清掃活動のあとの軽食の時に、中学生でさえ手洗いをせずに手づかみで食べている生徒がいるのを目の当たりにして、手洗いが浸透してほしいとより強く思った。（衛生教育）

【今後の展望】

清掃活動については今回の訪問で、今後の活動に関する話を市役所の方とする機会をいただいた。市役所の方によると、これからカトマンズ市役所の取り組みとして、子どもたちへのゴミ問題に関する指導へ力を入れるそうなので、そこに私たちも何らかのかたちで協力したい。より広い範囲で活動をしたいと思う。

また、衛生教育では現地で改めて手洗い指導の必要さを実感したので、この活動は継続していきたい。



NDARY SCHOOL
+2 SCIENCE
MANAGEMENT
COMPUTER

インドネシアプログラム

教育支援プロジェクト

【活動場所】インドネシア　バンテン州南タンゲラン
【活動期間】2017 年 8 月 11 日（金）～ 8 月 21 日（月）
【参加人数】4 名

【活動内容】

今回の活動では前回の活動内容の主軸である防災・衛生・栄養・喫煙からさらに的を絞り、防災と衛生の二つを柱として教育支援を行った。

まず防災の授業、地震大国ワースト１という状況にありそれを知りながらも防衛策をしらない子供たちに、地震が起きた際取るべき行動や、避難場所として適する場所やそうでない場所の確認そして非常時に役立つような簡単なグッズを子供たちと共に作成した。

衛生の授業では、インドネシアのポイ捨てや杜撰なごみ処理の現状から、彼らと共に何故ポイ捨てをしてはいけないのか、どうしてポイ捨てがなくならないのかといった根本的な解決策を、他国のユニークなアイデアを用いながら現状を解決するための意見交換をした。

また各授業後には、日本のカルチャーを伝えるため、生徒の名前に漢字を与えるなどして文化交流も楽しんだ。

【スタッフ所感】

今年度私たちは、前年度スタッフ２名と新スタッフ２名の計４名で現地での活動を行った。昨年度までのホームステイという形をなくしホテル泊になった事や、前年度から更にテーマを絞るなど試行錯誤を強いられる日々ではあったが、これまで先輩方がつくりあげてこられたプロジェクトを成功させるために大きな意味を持つものとなった。今年度のプロジェクトでは大きな怪我や事故等なく無事に終了まで導くことが出来たことは我々に大きな達成感と充実感を生み出した。この経験を次の活動に活かしていきたいと強く感じている。また JOC（ジャカルタお掃除クラブ）の皆様をはじめ、学校関係者そして私たちを受け入れてくれた生徒達。多くの人の手助けなしに、今回の成功はなかったと深く感じている。

【今後の展望】

インドネシアプロジェクトは今後も教育支援を行っていきたいと考えている。２０１８年度の活動では今回の活動より更に的を絞った衛生のみをテーマにより深い内容を現地の高校生たちと考えていきたい。

そして今年度は、我々が彼らに教えるのではなく、彼らが自分自身で気づく、また気づかせる事が出来るような授業を展開していきたいと考える。

また今回訪問した中学校には教育支援のみだけでなく、教室内の壁の塗装や、黒板の修繕など物資的な援助も行う予定だ。

MALU
BUANG
SAMPAH
SEMBARANGAN

フィリピンプログラム現地調査

【活動背景・目的】

5年間シキホール島において、小学校を訪問し、ソーラン節を通じた異文化交流、衛生教育や科学実験などを行ってきた。ソーラン節はほとんどの学校に広がり、大会を行った。そこで一旦区切りをつけ、新たなプログラムを企画することとなった。5年に渡ってプログラムを実施してきた活動場所に再び訪問し、前活動についての成果を確認するとともに、新たな活動候補地で子供の貧困に関する調査を行い、2018年度のフィリピンプログラムの土台を作ることを目的とし、視察を行った。

【活動場所】フィリピン、セブ島、シキホール島内
【活動期間】2018年2月4日（日）～2月9日（金）
【参加人数】2名

【活動内容】

今回はセブ島とシキホール島の二か所を視察した。

セブ島では、DAREDEMO HEROさんの協力の元、貧困地区、スモーキーマウンテンの視察、DAREDEMO HEROさんの奨学生との交流、貧困地区への炊き出し、衛生教育を行った。衛生教育は学生スタッフが手洗いの歌のレクチャーを行った。

シキホール島では、Can-Asacan elementary schoolに訪問し、日本のおもちゃを通じた交流、また、先生方とお話をし、現地のニーズ調査を行った。

【スタッフの所感】

・同じ国内でも現地のニーズが全く異なると実感した。セブ島では、高級住宅街に一つ取り残された貧困地域があり、そこは水や電気の通らない、ゴミが散乱しているなど、劣悪な環境である。このような環境においても暮らしている人々が毎日笑顔で暮らしていることに驚いた。勉強どころか生きていくことさえ大変な生活をしているのにDAREDEMO HERO様の奨学生が目を輝かせて夢を語る姿には感動した。
シキホール島では小学校一校しか訪問していないので、島の中心地と山奥との学校でのニーズの違いを学ぶことができなかったのが心残りだ。まだ学習環境が整っていない学校や栄養不足の子供もいるなど、差が生まれているため、支援していく必要があると感じた。

・セブ島での活動はNGO団体DAREDEMO HERO様の協力のもと貧困地区の視察、炊き出し等を行った。日本にもある大型ショッピングモールが存在するような街の中にも、トイレも電気もない地域があり、貧富の差の問題を痛感した。現地の人々は陽気な人が多く、一見一人暮らしに大きな不満を抱えていないようにさえ感じられたが、衛生的・教育的な差問題は大きい。
全活動地のシキホール島では、一つの小学校に一日滞在し、現地の生活の流れを体感した。前回の活動から1年以上が経過していたが、ソーラン節を覚えている子供も多く、現地コーディネー

ターの協力もあり、我々をとても好意的に受け入れてくれた。小学校にもよるが、保護者協力による休職制度導入や救急箱の設定等、以前活動していたところと比べると学習環境も改善しつつある。しかし、子供たちの服や昼食等での差が生まれつつもある。

二つの地を訪問し、今回知ることができたこと、作り上げてきた現地とのつながりをより大きな輪にして多くの人に知ってもらう必要性を感じた。

【今後の展望】

プログラムを企画するにあたり、今回の視察で感じたことをスタッフで共有し、現地のニーズを考える必要がある。セブで行った衛生教育はスタッフの準備不足もあり、上手く伝えることができなかった。また、貧困地区では英語も伝わりにくいことも考慮し、衛生教育を行う必要がある。また、シキホール島ではモリンガを販売し、その売り上げを小学校の学習環境の向上のために使われるということなので、学食とコラボするなど大学内でできる活動も取り入れ、支援をしていきたい。

M4R プロジェクト（難民支援プロジェクト）

【活動内容・背景】

青山学院大学の 17 号館学生食堂にて、難民の故郷の味を再現したレシピ集『海を渡った故郷の味 Flavors Without Borders』に掲載されているレシピの中からいくつかのメニューを提供する。今回はビルマ風きな粉入りサラダラーメンとパキスタン風炊き込みご飯を提供した。提供価格のうち 20 円を NPO 法人難民支援協会に寄付し、在日難民への支援に役立てる。

【活動場所】青山学院大学 17 号館学生食堂および学内各所（チャリボン）

【活動期間】

チャリボン：2017 年 10 月 2 日（月）～ 10 月 27 日（金）
学食導入第一弾：2017 年 10 月 5 日（木）～ 10 月 6 日（金）
（ビルマ風きな粉入りサラダラーメン）
学食導入第二弾：2017 年 10 月 10 日（火）～ 10 月 12 日（木）
（パキスタン風炊き込みご飯ビリヤニ）
難民ワークショップ実施：10 月 10 日（火）

【参加人数】

チャリボンプログラム：スタッフ 21 名＋一般参加者（古本寄贈者）
学食導入プログラム：スタッフ 21 名＋参加者 285 名（メニュー購入者）　計 306 名
ワークショッププログラム：スタッフ 10 名＋参加者 20 名　計 30 名

【スタッフの所感】

学食導入プロジェクトでは、合計で昨年の販売実数を超える食数を売り上げることができた。メニューを購入してくれた学生の多くから、このような難民支援の活動に、次回も参加したいという声をいただくことができた。しかし、学内での活動の認知度はいまだ低く、学食で難民の郷土料理を食べることで、より難民への関心を深めてもらえるよう取り組みを向上させていく必要がある。

【今後の展望】

このプログラムは国際協力部のスタッフが他のプログラムと並行して活動を担ってきた。しかし、本来なら難民問題に強い関心を持つスタッフが主体となって活動することが望ましい。国際協力部の枠にとらわれることなく、部を超えて難民支援に携わりたいスタッフ、もしくは一つのプログラムとして独立し、三スタッフがプログラムを担っていけるように体制を見直していく必要がある。

【学食導入メニュー一覧】

・ビルマ風きな粉入りサラダラーメン
・パキスタン風炊き込みご飯ビリヤニ

【チャリボンプロジェクト】

学院内で回収された古本は査定され、その査定金額を難民支援協会に寄付された。

今回の活動では 206 冊回収することが出来その結果 4089 円集めることが出来た。具体例として、3000 円があれば成田空港に出向き、難民と面会することができ、5000 円あれば家のない難民に 3 泊の宿を提供できる。

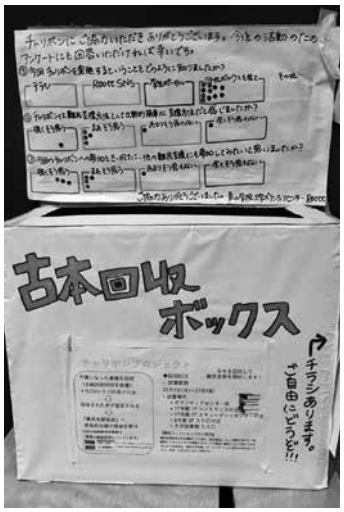
今回このプロジェクトに携わったスタッフからは、私たちの活動する意味はお金だけじゃない、お金以上に難民について認知してもらう力にあるのではないかという声が上がった。資金面で支援できることに越したことはないが、知らなくては支援すらできないということを改めて実感した。

日本においての難民支援率が高くないことは、私たちが難民について知る機会が少ないことが根底にある。このプロジェクトが未来を担う青学生に難民について知ってもらい、そこから何か行動を起こすきっかけとなればと思う。

【M4R スタッフ所感】

ワークショッププロジェクトでは、参加してくれた学生全員が真剣に講師の方のお話に耳を傾けてくれた。グループワークでも活発に意見が飛び交っていて、参加者の関心度の高さが伺えた。チャリボンプロジェクトでは、今年度初導入にも関わらず、合計 184 冊の本を集めることができた。「身近」に難民を支援できることを実感してもらえた活動だったのではないかと思う。

全体の課題としては、今後スタッフが自ら難民について理解を深める機会を増やしていく必要がある。



青山学院大学同窓祭出展

【活動場所】青山キャンパス記念館
【活動場所】2017 年 9 月 23 日（土）
【参加人数】30 名
【活動場所】青山学院大学 17 号館学生食堂および学内各所（チャリボン）

【活動内容】

青山学院大学同窓祭（AOYAMA GREEN FESTIVAL）は、今年度で 24 回目の開催となる、本学の卒業生を中心に行われる学園祭だ。本同窓祭では、400 を数える参加団体に加え、公開講座やステージでのパフォーマンス、キッズパークなど幅広い世代に楽しむことが出来る企画が多くあり、約 2000 人の参加者を迎えている。

昨年度に続き、今年度も夏期の活動で訪れた熊本県南阿蘇村、宮城県塩竈市と岩手県陸前高田市各地の名産物を販売した。また、現地の方々に本学までお越しいただき、商品の魅力を来場したお客様に直接伝えて頂いた。販売を行う際には試食や試飲を実施し、より多くのお客様に来場していただけるように努めた。それと同時に、私たちがどのような団体であるか、プログラムごとの活動内容をまとめたパンフレットを配布した。本団体の活動内容を卒業生や外部の方々など、より多くの人に知っていただけるように広報活動も行った。

このように、私たちが活動している地域の名産物を販売し、現地の方々の協力を通じて、直接その商品の魅力を発信することにより震災や復興の事を考えていただきたい。また、その地域に少しでも興味や関心を持ってもらい、現地に訪れたいと思うきっかけになってほしいという思いで活動している。

【スタッフの所感】

私は今回初めて同窓祭に参加した。販売を開始する前の準備で、商品をどのように並べたら見やすいか、手に取りやすいかなどを考えながら、各地域の名産物を出来るだけ 1 カ所にまとまるように配置した。そのような工夫があったため、よりスムーズに販売することが出来たと思った。また、朝早くから多くの方々に足をとめていただき、商品を購入してくださり、午前中に品薄になった商品もあった。このほかにも、同窓祭を通じて、自分が所属しているプログラム以外の名産物に触れたことにより、その地域に興味や関心を持つことが出来た。さらに、販売している際に、「去年もこの商品を購入しました」、「これ去年も買ったけど、すごくおいしかった」などといった声をいただき、とてもやりがいを感じると同時に、今後もこのような活動を続けていきたいと感じた。

【今後の展望】

今回の同窓祭では熊本、塩竈と陸前高田の名産物を販売したが、来年度以降は Roote が活動している国や地域の名産物を販売し、団体全体として、同窓祭に関わっていきたい。また、パンフレットの配布のみでなく、各プログラムで行っている活動の展示会等を開くことにより、多くの方々に弊団体や弊団体が行っている活動について知っていただくと共に、震災について考えていただくよいきっかけになると思った。

【販売商品一覧】

（熊本）
・イチゴジャム

（塩竈）
・干物（赤魚、ほっけ、金目鯛、吉次、さば）
・おとうふかまぼこ（ミニ、しょうが、お好み焼き）
・生どら（小豆、栗、ラムレーズン、ごま）
・もっちりさつま
・玉ねぎ坊主
・いかたこ坊主
・枝豆あられ
・ばくだん
・ずんだロール

（陸前高田）
・りんご
・奥州米ひとめぼれ
・りんごジュース
・はと麦ペットボトル
・トマトケチャップ
・トマトピューレ
・ピクルス（大、小）
・トマトジュース（アイコ）
・野菜（アスパラ、ピーマン詰め放題、菌床しいたけ、たまねぎ、自根きゅうり、なす）
・シフォンケーキ（ノーマル、オレンジ、ゆず、紅茶）

卒業生報告

【大山明】文学部日本文学科　2016 年度学生代表

「光陰矢の如し」という言葉がある通り、私の大学４年間、特にこの団体に入った大学２年生から卒業までは瞬く間に過ぎ去ってしまったと感じています。それも偏にこの団体のおかげだと言い切れる自信があります。

私と弊団体の出会いは大学１年生の夏でした。私ののんべんだらりとした生活の傍ら、同輩の今野友彰（当時の東北部）は弊団体に所属し、東北の復興の力になろうと日々奮迅していました。そんな今野から「ボランティア説明会やっているから､暇なら来てよ｡」と声を掛けられ説明会に参加すると、いくつかの夏期ボランティアの説明を受けました。面白そうだから行ってみるか、その程度の気持ちで弊団体が企画したプロジェクトの一つ、“伊豆大島プロジェクト”に参加することを決めました。２泊３日のボランティアを通じて、純粋にボランティアって面白いものなんだなと感じました。そして何よりも、プロジェクトを企画した当時の地域部の人たちと何か一緒にやり遂げたい、そう思い次の年に弊団体に加入しました。

私がボランティアを始めたきっかけは、大学１年生から弊団体でボランティアに邁進してきた人たちに比べて、お世辞にも殊勝なものとは言えません。ボランティア活動に「とりあえず行ってみるか」程度のものでした。そんな私が弊団体で頑張ってこられたのも、一緒に頑張りたいと思わせてくれた仲間たちのおかげに他なりません。本当に貴重な経験を大学時代にさせてもらったと思っています。そして、そのきっかけを作ってくれた今野にはこの場を借りてお礼を言わせてもらいたいです。

最後になりますが、少しでも後輩の助けになるように、現地の方々の助けになるように、私が得てきたボランティアの経験を道標の一つとして残していきたいと思います。

ボランティアとは何か。自分のやりたいこと、相手がやってもらいたいことを探求することだと思います。ボランティアに正解なんてものはありません。しかし、逆に言えば不正解もないのではないでしょうか。何が正解か不正解かわからない中で、迷っては進み、進んでは迷い、どうにかこうにか踏み出した一歩一歩がボランティアとして形になっていくのだと思います。私にとってのボランティアは“楽しさを追求する旅”でした。自分が楽しまなければ相手を笑顔にすることなんて絶対にできません。それならまずは、自分が楽しめるようにしよう、そう強く信じて活動してきました。どうか弊団体が、より多くの人を笑顔にできるよう祈っています。

【久保田明香】法学部法学科　2015, 2016 年度渉外課リーダー

大学に入学した当時の私は、自分がボランティアに携わるなどとは予想もしていませんでした。大学４年間のうちに１度は東北を訪れたいと思っていたこともあり、軽い気持ちで面接を受け、弊団体に所属することとなりました。始まりはそのような形でしたが、弊団体に所属しなければできなかった経験や出会いがあり、多くを学ぶことができたと思っています。活動を通して関わった方々には感謝の想いしかありません。

活動の中で悩むこともたくさんありました。それは後輩の皆さんも同じはずです。ボランティア・ステーションから Roote へと組織が変わり、私たちとは違う大変さも感じていると思います。うまくいかないときは周囲の力を借りること。学生にできることは限られていると自覚し、その中で自分

たちの行動に責任をもって努力すること。活動を支えて下さる方々へ感謝することを忘れず、1人1人が、そしてRooteという団体が成長していくことを願っています。

【媚山泉】経済学部経済学科

在籍時は主に塩竈プロジェクトにて、島での農作業や漁業のお手伝いに携わりました。活動していた当事の頭の中は、力不足で毎回反省ばかりだった気がします。しかし時間が経った今、一番に頭に浮かぶのは、活動を通してお世話になった島の方々の言葉や、楽しかった思い出です。私は、他人のためにやることが自分のためにもなれば良いと思いますし、ボランティアだからといって堅苦しくならず、楽しんでもいいと思っています。今後活動していくスタッフも、引退後に当事を思い出した時、「大変だった」よりも「楽しかった」と思えるものになっていたら嬉しいです。４月から社会人（になれているはず）ですが、進化していくRooteをひそかに応援しています！

【今野友彰】文学部日本文学科　2015, 2016年度塩竈プロジェクトリーダー

「自分のやりたいことは何か」。ずっと分からずにいた自分が脇目も振らずに夢中になれたのがこのRooteでのプロジェクトであり、将来やっていきたいことや軸が見つかったのも弊団体での日々からでした。

東北出身という境遇から、僭越ながらも東京で現地のための行動をしていく中で感じたことがあります。それは学生には「きっかけ」が大切ということ。それが自分にとっては塩竈市でのプロジェクトを持ったことであり、一般学生からするとRooteの活動に参加することだと思います。学生のうちに様々なことに取り組み、考え続けることで多くの機会や経験を得ることができましたが、私にとってそのきっかけであり原点はこの団体です。そしてプロジェクトに参加してくれた学生がこの機会を自分の「きっかけ」として消化し、将来に繋げていく姿勢やアクションを見たとき、私が将来やりたいことも見えました。様々な人の人生やキャリアに良い影響やきっかけを与えていくことが、自分のやりたいことであり、やれることであり、やるべきことだと。

そういったきっかけや思いを現地と学生の間に入りリンクさせていくこの団体では、大変なことや辛いことも多々あります。私も時として膨大なタスクやなかなか先が見えない中で漠然とした不安と隣り合わせの日々でした。それでも最後までやり抜いたときのやりがいや成長は、普通の学生では得られないものがあったと思います。

これも縁なのか巡り合わせなのか、新年度からは仙台で働くことになりました。この４年間で得た軸や経験、適度な自信を持って社会に出ていきたいと思います。最後に、４年間を通してお世話になった本当に多くの方々に感謝申し上げます。

※弊団体で学んだことや考えていたことは日経カレッジカフェでの連載等でまとめておりますので、ぜひご覧ください！

【弘光梨奈】文学部英米文学科　2016年度東北部リーダー

ボランティア・ステーションに所属した４年間、様々な地域でボランティア活動に取り組む中で痛感したことは、自分ひとりの力で出来る事の小ささでした。

４年間自分なりに最善を尽くし、全力で取り組みましたが、結果どれほど活動先のためになってい

たのかは分かりません。自分の無力さに途方に暮れる時もありました。一方で、沢山の人とともに取り組んだ時、想像以上に大きな結果を生み出せること、可能性が広がることを学ぶ事も出来ました。

ボランティアは成果が目に見えるものではなく、自分が行なっていることが誰かのためになっているのか不安になる時もあります。それでも多くの仲間と協力した時に生み出せる力の大きさ、大切さを社会に出てからも忘れずにいたいと思います。

ボランティア・ステーションから青山学院大学ボランティアセンター学生スタッフ Roote と新体制になり、既存の活動に加えて新しい事にも挑戦しながら活動は続いていくと思います。学生スタッフのみなさんは、困難や乗り越えなくてはならない壁に立ち向かう時もあると思いますが、何事もひとりで解決しようとせず、周りの人たちや仲間を頼り、大事にして、これからも活動を続けてください。応援しています。

【星野桃子】教育人間科学部教育学科　2016 年度広報課リーダー

4 年間、様々な地域で、様々な形でボランティア活動と関わる中で実感したことは、私たちにできることの小ささです。だからといってボランティア活動をする必要がない、というわけではなく、何かを変えたいという思いを形にすることの大切さ、そして難しさも同時に学びました。これからもどんどんと社会が変わっていく中で、その中で自分がすべきこと、できることに敏感であり続けたいという気持ちになれたことは非常に大きな学びだったと思っています。

ボランティア・ステーションからボランティアセンター学生スタッフ Roote へと体制が変わり、Roote スタッフの皆さんは、今までよりもさらに大きく、幅広いことに挑戦していくことになると思います。ですが、謙虚な姿勢を忘れず、自分たちのやっていることを信じすぎず、想像力を働かせながら、これからも真摯に活動に向き合っていってもらえたらと思います。

5. 資料

5. 資料

5.1 ボランティアセンター利用状況

2017 年度ボランティア参加者について（ボランティアセンター集計）

参加者数とリピーター数

（単位：人）

延べ人数	417
人数	307
リピーター	76

参加カテゴリー

（単位：人）

活動	325
座学	38
スタディツアー	54
総計	417

参加者の属性（所属学部等）と活動分野

（単位：人）

活動分野 所属	災害・復興支援	国際協力	清掃	福祉	教育	その他	総計
学部生	**198**	**52**	**50**	**39**	**8**	**48**	**395**
文	**50**	**16**	**9**	**5**	**5**	**21**	**106**
英米文	17	13	3	1	4	5	43
日本文	17	2	3	4	–	2	28
日本文	4	1	1	–	1	10	17
比較芸術	11	–	–	–	–	1	12
史	1	–	2	–	–	–	3
科目等履修生英米文	–	–	–	–	–	2	2
交換留学生	–	–	–	–	–	1	1
国際政治経済	**31**	**11**	**5**	**5**	**–**	**5**	**57**
国際コミュ	8	3	3	–	–	1	15
国際経済	9	1	1	1	–	2	14
国際政治	14	7	1	4	–	2	28
教育人間科	**29**	**4**	**2**	**13**	**–**	**3**	**51**
教育	23	4	–	3	–	3	33
心理	6	–	2	10	–	–	18

総合文化政策	**18**	**–**	**6**	**7**	**1**	**2**	**34**
総合文化政策	18	–	6	7	1	2	34
法	**23**	**–**	**2**	**4**	**1**	**3**	**33**
法	23	–	2	4	1	3	33
経営	**11**	**2**	**9**	**2**	**–**	**5**	**29**
マーケティング	2	–	3	–	–	1	6
経営	9	2	6	2	–	4	23
経済	**10**	**1**	**13**	**1**	**1**	**3**	**29**
経済	8	1	12	–	1	3	25
現代経済デザイン	2	–	1	1	–	–	4
地球社会共生	**6**	**17**	**–**	**–**	**–**	**2**	**25**
地球社会共生	6	17	–	–	–	2	25
社会情報	**11**	**1**	**4**	**2**	**–**	**–**	**18**
社会情報	11	1	4	2	–	2	18
理工	**9**	**–**	**–**	**–**	**–**	**4**	**13**
化学・生命科	–	–	–	–	–	1	1
機械創造工	1	–	–	–	–	1	2
経営システム工	4	–	–	–	–	1	5
物理・数理	4	–	–	–	–	1	5
大学院生	**6**	**1**	**–**	**1**	**1**	**2**	**11**
国際マネジメント研究科	**2**	**1**	**–**	**1**	**–**	**1**	**5**
国際マネジメント専攻	1	1	–	1	–	–	3
国際政治経済学研究科	**4**	**–**	**–**	**–**	**1**	**–**	**5**
国際経済学専攻	–	–	–	–	1	–	1
国際政治学専攻	4	–	–	–	–	–	4
法務研究科	**–**	**–**	**–**	**–**	**–**	**1**	**1**
教員	**2**	**–**	**–**	**–**	**–**	**–**	**2**
教育人間科	**1**	**–**	**–**	**–**	**–**	**–**	**1**
非常勤講師	**1**	**–**	**–**	**–**	**–**	**–**	**1**
職員	**3**	**–**	**6**	**–**	**–**	**–**	**9**
教務課	**3**	**–**	**–**	**–**	**–**	**–**	**3**
相模原事務部学務課	**–**	**–**	**2**	**–**	**–**	**–**	**2**
学生生活課	**–**	**–**	**1**	**–**	**–**	**–**	**1**
相模原事務部進路・就職課	**–**	**–**	**1**	**–**	**–**	**–**	**1**
中等部	**–**	**–**	**1**	**–**	**–**	**–**	**1**
空白	**–**	**–**	**1**	**–**	**–**	**–**	**1**
総計	209	53	56	40	9	50	417

ボランティア情報取り扱い数

1. 団体登録件数

団体登録数

2017 年度新規登録	71 団体
登録総数（2016 年 10 月～）	82 団体

2. ボランティア等募集件数

ボランティア募集等総数：346 件

月別ボランティア等募集件数

（単位：件）

月	件数
4	43
5	40
6	43
7	28
8	13
9	21
10	36
11	31
12	24
1	32
2	22
3	13

月別ボランティア等募集件数

（単位：件）

カテゴリー	件数
ボランティア募集	158
ニュースレター	82
講座・セミナー	35
イベント	33
助成金情報	7
その他	31

2017 年度ボランティアセンター利用状況

1. 月別来場者数

（単位：人）

	青学生		教職員		他大学生		一般		合計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
4月	12	29	5	5	0	2	4	5	62
5月	5	17	1	1	0	0	9	2	35
6月	9	15	0	0	2	0	2	3	31
7月	6	11	0	2	0	0	4	1	24
8月	0	1	0	0	0	0	1	0	2
9月	1	8	0	1	0	1	4	2	17
10月	10	26	1	3	0	0	0	3	43
11月	2	8	0	0	0	0	4	0	14
12月	3	7	3	2	1	0	6	1	23
1月	7	6	2	0	0	0	3	5	23
2月	2	1	0	0	0	0	0	1	4
3月	0	1	0	0	0	0	1	4	6
合計	57	130	12	14	3	3	38	27	284

2. 相談件数

（単位：人）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
4月	4	2	0	1	0	0	0	0	5	12
5月	7	1	0	0	0	1	0	0	5	14
6月	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
7月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9月	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3
10月	2	1	0	0	0	0	0	0	0	3
11月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
12月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
1月	2	0	1	0	0	0	0	0	0	3
2月	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1

3月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	18	6	3	2	0	1	0	0	10	40

A	国内ボランティアについて	F	募金・寄付
B	海外ボランティアについて	G	フェアトレード
C	ボランティア保険について	H	ソーシャルビジネス・BOP・CSR 等
D	組織運営・活動について	I	その他
E	緊急支援		

3. 主な相談内容

4月	・英語のパンフレット、ボランティア情報について ・大学の教室を借りて説明会を行う際の手続きについて ・学生ボランティア募集依頼 ・ボランティアイベントのチラシ掲示依頼 ・Roote 入会希望、説明会に参加できない / どの部にするか相談 ・ボランティア募集情報の収集 ・2020 オリパラに向けて日本文化発信ボランティアについて ・障害児や不登校の子供に対する学習・教育支援について ・JICA のボランティアに興味がある。 ・海外ボランティア情報が欲しい。 ・ボランティア（サマーキャンプ系）に興味がある。
5月	・EG 本棚募金について、受け取り可能な書籍について知りたい。 ・ボランティア保険の申し込み方法について知りたい。 ・外部 NPO（SET）と青学 VC で協力してイベントを開催する相談はできるか。 ・個人的に、有志メンバーで被災地（福島）を訪問している。協力をお願いすることがあるかもしれないので、挨拶のため来室した。 ・岩手陸前高田を支援する NPO（SET）のメンバーで、Roote とのコラボレーションで陸前高田に関するイベントを行いたい。 ・青学生以外の大学生と日韓交流活動を行っている。広報や資金面で VC に協力してもらえるか。 ・ボランティア募集依頼。楽器（中古品）を海外へ提供する活動をしている。 ・ボランティア募集情報の収集 ・まったく初めてだがボランティアに興味がある。 なにか冊子のようなものはあるか。 ・なんとなくボランティアに興味があるが、どうやって申し込むのか分からない。 ・都内で英語を使ったボランティア活動をやってみたい、単発希望。 ・海外ボランティアに興味があるが情報収集の方法がわからない。 ・地方活性化に関わるボランティアに興味があり、8 月頃に参加したいと考えている。 ・東ボラ夏体験ボランティア説明会の資料がほしい。

6月	・ボランティア保険の加入方法について知りたい。 ・アフリカに興味がある。ボランティアセンターに来れば、色々なボランティア情報があると聞いて来室した。
9月	・国際人権NGOでボランティアをしているが、学内で講演＋ワークショップを開催したい。会場手配など、センターに協力してもらえるか。 ・福岡豪雨被害支援活動について、現地で活動をしたい。どのような情報があるか、いつ参加できるかを知りたい。 ・海外ボランティアを探している。
10月	・ベトナムの衛生事情について。手洗いの習慣化、石鹸の普及率に関心がある。 ・ボランティア情報がほしい。まちづくり、学芸員関連に興味がある。観光やおもてなしボランティアにも興味がある。 ・まちづくりに関するボランティア情報を知りたい。将来公務員を志望しているので、それらに関する情報がほしい。
11月	・VCのHPのボランティア募集情報リストを見て来室した。
12月	・4年生で時間があるのでボランティア活動がしたい。東北の方で何かすぐにできる活動はないか。
1月	・まちづくり、防災・災害、国際に興味がある。国内の災害現場（塩竈）は視察したことがあるので、世界の災害現場を見てみたいと考えている。また、将来、地元の愛知で公務員になりたいと考えているので、まちづくりの活動もしてみたい。長期の活動を希望。 ・ボランティア保険の加入について教えてほしい。 ・子ども食堂の活動に興味があるので情報がほしい。
2月	・ボランティア保険の加入について

青山学院大学ボランティアセンター　メディア掲載実績

No.	媒体	掲載日	掲載先	掲載箇所	内容
1	新聞	2017 3/4	秋田さきがけ新聞	地域　25 面	青学大生ら 10 人　仙北市訪問 冬の暮らし　楽しく、つらく － 4 泊 5 日　高齢者宅で除雪－
2	その他	2017 3/16	広報せんぼく　No.222 (秋田県仙北市広報誌)	・表紙 ・3 ページ	・雪国で心地よい汗 ・大学生が除雪ボランティア　住民との交流図る
3	Web	2017 3/23	College Cafe by *NIKKEI*	skill up- 自己成長	ボランティアの架け橋（1） 被災地出身の僕が選んだ学生団体とは
4	Web	2017 4/12	Web 毎日新聞	大学関連	青山学院大で「くまもとウィーク」開催 熊本地震被災地を支援
5	新聞	2017 4/20	毎日新聞　朝刊	くらしナビ 19 面	心のケア　東北で考えた 青山学院大学ボランティアセンター 学生スタッフ　大平沙穂さん (インタビュー記事)
6	新聞	2017 5/17	産経新聞	企画特集 16 面	ボランティアセンター開設相次ぐ 青学大　「地の塩　世の光」を実践
7	Web	2017 6/5	College Cafe by *NIKKEI*	skill up － 自己成長	ボランティアの架け橋（2） プロジェクトを回す中で、僕が意識していた 2 つのこと
8	Web	2017 8/27	熊本日日新聞	トピック	夏休みの宿題、一緒に 青山学院大生と南阿蘇村の児童
9	新聞	2017 8/16	朝日新聞		阿蘇地域支援へ若い力 青学大・短大生ボランティア 援農や学習指導　泊まり込み
10	新聞	2017 8/30	The Dairy JakartaShimbun (在ジャカルタ日本人向けの新聞)		母校の学生 4 人と交流 大先輩の話に聞き入る
11	新聞	2017 8/19	岩手日報		住民参画促す灯籠作り 大船渡・三陸港まつり (ボラサポ第 1 期採択団体)
12	新聞	2017 8/9	東海新報		大船渡　“光の道”で灯ろう行列を 「三陸港まつり」に向け作成 (ボラサポ第 1 期採択団体)
13	新聞	2017 8/23	西日本新聞（熊本県版）	22 面	被災地の夏休み　学んで、教わって 青学大生が学習支援
14	新聞	2017 8/28	読売新聞	地域　27 面	東京の大学生が学習アドバイス 南阿蘇村

15	Web	2017 9/15	College Cafe by *NIKKEI*	skill up – 自己成長	ボランティアの架け橋（3） 学生だからこそできる、各活動の意義について
16	Web	2017 10/4	「社会教育」のポータルサイト“得る”Café http://social-edus.net/20171004m4r/	CSR・ その他	難民支援プロジェクト「M４R」 学食や体験型ワークショップ by 青山学院大学
17	Web	2017 10/30	産経ニュース http://www.sankei.com/economy/news/171030/prl1710300227-n1.html	経済・プレスリリース	青山祭で“被災地の今”を VR 体験
18	Web	2017 10/30	SankeiBiz	企業 リリース	青山祭で“被災地の今”を VR 体験 ～青山学院大の学生ボランティア団体と TOHOKU360 が VR 動画を出展
19	Web	2017 10/30	College Cafe by *NIKKEI*	skill up – 自己成長	ボランティアの架け橋（4） “信頼関係”が何よりの武器になる
20	Web	2017 11/30	Christian Today, Japan	神学・教育	チャペルで祈りながら弱さを支え合って 青学大ボランティアセンター開設 1 周年記念シンポジウム　阿部志郎氏が講演
21	Web	2017 11/27	College Cafe by *NIKKEI*	skill up- 自己成長	ボランティアの架け橋（5） プロジェクトを通して学んだマネジメント
22	新聞	2017 12/7	朝日新聞	東京　23 面	震災前後　飯館の落差 71 歳避難者の写真展　あすから青学大で職員有志「風化進む今　現実知って」 （ボラサポ第 1 期採択団体）
23	Web	2018 1/17	College Cafe by *NIKKEI*	skill up – 自己成長	ボランティアの架け橋（6） プロジェクトにおける“参加者”という存在
24	Web	2018 2/2	College Cafe by *NIKKEI*	skill up – 自己成長	ボランティアの架け橋（7） 大学では「やりたい・やるべき・やれる」ことを見つけよう！
25	Web	2018 3/9	College Cafe by *NIKKEI*	skill up – 自己成長	ボランティアの架け橋（8） 3.11 東北に思いを寄せて～僕だからこそできること

5.2 ボランティアセンター規定

青山学院大学ボランティアセンター規則

（2016 年 11 月 24 日理事会承認 ）
改正　2018 年 1 月 25 日

（趣旨）

第 1 条　この規則は、青山学院大学学則第 58 条の 3 第 2 項の規定に基づき、青山学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営について必要な事項を定めるものとする。
[青山学院大学学則第 58 条の 3 第 2 項]

（センターの目的）

第 2 条　センターは、本学におけるサービス・ラーニングとしてのボランティア活動の支援を通じて、学生、職員が社会貢献活動を体験することにより自らの学びがより豊かなものとなるよう、それらの者の自発的な社会活動への参加を促すとともに、社会の様々なコミュニティが抱える課題の解決に取り組み、社会貢献活動に積極的に関わることができるサーバント・リーダーを社会へ輩出することを目的とする。

（センターの事業）

第 3 条　センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
(1)　センターの目的を達成するための調査及び企画立案
(2)　ボランティア活動企画に関する情報収集及び管理
(3)　ボランティア活動への参画機会の提供
(4)　ボランティア活動の実施促進
(5)　ボランティア活動に参画する学生、団体の能力強化
(6)　ボランティア活動に関する学内外の専門家及び関連団体との連携の促進
(7)　ボランティア活動の社会的及び教育的効果の評価と勧告
(8)　ボランティア活動をめぐる社会的価値の創出と発信
(9)　ボランティア活動及び市民社会の活性化のための調査研究
(10)　前各号に規定するもののほか、センターの目的達成に必要な事業

（本部及び分室）

第 4 条　センターは、青山キャンパスに本部を置く。
2　センターは、前条に規定する事業のうち相模原キャンパスに係るものを行うため、同キャンパスに分室を置く。

（センターの組織）

第５条　センターにセンター長１名を置く。

2　センターに副センター長１名を置く。

3　センターにボランティアコーディネーター若干名を置く。

4　センターに助手若干名を置く。

5　センターの運営等に係る重要事項を審議するため、センターにボランティアセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

6　センターの運営等に必要な事項を検討するため、運営委員会の下にボランティアセンター実務委員会（以下「実務委員会」という。）を置く。

（センター長）

第６条　センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。

2　センター長は、学長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

3　センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4　センター長は、再任されることができる。

（副センター長）

第７条　副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代理する。

2　前項に規定するもののほか、センター長が、必要があると認める場合は、副センター長にその職務の一部を臨時に代理させることができる。

3　副センター長は、センター長が本学専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

4　副センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5　副センター長は、再任されることができる。

（ボランティアコーディネーター）

第８条　ボランティアコーディネーターは、ボランティア活動に係る専門知識を有する学校法人青山学院（以下「本法人」という。）の専任の職員又は当該職員以外の者（以下「外部の専門家」という。）をもって充てる。

2　ボランティアコーディネーターの職務は、次のとおりとする。

(1)　ボランティア活動に係る情報収集及びその発信に係る支援

(2)　ボランティア活動の機会提供に係る支援

(3)　ボランティア活動の実施に当たっての外部組織の紹介及び当該外部機関との調整

(4)　ボランティア活動に係る学習機会の提供に係る支援

(5)　ボランティア活動における相談に対する対応

(6)　学生スタッフへの指導及び助言

(7)　ボランティア活動に係るプログラム開発及びその支援

(8)　ボランティア活動における本学と外部機関との連携に係る支援

(9)　ボランティア活動に係る本学と外部機関とのネットワーク構築及びその支援

(10)　ボランティア活動に係る記録及び統計資料の作成及びその支援

(11)　前各号に規定するもののほか、センター長がセンターの目的を達成するために必要があると認めた業務

3　ボランティアコーディネーターは、センター長が候補者を推薦し、運営委員会の審議を経て、学長が委嘱する。

4　ボランティアコーディネーターの任期は、1 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5　前項の規定にかかわらず、センター長が特に必要と認める場合は、1 年未満の任期を定めることができる。

6　第 4 項の規定にかかわらず、センターの助手がボランティアコーディネーターとなる場合の任期は、当該助手としての在職期間とする。

7　ボランティアコーディネーターは、再任されることができる。

8　第 1 項の規定により、外部の専門家をボランティアコーディネーターとして委嘱した場合は、学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規の定めにより、報酬・謝礼を支給することができる。
[学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規]

（センター助手）

第 9 条　センターの助手（以下「センター助手」という。）は、学校法人青山学院助手規則（以下「助手規則」という。）の定めるところにより雇用され、センターに所属する本学の専任教員とする。
[学校法人青山学院助手規則（以下「助手規則」という。）]

（センター助手の職務）

第 10 条　助手規則第 4 条第 3 項の規定によるセンター助手の職務は、同条第 1 項に規定するものに加えて、次のとおりとする。
[助手規則第 4 条第 3 項]
(1)　第 3 条に規定するセンター事業に係る業務
[第 3 条]
(2)　前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

（センター助手の資格）

第 11 条　センター助手は、助手規則第 5 条第 1 項の規定により、青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第 2 条第 5 項各号のいずれかに該当するものでなければならない。
[助手規則第 5 条第 1 項] [青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則第 2 条第 5 項各号]

2　前項に規定するもののほか、助手規則第 5 条第 2 項の規定によるセンター助手の資格は、ボランティア活動に係る専門的知識を有する者とする。
[助手規則第 5 条第 2 項]

（センター助手の雇用手続）

第 12 条　センター助手の雇用は、次項から第 4 項までの規定による。

2　センター長は、センター助手の候補者の雇用が適当であると認めたときは運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状及び当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
3　学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。
4　候補者の雇用の決定は、前項の規定により学部長会の審議を経た後、常務委員会及び理事会の承認を得なければならない。

（センター助手の雇用契約の契約期間等）

第 13 条　センター助手の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助手規則の定めるところによる。

（運営委員会の構成）

第 14 条　運営委員会は、次の委員をもって構成する。

(1)　センター長

(2)　副センター長

(3)　大学宗教部長

(4)　ボランティアコーディネーター

(5)　本学の職員の中からセンター長が指名する者　若干名

(6)　事務局長

(7)　学生生活部長

(8)　政策・企画部長

(9)　学務部長

(10)　相模原事務部長

2　センター長は、必要があると認める場合は、前項各号に規定する委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。

3　前項及び第 1 項第 5 号に規定する委員の任期は、1 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4　前項の委員は、再任されることができる。

5　運営委員会に委員長 1 名を置き、第 1 項第 1 号に規定する委員をもってこれに充てる。

（運営委員会の招集、開催、表決数等）

第 15 条　運営委員会は、委員長が招集し、議長となる。
2　運営委員会は、年 2 回以上定期的に開催する。ただし、委員長が必要と認めたときは、随時開催することができる。

3　運営委員会の開催は、委員の 3 分の 2 以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

4　運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。

5　委員長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

（運営委員会の審議事項）

第 16 条　運営委員会は、次の事項を審議する。

(1)　センターの運営等に係る基本方針に関すること。

(2)　センターの予算及び決算に関すること。
(3)　センター長、副センター長及びセンター助手の人事に関すること。
(4)　ボランティアコーディネーターの委嘱、任期等に関すること。
(5)　前各号に規定するもののほか、実務委員会から付議されたこと。

(実務委員会の構成及び開催)

第 17 条　実務委員会は、次の委員をもって構成する。
(1)　センター長
(2)　副センター長
(3)　ボランティアコーディネーター
(4)　学生生活部から　若干名
(5)　学務部教務課から　若干名
(6)　学務部国際交流課から　若干名
(7)　相模原事務部から　若干名
(8)　本学の職員の中からセンター長が指名する者　若干名
(9)　学生スタッフの代表
2　センター長は、必要があると認める場合は、前項各号の委員に加えて、外部の専門家若干名を委員として委嘱することができる。
3　第 1 項第 4 号から第 9 号までに規定する委員の任期は、1 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
4　前項の委員は、再任されることができる。
5　実務委員会は、センター長が必要に応じて招集し、議長となる。
6　センター長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

(実務委員会の業務)

第 18 条　実務委員会は、次の事項について協議し、その執行に当たる。
(1)　センターの事業計画等に関すること。
(2)　センターが行うボランティア活動に係る企画、立案及び実施に関すること。
(3)　外部の組織及び機関との連携に関すること。
(4)　センターの予算の執行に関すること。
(5)　学生スタッフに関すること。
(6)　前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要なこと。
2　センター長は、必要があると認める場合は、前項の規定による協議の結果を、運営委員会に報告する。

(学生スタッフ)

第 19 条　センター長は、必要があると認める場合は、センターに学生スタッフを置くことができる。
2　学生スタッフは、実務委員会の委員の指示により、センターの活動に係る補佐業務に当たる。
3　前項の補佐業務は、無償とする。

4　学生スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、センターの活動への参加を希望する者の中から、センター長が任命する。

（所管）

第 20 条　この規則は、学生生活部が所管する。

2　センターの運営等に係る事務は、学生生活部学生生活課及び相模原事務部学生生活課が所管する。

（改廃手続）

第 21 条　この規則の改廃は、運営委員会及び学部長会の意見を聴いた後、常務委員会で協議し、理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附　則

この規則は、2016 年 11 月 25 日から施行し、2016 年 10 月 1 日から適用する。

附　則（2018 年 1 月 25 日）

この規則は、2018 年 4 月 1 日から施行する。

5.3 ボランティアセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ

■2017 年度ボランティアセンター運営委員

センター長（委員長）	鈴木　眞理　教授
副センター長	高橋　良輔　教授
大学宗教部長	塩谷　直也　教授
ボランティアコーディネーター	佐藤　亜希 澤村　隆太
事務局長	菅野　治男
学生生活部長	内山　吉嗣
政策・企画部長	白濱　哲郎
学務部長	馬場　俊和
相模原事務部長	原　　啓

■2017 年度ボランティアセンター実務委員

センター長（委員長）	鈴木　眞理　教授
副センター長	高橋　良輔　教授
大学宗教部長	塩谷　直也　教授
ボランティアコーディネーター	佐藤　亜希 澤村　隆太
センター長指名	中尾　匠吾
学生生活部学生生活課	斉藤　恭子
学生生活部スポーツ支援課	長谷川　恒平
学務部教務課	堺野　隼人
学務部国際交流課	松木　直子
相模原事務部学生生活課	阿部　竜也
相模原事務部学務課	井上　裕太
学生スタッフ代表	能登　貴一（教育人間科学部教育学科）

■事務所管

学生生活部学生生活課　　斉藤　恭子
森下　博幸
中尾　匠吾

■学生スタッフ

執行部

代表	能登　貴一
副代表	岡林　真琴（年度途中から代表）
東北部リーダー	山﨑　航太朗
地域部リーダー	小島　優希
国際部リーダー	中村　真梨
災害支援部リーダー	三浦　万奈
総務課リーダー	安藤　清香
広報課リーダー	吉澤　萌枝子
渉外課リーダー	吉田　恵美花

学生スタッフ

東北部	地域連携部	国際協力部	災害支援部
天野　日和	秋山　桃子	青木　咲	大平　沙穂
安藤　清香	荒嶋　万理奈	有田　理瑳	岡本　育也
大平　沙穂	飯田　遥	大森　蘭	宇佐田　和子
岡林　真琴	石瀬　結香	岡本　佳奈美	鏡　詩織
鏡　詩織	石田　佳那	石原　晴美	櫻井　有沙
北原　海斗	大山　明	鎌田　優	定由　諒
小林　佳奈子	小島　優希	佐々木　梓乃	東海林　隼
小湊　紗智乃	斎藤　健太	須藤　聖佳	竹内　ゆきの
古村　花織	定由　諒	高橋　里緒	津嶋　優奈
近藤　麻央	佐野　真理香	本間　健太郎	内藤　江里
櫻井　有沙	菅田　十和子	中村　真梨	長尾　佳純
佐藤　果歩	谷　茉奈美	西溜　夏美	古川　直人

茂野　みさき	原子　智気	野田　祐奈	明日　楓
染谷　彩	檜垣　朱里	能登　貴一	三浦　万奈
津嶋　優奈	古川　直人	森本　優里	吉年　由加里
藤浪　公貴	益山　りさ	安村　真緒	
三森　純奈	三上　峻	ヤマウチ　恵凛	
柳田　泰樹	持丸　雄太		
山﨑　航太朗	吉田　恵美花		
山本　有紀	山下　誠		
吉澤　萌枝子	渡邊　菜摘		
渡辺　諒真			

5.4 ボランティアセンターを支えてくださった皆さま

■提携・協力団体

（順不同・敬称略）

東京都社会福祉協議会　東京ボランティア・市民活動センター
渋谷区社会福祉協議会
しぶやボランティアセンター
東京都生活文化局
渋谷区役所都市整備部
株式会社 IVYCS
宮城県塩竈市
塩竈市教育委員会
陸前高田ドライビングスクール
社会福祉法人燦々会あすなろホーム
陸前高田市立気仙中学校
二又復興交流センター
陸前高田市復興支援連絡会
南阿蘇村教育委員会
東海大学「阿蘇復興への道」
一般社団法人九州学び舎
NPO 法人阿蘇エコファーマーズセンター
秋田県仙北市
仙北市教育委員会
岡山県総社市
総社市教育委員会
一般社団法人ならはみらい
カトマンズ市役所
Food for Life Nepal
ジャカルタお掃除クラブ（JOC）
DAREDEMO HERO
シキホールエンジェル
NPO 法人難民支援協会
幡ヶ谷社会教育館
恵比寿社会教育館
日本財団学生ボランティアセンター
独立行政法人国立青少年教育振興機構
スタディツアー研究会

■寄付・助成をいただいた皆様

青山学院大学後援会
城西ロータリー
Yahoo! 基金
一般財団法人　学生サポートセンター

■その他お世話になった皆さま

NPO 法人セカンドハーベスト・ジャパン
初台キッズ
浦戸諸島各地区の皆さま
NPO 法人浦戸アイランドクラブ
NPO 法人 High-Five
宮城県塩竈市立第一、第二、第三、玉川、月見ヶ丘、杉の入小学校
藤倉児童館
塩竈市魚市場
塩釜水産物仲卸市場
塩竈市適応指導教室けやき教室
塩竈市学びの支援センター「コラソン」
桂島海水浴場　海の家「かもめん家」、「たからや」
野々島フラワーアイランド
宮城県塩竈市第一中学校
陸前高田グローバルキャンパス
TOHOKU360（合同会社イーストタイムズ）
熊本県阿蘇郡南阿蘇村　南阿蘇中学校、南阿蘇西小学校、
寺子屋　ちょうよう保育園
久木野地区学童保育
木ノ内農園
ノースグレープファーム
野田いちご園
南阿蘇オーガニック
大津いちご園
はな阿蘇美
波野農場
榊農園
社会福祉法人　慈永会
地獄温泉　河津社長

発行日　2018年7月30日

発行者　青山学院大学ボランティアセンター